

シ登簿ノ順次ニ從テ之カ試験ヲ爲スヘシ ○第十三條 此規則ニ從テ水先免狀ヲ受ケタル外國人ハ其執業上ニ限リ日本帝國内何レノ海岸ト雖モ上陸シ且又其出發地へ陸路歸ルヲ得ルノ特許ヲ與フヘシ ○第十四條 本條ハ解釋ノ部ニアリ ○第十五條 水先料ハ別表ニ記ス金高ニ超過スヘカラス但シ表中記載セサルモノハ其距離ノ遠近ニ從テ船長ト水先人ノ間ニ相當ノ約束ヲ以テ定ムヘシ ○第十六條 二人以上ノ免許水先人同時ニ於テ船舶ノ嚮導ヲ申入レ又ハ其信號ヲ爲スルハ最初現ニ乗船シタル者其嚮導ヲ爲シ其水先料ヲ收領シ得ヘシ ○第十七條 免許水先人水路嚮導専用ノ水先船ハ第十九條第一節第二節ニ示セル式ノ如ク之ヲ製シ其免狀ヲ農商務省ニ願出ツヘシ農商務省ハ檢査ノ上其免狀ヲ與フヘシ但シ此免狀ハ水先人免狀同様其効一ケ年ニ限ルモノトシ年々其書換ヲ願出ツヘシ ○第十八條 各免許水先船ハ免許ヲ得タル區域内ニ於テ其水路嚮導用ノ爲メニハ港灣稅噸稅燈臺稅等ノ諸稅ヲ免スヘシ ○第十九條 各水先船ハ左ノ徵候ヲ以テ區別スヘシ 第一 水先船ノ外部ハ總テ黑色タルヘシ 第二 船尾及ヒ大帆ノ上部ニ於テ國字及ヒ羅馬字ニテ免許水先船ノ文字並ニ其番号ヲ明瞭ニ書スヘシ 第三 免許水先船ニ免許水先人ノ乗込アルキハ桅上或ハ船首或ハ旗竿若クハ他ノ認メ易キ場所ニ於テ日出ヨリ日没マテ水先旗ヲ懸揚スヘシ但シ水先旗ハ明治十年一月甲第一號海軍省布達ニ照準スヘシ 第四 明治十三年九月第三十九號布告改正 水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スルキハ他船ニ用フル燈火ヲ掲ケス只橋頭ニ於テ周回諸方ヨリ見ユヘキ白燈一箇ヲ掲ケ且十五分時ヲ超ヘサル間歇ヲ以テ閃光一個又ハ數個ヲ發スヘシ 水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事セサルキハ他船ト同様ノ燈火ヲ掲クヘ

シ ○第二十條 日中ニ於テ左ニ記載スル信號ヲ表示スルキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ 第一 前橋ニ於テ其船ノ船首旗 英語「シ」 又ハ國旗ヲ掲揚スル事 第二 万国普通ノ水先信號PTノ符字ヲ掲示スル事 夜間ニ於テ左ノ信號ヲ同時若クハ別時ニ表示スルキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ 第一 十五分時毎ニ青燈ヲ掲出スル事 第二 須臾ノ間歇ヲ以テ凡ソ一分時ノ間透明ナル白燈ヲ上甲板ノ舷部ニ於テ射發スル事 ○第二十一條 各免許水先人ハ其免狀ハ勿論此規則ノ寫チ一通ツ、交付スベシ故ニ其筋ノ官吏又ハ雇主ヨリ其書類ノ閱覽ヲ要スルキハ直ニ之ヲ示スベシ若シ之ヲ拒ムキハ農商務省ニ於テ其執行ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ ○第二十二條 此免狀ハ他人ニ貸與シ或ハ讓與スベカラス若シ貸與シ或ハ讓與スルキハ農商務省ニ於テ其免狀ヲ取上クベシ ○第二十三條 農商務省ニ於テ免許水先人其本分ノ職務ニ堪ヘサルカ若クハ亂醉又ハ不行跡アルカ或ハ故ナクシテ其職務ヲ執ルコトヲ嫌ヒ若クハ之レヲ怠リタルコトアリト思惟スルトキハ同省ヨリ吏員ニ命ジテ之ヲ審問セシメ其情狀ニ隨ヒ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ (水先料一覽表畧ス)

第三編 公益ニ關スル罰則

第二十六章 鐵道

第一款 鐵道犯罪罰例 明治十三年三月十日 第三百一號布告

壬申第四百四十七號布告鐵道犯罪罰例別紙ノ通改正相成候條此旨布告候事

第一節 鐵道掛ノ怠惰

第一條 鐵道掛ノ者總テ鐵道ニ關スル事務取扱中酔ニ乘シ無狀ヲ現スニ於テハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニヨリ鐵道旅客ノ危難トモナルベキ取扱ヒアルトキハ其事情ニ依リ五百圓以内ノ罰金又ハ三月以内ノ懲役又ハ禁獄ニ處ス

一 本條ノ解

二 鐵道掛ノモノ其職務ヲ怠リ現ニ旅客ノ危害ヲ生セシメタルハ

- 鐵道犯罪罰例
- 第一條 本文ハ下段ニアリ
- 第二條 同上
- 第三條 同上
- 第四條 同上
- 第五條 同上
- 第六條 同上
- 第七條 同上
- 第八條 同上
- 第九條 同上
- 第十條 同上
- 第十一條 同上
- 第十二條 鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照ラシ罰ヲ科スルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコトアルヘシ

但其價金ノ追徴モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フ

トキハ法官ニ於テ追徴スベシ

○第四百四十六號達 明治五年五月四日

第六十一號布告鐵道略則別紙ノ通改正候條此旨相達候事

但開局日限ノ儀ハ治

定ノ上追テ可相達候

事 鐵道略則

第一條 賃金ノ事

何人ニ不限鐵道ノ列車ニテ旅行セシト欲スル者ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ル可シ然ラザレ

ハ如何ニ處斷スヘキヤ

(一)○本條ハ鐵道掛ノ事務ヲ奉スル者ニ對スル制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ其掛員タル者職務取扱中飲酒ヲ爲シ酔ニ乘シテ鐵道掛タルベキ者ノ体面ヲ汚損スヘキ行爲ヲ現スニ於テハ二十五圓以下ノ罰金ニ處セラルヘキナリ若シ酔ニ乘シテ職務ヲ怠リ或ハ輕忽ノ取扱ヲ爲シテ之カ爲メ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱ヲナシタルモノハ其情狀ニヨリ五百圓以内ノ罰金ニ處セラル、乎又ハ三ヶ月以内ノ懲役或ハ禁獄ニ處セラルヘキナリ然レトモ敢テ飲酒ヲ禁スルニ非サルヲ以テ縱令ヒ飲酒ヲ爲スモ無狀ヲ現サス若シハ職務ヲ怠リテ輕忽ノ舉動ヲ爲シ旅客ノ危難トモナルヘキ取扱ヲ爲サ、ルトキハ之ヲ罰スルコトヲ得サルナリ

明治十二年三月第十二號布告ヲ以テ明治六年三月第一號布告鐵道犯罪罰例中禁錮ヲ禁獄ト改ム云々ト改正セラレタルヲ以テ總テ本則

ハ決シテ列車ニ乗ル可
カラス
第二條 手形検査及ヒ
渡方ノ事
手形検査ノ節ハ改テ受
ケ取集ノ節ハ渡スベシ
若シ検査ノ節手形ヲ出
サス或ハ取集ノ節手形
ヲ渡サ、ル者ニ最切發
車ノ「ステーション」ニ
シヨソトハ列車ノ立
場ニテ旅客ノ乗下リ荷
物ノ積ミ下ロシヨリ
ヲ爲ス所ヲ云フヨリ
ノ賃金ヲ拂ハシムヘシ
尤モ途中ヨリ乗來リシ
者ニテ其確證判然タル
ハ其乗リタル場所ヨ
リノ賃金ヲ拂ハシムヘ

中禁錮ノ文字ハ禁獄トシテ見ルベキナリ然ルニ明治十四年第七十二
号公布第二條ニ凡ソ禁獄及ヒ禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日
以下ヲ拘留ニ處スト定メラレタルカ故ニ本則中禁獄ノ文字ハ更ニ輕
禁錮ト改マリタルモノナリ又同號布告第一條ニ凡ソ懲役ハ十一日以
上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ストアルヲ以テ本則中懲役ハ
重禁錮ト改マリタルモノナリ故ニ本條ノ如キハ三ヶ月以内ノ重禁錮
又ハ輕禁錮ニ處ストアルコト同シケレハナリ以下倣之
(二)〇或問テ曰ク本條ニハ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱云々トア
ルカ故ニ未タ旅客ノ危難ヲ生セサル場合ヲ定メタル者ナラン果シ然
ラハ現ニ其危難ヲ生シタルハ如何ニ處斷スヘキヤ曰ク然リ本條ハ
將ニ危難ヲ生セントスル場合ヲ規定シタルモノナレバ既ニ其事ノ生
シタル以上ハ本條ニ依リテ罰スルノ限リニ非サルナリ何トナレハ則
チ刑法ニ左ノ正條アレハナリ

第三條 途中「ステーション」ニ
シヨソニテ乗組並ニ
手形ノ事
途中「ステーション」ニ
於テ列車中餘地ノ有無
ニ應シテ乗組ムヲ得
ヘシ若シ其手形ヲ買取
リシ總人數ヲ容ルヘキ
餘地ナキハ其中ニテ
最遠キ地ニ赴ク手形所
持ノ人丈ケ先ツ乗組ム
ヲ得ヘシ若シ又同里
程ノ地ニ赴ク客數人ア
ル時ハ其手形ノ番号ノ
順序ヲ以テ乗ルヲ得
ヘシ

刑法第三百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ
人ヲ死ニ致シタルモノハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
同 第三百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癡篤疾ニ致シタル者ハ
十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
同 第三百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタ
ル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
右ノ如ク刑法ニ於テ其刑ヲ定メラレタルカ故ニ其危難ノ大小輕重ニ
從テ其刑ニモ亦輕重ノ差ヲ生スヘキモノナリ
讀者ハ本條ノ刑ト刑法第三百十七條以下ノ刑トヲ對照スレハ果シ何
等ノ感ヲ生スル乎其危難ノ將ニ發生セントシテ未タ發生セサルモノ
ハ之ヲ其既ニ發生シタルモノニ比スルニハ害ノ小ナルヲ知ルヘシ然
ルニ其刑ノ如何ヲ問ヘハ却テ其害ノ未タ發生セサルモノニ重キモノ
、如シ然リト雖モ此點ニ付テ論議スルハ余輩解法者ノ責任ニアラサ

第四條 偽欺ノ者扱方ノ事

何人ニ限ラズ賃金ヲ拂ハス列車ニテ旅行セシト計リ或ハ遂ニ旅行シ又ハ其拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乗ラズシテ更ニ上等ノ車ニ乗組ミ又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リ遂ニ其賃金ヲ免レント計リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルヘキ場所ニ至リナカラ車ヨリ下リ去ルコトヲ肯シセス其外如何ナル仕方ニテ

ル等以テ收テ茲ニ之ヲ論セザルナリ讀者之ヲ諒セヨ

第二節 氣車賃金上ノ犯則

第二條 規則第四條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ二十

五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス

一 本條ノ解

二 鐵道客則第四條ノ解

(一)○本條ハ鐵道客則第四條ニ對スル制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ該條ヲ犯シテ不正ノ所爲ヲ行ラタルモノハ二十五圓以内ノ罰金又ハ

二十日以内ノ禁獄即チ輕禁錮ニ處セラルヘキモノナリ
(二)○鐵道客則第四條(明治五年五月四日第四百十六號布告)何人ニ不限賃金ヲ拂ハス列車ニテ旅行セント謀リ或ハ遂ニ旅行シ又ハ其拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乗ラズシテ更ニ上等ノ車ニ乗リ組又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リ遂ニ其賃

モ賃金拂方ヲ逃ントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシ

第五條 列車運轉中出入禁止ノ事

總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルコト又ハ車内旅客ノ居ルベキ場所ノ外ニ乗ルコトヲ禁ス

第六條 疝瘡等ノ病人ヲ禁止スルコト

疝瘡及ヒ諸傳染病ヲ煩フ者ハ乗車ヲ禁ス若シ此等ノ病人車中ニ在ラハ見當リ次第鐵道掛リノ者ヨリ車外並ニ鐵道掛外へ退去セシムヘシ

金ヲ免レント謀リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルヘキ場所ニ到リナカラ車ヨリ下リ去ルコトヲ肯シセス其外如何ナル仕方ニテモ賃金拂方ヲ逃レントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシトアリ故ニ何人タリトモ氣

車ニテ旅行セント欲スルモノハ必ス其規則通ノ賃金ヲ拂ハサルヘカラス然ルニ之ヲ拂ハスシテ旅行セント謀リテ未タ遂ケサルノ際其所爲ノ發覺シタル乎或ハ其犯罪ヲ遂ケテ旅行チ爲シタル乎又ハ其拂ヒシ賃金高ニ相當スル車ニ乗ラズシテ故ラニ上等ノ車ニ乗リ組(例ヘハ下等ノ賃金ヲ拂フテ中等若クハ上等ニ乘リ又ハ中等ノ賃金ヲ拂フテ上等ニ乗ルノ類)又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キテ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リナカラ其賃金ヲ免レント謀リ又ハ已ニ拂ヒタル賃金ニテ其目的トスル場所ニ到着シナカラ車ヨリ下ルコトヲ承知セサル者ハ勿論其他如何ナル所爲ト雖モ尙クモ其目的氣車賃金ヲ免レント謀ルニ在ルモノハ即チ第二條ニヨリテ二十五圓以内ノ罰金或

第七條 吸煙並ニ婦人部屋男子出入禁止ノ事
 何人ニ限ラズ「ステーション」構内吸煙ヲ禁セシ場所並ニ吸煙ヲ禁セシ車内ニテ吸煙スルヲ許サズ且婦人ノ爲メニ設アル車及ヒ部屋等ニ男子妄リニ立入ルヲ許サズ若シ右等ノ禁ヲ犯シ掛リノ者ノ戒メヲ用ヒサル者ハ車外并ニ鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ

第八條 醉人及不行狀人扱方ノ事
 何人ニ限ラズ總シテ列

ハ三十日以内ノ輕禁錮ニ處セラルベキモノナリ然レトモ上等ノ車タルヲ知ラズシテ之ニ乗組ミタルトキハ毫モ賃金ヲ免ルルノ意ナキモノナレハ之ヲ罰セサルモノナリ然レトモ其増賃ハ必ス拂ハサルヘカラサルナリ又其既ニ下ルヘキ場所ヲ過キ遠キ場所ニ至ルトモ速ニ其増賃ヲ拂ヒタルキハ是亦之ヲ罰セサルモノナリ

第三節 列車運轉中出入ヲ禁ス
第三條 規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ十圓以内ノ罰金ニ處ス

一 本條ノ解
 二 畧則第五條ノ解

(一)本條ハ鐵道畧則第五條ニ對スル制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ該條ヲ犯スモノハ十圓以内ノ罰金ニ處セラルヘキモノナリ

(二)○鐵道畧則第五條ニ總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルコト又ハ車内

車乗組中又ハ「ステーション」並ニ鐵道構内
 ニテ醉ニ乘シ妄狀ヲ現ハス者又ハ不真ノ行狀ヲ爲ス者ハ鐵道掛リノ者ヨリ車外及ヒ鐵道構外ヘ直ニ退去セシムヘシ

第九條 鐵道ニ屬スル物品ヲ毀損スル者ノ事
 何人ニ限ラズ猥リニステーション「其他鐵道構内ニ標識揭示セル書附等ヲ剝シ或ハ破リ又ハ列車ノ番号札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建家

旅客ノ居ルヘキ場所外ニ乗ルヲ禁ストアリ是レ乗客ノ安全ヲ保護セントスルノ旨趣ニ出ルモノナリ故ニ乗客ハ列車運轉中ニ出入ヲナシ若クハ乗客ノ居ルベキ一定ノ場所ノ外擅ニ他ノ場所ニ乘込ムヲ許サ、ルモノナリ然ルニ之ヲ犯シテ出入ヲナシ又ハ乗ルベキ場所外ニ乘リタルモノハ本條ニヨリテ十圓以内ノ罰金ニ處セラル、モノナリ然リト雖モ瀛車ノ神速ナル出ルモノアルモ決シテ他ヨリ入り込ムヲ得サルベシ

第四節 傳染病者ノ乗車ヲ禁ス
第四條 規則第六條ノ禁ヲ犯スモノハ拂ヒタル賃金ヲ没シ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

一 本條ノ解
 二 畧則第六條ノ解○傳染病ニ罹リタルモノ乗船セントシテ未ダ遂ケサルニ當リ發覺シタルトキハ之ヲ罰スベキ乎○乗車ノ途

牆柵其他鐵道一切ノ附屬品ヲ毀損スル者ハ都テ法ニ隨テ所置スベシ

第十條 機關車等ハ乘込ヲ禁スル事

機關方并ニ火夫ノ外ハ其筋ノ許シテ得スシテ機關車又ハ炭水車ニ乘リ或ハ乘ラント爲ス可カラズ且ツ車長及ヒ車掛リノ者ノ外其筋ノ許テ得スシテハ荷物車又ハ旅客ノ爲メニ設ケサル車ニ乘リ又ハ乘ラント爲スヘカラス若シ此禁ヲ犯シ鐵道掛リノ者ノ制止ヲ用ヒサル者ハ

中ニテ傳染病ヲ發シタルモノハ如何スヘキヤ

(一)〇本條ハ鐵道客則第六條ニ對スル制裁ヲ規定シタルモノニシテ即チ其拂ヒタル賃金ヲ沒收シタル上仍ホ二十五圓以内ノ罰金ニ處セラ

ルヘキモノナリ

(二)〇鐵道客則第六條ニ疔瘡及ヒ諸傳染病ヲ煩フモノハ乘車ヲ禁ス若シ之レ等ノ病人車中ニ在ラハ見當リ次第鐵道掛ノ者ヨリ車外並ニ鐵道構外ヘ退去セシムベシトアリ是レ一般公衆ノ健康ヲ保全スルノ旨趣ニ出ルモノトス何トナレハ若シ車中ニ傳染病人アリテ車中ノ者ニ傳染スルトキハ獨リ其者共ニ止マラス大ニ一般人民ニ傳染セシムルノ媒介ヲ爲セハナリ然ルニ傳染病人此ヲ犯シテ乘車シタルトキハ本條ニヨリテ其賃金ヲ沒收シタル上仍ホ二十五圓以内ノ罰金ニ處セラ

ルノナリ加之斯クノ如キモノハ見當リ次第鐵道掛ノ者ヨリ車外ハ勿論鐵道構外ヘ退去セシムヘキナリ

直チニ其場ヨリ退去セシムヘシ

第十一條 鐵道地所ニ妄リニ立入者取扱方ノ事

何人ニ限ラス一ステーションノ一又ハ鐵道構内ニ妄リニ立入者ハ鐵道掛ノ者ヨリ即刻構外ヘ立去ラシムヘシ

第十二條 旅客ノ荷物紛失毀損取扱方ノ事

旅客手廻リ荷物其外所持ノ品タリト總テ之カ爲ニ別段ニ賃金ヲ拂ヒ其請取証書ヲ取置カサルハ若シ紛失毀損等ヲ

〇或問テ曰ク傳染病ニ罹リタルモノ乘車セントシテ未タ遂ケサルニ當リ發覺シタルトキハ之ヲ罰スヘキヤ曰ク之ヲ罰スルノ限リニ非サルナリ何トナレハ客則第六條ニ於テ乘車ヲ禁ストノミアリテ未遂犯ノ特例ヲ定メサルカ故ニ乘車シタルモノニアラサレハ罰スヘカラサルハ勿論ナリ

〇或問テ曰ク乘車ノ途中ニ於テ傳染病ヲ發シタルモノハ如何ニ處分スヘキヤ曰ク本條ハ自ツカラ傳染病ニ罹ルコトヲ知リナカラ之ヲ隠シテ乘車スルモノヲ罰センカ爲メニ設ケタルモノニシテ乘車ノ途中忽然發病シタルモノ、如キハ本人ニ於テ毫モ罪ノ責ムヘキナキモノトス何トナレハ傳染病ノ如キハ其發生ノ甚ク神速ニシテ且ツ不意ニ出ルモノナレハ豫シメ之ヲ知ラント欲スルモ得ヘカラス斯クノ如キモノモ仍ホ罰セントスルハ之レ難キヲ以テ人ヲ責ムルモノト謂ハサルヲ得ス立法者豈ニ斯ク如キ不當不理ノ法ヲ設クルアラシヤ故ニ斯

ルトモ政府ニ於テ關係セサルヘシタトヒ賃金ヲ拂ヒ証書ヲ取置トモ其毀損紛失等ヲ償フハ只旅客自用衣服ノミニ止リ且ツ賃金モ五十圓ヲ過クルコトナシ

第十三條 金高及ヒ大切ノ物品紛失毀損ニ關不關アル事

金銀貨紙幣郵便切手爲替會社通用券爲替手形約定證書金銀請拂証書地所建家沽券諸繪圖書畫古器金銀玉石鍍金及諸彫鐫細工物時計類其餘衣類或ハ玩佩物ノ粧

クノ如キモノハ決シテ罰金ヘホラサルモノトス然レトモ之ヲ其儘乗車セシムルトキハ他ニ傳染ノ恐レアルカ故ニ行政上ノ處分ヲ以テ車外ニ退去セシムルモノナリ

第五節 吸煙及婦人部屋ノ事

第五條 規則第七條ノ禁ヲ犯スモノハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ拾圓以內ノ罰金ニ處ス

一 本條ノ解

二 零則第七條ノ解

(一)○本條ハ鐵道零則第七條ニ對スル制裁ヲ規定スル者ニシテ若シ其禁ヲ犯シタルモノアラハ既ニ拂ヒタル賃金ヲ沒收シタル上仍ホ十圓以內ノ罰金ニ處セラルヘキモノナリ且ツ本條ニ其賃金ヲ沒ストアル以上ハ其者ノ乗車ヲ許サハルコト明ラカナリトス何トナレハ若シ其者ノ乗車ヲ許スニ於テハ其賃金ハ乗車セシムカ爲メニ取立テタル者ニシ

飾ニ混作ノ品類及硝子器類陶器漆器酒類蠶繭絹布生熟糸等ノ品物運送方ニ付テハ其品柄並價高等ヲ明白ニ其掛ヘ申立テ増賃金ヲ拂ヒ紛失毀損等請合シ分ノ外總テ政府ニ於テ之ヲ償ハス

第十四條 牛馬獸類運送ノ事

牛馬及ヒ其他ノ獸類ヲ運送スルニ其持主或ハ送リ人ヨリ其獸類ノ價ヲ運送掛ヘ申出相當ノ増賃金ヲ拂ヒ請合證書ヲ取置シヘシ若シ増賃

テ之ヲ取立ルハ決シテ沒收ニアラサレハナリ況ンヤ零則第七條末文ニ其者ヲ退去セシムルノ明文アルニ於テナヤ

(二)○鐵道零則第七條ニ何人ニ限ラスステーション構内吸煙ヲ禁セシ場所並ニ吸煙ヲ禁セシ車内ニテ吸煙スルコトヲ許サス且婦人ノ爲メニ設ケアル車及ヒ部屋等ニ男子妄リニ立入ルコトヲ許サス若シ右等ノ禁ヲ犯シ掛ノ者ノ戒ヲ用ヒサルモノハ車外並ニ鐵道構外ニ直チニ退去セシムベシトアリ是レ吸煙ヲ禁スルハ火災ノ難ヲ豫防センカ爲メナリ男女室ヲ別ツハ倫義ヲ亂ル者アランテ恐レテナリ然ルニ「ステーション」構内又ハ車内ニテ吸煙ヲ禁セシ所ニ於テ吸煙シ或ハ婦人ノ爲メニ特ニ設ケタル車及ヒ部内等ニ男子妄リニ立入リタル場合ニ於テ鐵道掛ノ者之ヲ戒メタルニ聽カスシテ仍ホ吸煙シ又ハ婦人ノ室ニ入ルモノハ其賃金ヲ沒收シタル上十圓以內ノ罰金ニ處セラル、ナリ然レトモ吸煙ヲ禁セサル所ニ於テ吸煙セシキ又ハ婦人ノ爲メニ別室

金ヲ拂ハス請合ヲ爲サ
 獸類紛失損害アル牛馬
 一疋ニ付金二拾圓以上
 馬一疋或ハ乳牛一疋ニ
 付金五拾圓以上羊或ハ
 豚一疋ニ金五圓以上ヲ
 政府ニ於テ償フコトナシ
 第十五條 砲發ヲ禁ス
 ル事
 何人ニ限ラス車内ハ勿
 論鐵道線及ヒ其他構内
 ニテ砲發スルヲ禁ス
 第十六條 爆發質及ヒ
 危害物運輸ヲ禁スル事
 鐵道線ヨリ追テ公告ス
 ルマテハ火藥及ヒ

シ設ケテサレヨリ男女混入シタルハ或ハ格段ナル事故アリテ婦
 人室ニ入りタルハ又ハ鐵道掛ノ者戒告ヲ爲サルトキハ之ヲ罰セサ
 ルモノナリ
 右ノ如クナルハ故ニ本條ノ違犯者トシテ罰セシムルハ必ス先ツ鐵道掛
 ノ者ヨリ戒告スルヲ要ス若シ之ヲ戒告シテ其命ニ從ハサルニ於テハ
 始メテ本條ノ罪ヲ組成スルモノナレハ縱令犯人アルモ一度モ戒告セ
 サルトキハ決シテ罰スヘカラスナリ

第六節 醉人及不行狀人ノ處分

第六條 規則第八條ニ記スル所行ヲ爲ス者ハ拂ヒタル
 賃金ヲ沒シ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁
 獄ニ處ス

一 本條ヲ解
 二 零則第八條ヲ解

トローリヤムニケロシ
 シチイルニトルベシタ
 イ 石炭油 硝性並ニ爆
 發質燃燒質等ノ物品ハ
 運輸セサルベシ
 第十七條 荷物目錄ヲ
 渡スヘキ事
 運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛
 ノ者ヘ引渡シ又ハ受取
 ノ度毎ニハ右荷主或ハ
 宰領人ヨリ其品柄數量
 及ヒ姓名ヲ記シテ掛リ
 ノ者ヘ差出スベシ
 第十八條 物品並ニ畜
 類損害償方定限ノ事
 鐵道ニテ運送スル物品
 並ニ畜類紛失損害アリ

(一) 〇本條ハ鐵道零則第八條ニ定ムル所ノ制裁法ヲ規定スルモノニシ
 テ若シ之ヲ犯スモノアラハ即チ乗車客ノ既ニ拂ヒタル瀛車賃ヲ沒收
 シタル上仍ホ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄即チ輕禁錮
 ニ處セラルヘキモノナリ

(二) 〇鐵道零則第八條ニ何人ニ不限總シテ列車乘組中又ハ「ステーション」
 ヲ並ニ鐵道構内ニテ醉ニ乘シテ妄狀ヲ現ハス者又ハ不良ノ行狀
 ナシ者ハ鐵道掛ノ者ヨリ直チニ退去セシムベシトアリ故ニ何人ト
 雖モ乘車セント欲スル者ハ亂醉シテ粗暴ノ舉動ヲナシ又ハ惡事ヲ行
 フベカラズ然ルニ之ヲ犯シテ粗暴ノ所爲ヲ行ヒ若クハ惡事ヲ行フタ
 ルモノハ本條ニヨリテ其賃金ヲ沒收セラレタル上仍ホ二十五圓以内
 ノ罰金若クハ三十日以内ノ輕禁錮ニ處セラルヘキナリ
 〇本條ニ不良ノ行狀ヲ爲スモノハ云々トアルヲ以テ凡テ吾人ノ見テ
 以テ不良即チ惡事ト爲スモノハ悉ク舉テ以テ之ヲ罰セザルベカラサ

トモ鐵道掛リノ怠惰疎漏ヨリ起リシニ非レハ政府ニ於テ之ヲ償フコトナシ

第十九條 荷物運送賃金ノ事

何人ニ限ラス荷物運賃ノ催促ヲ受ケ尙ホ拂ハサルハ其荷物ノ全部又ハ部分ヲ留置キ若シ又其荷物既ニ他所ニ運送セシキハ其後同人附屬ノ荷物鐵道掛リへ送り來ルコトアルキハ之ヲ留置キ同人へ告知ラセタル上ニテ滯金高程ノ品ヲ入札公賣シ其滯金

ルカ如シト雖モ本條ニ所謂不良ノ行狀トハ斯クノ如ク汎博ナルモノ

ニ非ス其行爲ノ法律ヲ犯シ害惡ヲ與フルニ非サレハ決シテ罰スヘカラスト信スルナリ然ラスノハ吾人ハ鐵道構内ニ在リテハ一事ヲ爲シ一言ヲ發スル毎ニ戰々慄々其手足ヲ措ク所ナキニ至ラン是レ決シテ法律ノ精神ニ非スト信スルナリ又本條ニハ賃金ヲ沒收シ云々トアレモ是レ其既ニ賃金ヲ拂ヒ終リタル場合ニ限ルモノニシテ若シ未ク其賃金ヲ拂ハサル場合ニ於テ本條ノ罪ヲ犯シタルトキハ沒收スヘキ賃金アラサルヲ以テ唯罰金若クハ輕禁錮ニ處スルニ止マルモノナリ

第七節 鐵道ニ屬スル物品ヲ損毀スル者

第七條 規則第九條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ五十圓以内ノ罰金又ハ六週間以内ノ懲役或ハ禁錮ニ處ス

一 本條ノ解

二 略則第九條ノ解 ○氣車ヲ顛覆セント謀ルモ其効ナキハ如何

ト其諸入費ト引取殘金殘品ヲ同人へ返スヘシ又時宜ニ依リ右ノ取計ヒヲ爲サス法官ニ訴ヘテ賃金並ニ入費等ヲ取立ルコトモアルヘシ

第二十條 規則ニ隨ハサル者ノ事

何人ニ限ラス諸事前條ノ規則ニ隨ハスノハ乘車及ヒ荷物ノ運送ヲ許サルヘシ

第二十一條 規則等ノ變革布達ノ事

此規則中變革及加除アルルハ遍ク告達スヘシ

第二十二條 荷物運送

(一) ○本條ハ鐵道署則第九條ニ對スル制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ該條ヲ犯スモノハ五十圓以内ノ罰金又ハ六週間即チ四十二日以内ノ懲役(重禁錮)或ハ禁錮(輕禁錮)ニ處セラルヘキモノナリ

(二) ○鐵道署則第九條ニ何人ニ不限限リニステ「ヨ」其他鐵道構内ニ標識揭示セル書付等ヲ剝シ或ハ破リ又ハ列車ノ番號札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建家牆柵其他鐵道一切ノ附屬品ヲ毀損スルモノハ都テ法ニ從テ所置スベシトアリ故ニ何人ニ不限故意ヲ以テ「グ」テ「シヨ」其他鐵道構内ニ標識揭示セル書付等ヲ剝キ取リ又ハ列車ノ番號札ヲ取除キ或ハ列車ノ燈火ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建家牆柵其他何品ヲ論セス總テ鐵道ニ屬スル附屬品ヲ毀損シタルモノハ本條ニ依リテ處罰セラル、モノナリ然レトモ誤テ之ヲ毀損破壞シタルモノ、如キハ毫モ罪ノ歸スベキナキヲ以テ其損害ヲ賠償セシムルハ格別之ヲ罰スルコトヲ得サルナリ

引請方ノ事
諸荷物ノ運送ヲ引請ル
ルハ列車中餘地ノ有無
ニ應スヘシ

第二十三條 此規則ヲ
施行スルカ爲メ夫々
法官ニ訴ヘ犯罪人罰シ
方等ノ裁判ヲ乞フ手順
ハ鐵道頭或ハ鐵道支配
人ノ間ニテ其取扱アル
ヘシ

第二十四條 旅客並ニ
荷物ノ運賃ハ時宜ニ隨
ヒ變革アリト雖モ其變
革毎ニハ二週日前ニ告
達スヘシ尤鐵道頭鐵道
支配方及ヒ運輸頭取ノ

間ニ於テ前條ノ如キ告
達ナク臨時常例ヨリ下
等ノ運賃ヲ以テ別ニ列
車ヲ仕立ルコトモアルヘ
シ
第二十五條 此規則來
ル五月七日ヨリ施行ス
ヘシ
右之條々此度確定候事

○本條ニ於テ注意ヲ要セサルヘカラサルモノアルヲ知ルナリ何トナ
レハ本條ニ於テハ零則第九條ヲ犯スモノハ悉ク五十圓以内ノ罰金又
ハ四十二日以内ノ懲役又ハ禁獄ニ處スベシト定メラレタリト雖モ今
ヤ刑法ノ頒布セラル、アリテ同一ノ所爲ニ對シ其刑名ヲ定メラレタ
ルカ故ニ其明文アルモノハ刑法ニ因テ處斷セサルヘカラサルナリ何
トナレハ明治十四年第七十二號公布第六條ニ法律規則中罰例アリト
雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニヨリテ處斷ス(總則ニアリ)トアレ
ハナリ刑法ノ正條左ノ如シ

刑法第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月
以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
因テ人ヲ死傷シタルモノハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處
斷ス

全 第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田

圃ノ樊園牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁
錮ニ處シ又ハ二圓以上二拾圓以下ノ罰金ニ處ス

全 第四百廿一條 人ノ品物ヲ毀棄シタルモノハ十一日以上六月
以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

右ノ如クナルカ故ニ鐵道ニ屬スル倉庫建家等ヲ毀損シタルモノハ刑
法第四百十七條ニヨリテ處斷シ其他ノ附屬品ヲ毀損シタルモノハ刑
法第四百二十一條ニヨリテ處斷シ柵欄ノ類ヲ毀損シタルモノハ同第
四百十八條ニ依リテ處斷セサルヘカラサルナリ然レトモ此等ノ罪ヲ
組成セシムハ皆故意ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ必要トス若シ誤テ爲シタル
トキハ格別然ラサルモ之ヲ毀損破壞スルノ意ナキトキハ刑法第七十
七條第一項ニ規定セル罪ヲ犯スノ意ナキト爲ナレハ其罪ヲ論スル
コトヲ得サルナリ獨リ本條ニ規定セル鐵道構内ニ標識揭示セル書付等
ヲ剝キ破リ又ハ列車ノ番号札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シタルカ如キ刑

法中ニ正條ナキモノニ限り本條ニ依テ處斷スベキモノト信スルナリ
 加之尙ホ茲ニ一ノ注意ヲ要セサルヘカラサル所ノモノアリ即チ唯單
 ニ故意ヲ以テ鐵道附屬ノ物品等ヲ毀損シタルトキハ前ノ如ク本條若
 シハ刑法第四百十七條以下ニヨリテ處斷セサルヘカラスト雖モ若シ
 其目的瀛車ノ往來ヲ妨害スルカ爲メニ故意ヲ以テ之ヲ犯シタルトキ
 ハ決シテ前ノ如ク所斷スヘカラサルナリ何トナレハ刑法ニ左ノ正條
 アレハナリ

刑法第六十五條 瀛車ノ往來ヲ妨害スルカ爲メ鐵道及ヒ其標識
 ナ損壞シ其他危險ナル障害ヲ爲シタルモノハ重懲役ニ處ス

右ノ如クナルカ故コ瀛車ヲ覆スルノ目的ニ出ルモノハ重懲役ニ處ス
 ベキモノナリ

○或問テ曰ク瀛車ヲ覆没スルノ目的ヲ以テ之ヲ爲スト雖モ到底其所
 爲ノ以テ覆没セシムルニ足ラサルモノハ如何ニ處斷スヘキヤ曰ク本

條ノ罪ヲ形成センニハ二ケノ條件相備ハルヲ要ス曰ク瀛車ヲ覆没セ
 シムルノ目的タルコト曰ク其所爲ノ果ノ覆没セシムルニ足ルヘキ効
 ルヲ要ス然ルニ到底之ヲシテ覆没セシムル能ハサルノ所爲ヲ爲スモ
 ノハ其心情大ニ惡ムヘキモノアルニモセヨ所謂不能犯ナレハ本條
 即刑法第六十五條ノ罰スヘキ所ニ非サルナリ

○又鐵道附則第十二條ニ鐵道附屬品ヲ毀損スルモノハ第七條ニ照シ
 罰ヲ科スルハ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコトアルヘシ但シ其價金
 ハ追徴モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フトキハ法官ニ於テ追徴スヘシトアリ
 是レ犯罪ニ對スル私訴即チ損害賠償ノコトヲ定メタルモノナリ且ツ本
 文ニモ其毀損ノ代價ヲ償ハシムルコトアルヘシトアリテ必ス其損害ヲ
 賠償セシメサルヘカラサルモノニ非ス其賠償ヲ請求スルト否トハ鐵
 道寮ノ見込即チ權内ニ在ルモノナレハ裁判官タルモノ鐵道寮ヨリ損
 害賠償ノ請求ヲ爲サ、ルニモ拘ハラズ犯人ニ向テ之ヲ賠償スヘシト

言渡スベキモノニ非サルナリ何トナレハ治罪法第二條ニ私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ストアリテ私訴ヲ爲スト否トハ全然被害者ノ權内ニ在ルコト明カナルニ於テオヤ且ツ又本文中法官ニ於テ價金ヲ追徵スベシトアレヒ凡ソ法官タルモノ唯之ヲ裁判スルニ止マリ決シテ其言渡ノ執行ヲ爲スベキモノニ非ス故ニ治罪法頒布ノ今日ニ在リテハ鐵道寮ヨリ其請求ヲ受ケサルトキハ檢察官ニ於テ公訴ヲ執行スルト同時ニ併セテ其私訴ノ裁判言渡ヲモ執行スルヲ以テ其當チ得タルノ所置ナリト信ズルナリ何トナレハ裁判官ニシテ裁判言渡ヲ執行スルトセハ其本質ニ背馳スルノ嫌ナキニ非サレハナリ

第八節 機關車等へ乗組ヲ禁ス

第八條 規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

一 本條ノ解

二 零則第十條ノ解

(一)○本則ハ鐵道零則第十條ニ定ムル所ノ禁ヲ犯スモノ、制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ二十五圓以内ノ罰金ニ處セラルヘキモノナリ

(二)○鐵道零則第十條ニ機關方並ニ火夫ノ外ハ其筋ノ許シヲ得スシテ機關車又ハ炭水車ハ乘リ或ハ乘ラント爲スヘカラス且車長及車掛ノ者ノ外其筋ノ許シヲ得スシテ荷物車又ハ旅客ノ爲メニ設ケサル車ニ乘リ又ハ乘ラント爲スヘカラス若シ此禁ヲ犯シ鐵道掛ノ者ノ制止ヲ用ヒサル者ハ直チニ其場ヨリ退去セシムベシトアリ故ニ鐵道機關方並ニ火夫ヲ除クノ外ハ其筋ノ許可ヲ得ス自儘ニ機關車又ハ炭水車ニ乘ルハ勿論乘ラント試ムルコトヲモ爲スヘカラサルナリ加之車長及車掛ノ者ヲ除クノ外ハ其筋ノ許可ヲ得スシテ荷物車又ハ旅客ノ爲メニ設ケサル車ニ乘リ又ハ乘ラントスルヲ得サルナリ若シ此等ノ禁ヲ犯

シテ乗車シ又ハ乗車セントスルモノアルヲ見テ鐵道掛ノ者之ヲ制止
スルモ之ヲ用ヒサルモノハ本條ニ依リテ罰スヘキモノナリ然レトモ
速ニ其命ニ從ヒタルトキハ之ヲ罰セサルハ勿論ナリトス

第九節 鐵道構内へ妄リニ立入ヲ禁ス

第九條 規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ
罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス
明治十二年三月二十八
日第十二号布告ヲ以テ

改正

一 本條ノ解

二 零則第十一條ノ解○鐵道構内又ハ「ステーション」構内タルコ
ヲ知ラスシテ立入りタルモノハ之ヲ罰スヘカラサル乎○鐵道
構内又ハ「ステーション」構内ニ立入りタルモノハ何故ニ鐵道
掛ノ者ノ制止スルヲ待テ聽カサルモノヲ罰セサル乎

(一)○本條ハ鐵道零則第十一條ニ對スル制裁ヲ規定スルモノニシテ即

チ該條ヲ禁ヲ犯スモノハ二十五圓以内ノ罰金又ハ三十日以内ノ禁獄
即チ輕禁錮ニ處セラルベキモノナリ

(二)○鐵道零則第十一條ニ「何人」ニ「不限」ステーション又ハ鐵道構内へ妄
リニ立入ル者ハ鐵道掛ノ者ヨリ即刻構外へ立去ラシムベシトアリ故
ニ正當ノ事故ナクシテ停車場又ハ鐵道構内へ立入りタルモノハ本條
ニ依リテ處斷セラルヘキナリ然レトモ正當ノ事故アリテ立入りタル
モノハ之ヲ罰セサルハ勿論ナリ

○或問テ曰ク鐵道構内又ハ「ステーション」構内タルコヲ知ラスシテ立
入りタルモノハ之ヲ罰スヘカラサル乎曰ク然リ然レトモ今日ニ在リ
テハ何人ト雖モ鐵道構内又ハ「ステーション」構内タルコヲ知ラサル者
ナキヲ以テ之ヲ知ラスト云フヲ以テ其罪ヲ免ル、ヲ得ベガラスト信
スルナリ然リト雖モ山間僻地ノ僮父偶都會ノ地ニ出テ、其鐵道タル
コヲ知ラス無意ニ之ニ立入りタルカ如キコアラハ之ヲ罰セスシテ

將來ヲ警ムルヲ以テ至當ノ處分ナリトス

○或問テ曰ク鐵道構内又ハ「ステーション」構内ニ立入りタルモノハ何故ニ鐵道掛ノモノ、制止スルヲ待テ聽カサルモノヲ罰セサル乎曰ク鐵道構内ニ安リニ立入りタルモノ、如キハ其罪情甚タ輕キヲ以テ一旦之ヲ制止シ其命ニ從ハサルモノヲ罰スル方却テ允當ナラント信ス然レトモ鐵道構内ノ廣キ之ニ立入ルモノアルニ當リ逐一制止セントスルハ到底得ヘカラサル所ナリ若シ得ベカラサルモノトセハ其制裁ヲ設クルモ無効ニ屬シ罰スヘカラサルニ至ラン寧ロ直チニ之ヲ罰スベシト定メラレタルモノナリト信スルナリ然リト雖モ立法者ノ意ハ果シ他ニ其目的アリヤ否ハ余輩知ル能ハサルナリ

第十節 砲發ヲ禁ス

第十條 規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

一 本條ノ解

一 零則第十五條ノ解○發砲ニ因テ人ヲ死傷セシメタルモノハ如何ニ處斷スヘキヤ○人アリ銃砲ヲ所持シ偶然ノ所爲ヨリシテ鐵道構内又ハ「ステーション」構内ニ於テ發砲シタルトキハ如何

(一)○本條ハ鐵道零則第十五條ニ對スル制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ該條ノ禁ヲ犯スモノハ二十五圓以内ノ罰金ニ處セラルヘキナリ
(二)○鐵道零則第十五條ニ何人ニ不限車内ハ勿論鐵道線及ヒ其他構内ニテ砲發スルヲ禁ストアルカ故ニ何人モ鐵道列車内ハ勿論其他鐵道構内又ハ線上ニ於テ銃砲ヲ放ツコトヲ得サルナリ若シ之ヲ犯シテ放ツモノアルニ於テハ本條ニヨリテ二十五圓以内ノ罰金ニセラルヘキナリ

○或問テ曰ク本條ヲ犯シテ發砲シ依テ人ヲ死傷セシメタルトキハ如何ニ處斷スヘキヤ曰ク此場合ニ於テハ發砲シタル點ニ付テハ本條ニ

ヨリテ處斷シ人ヲ死傷ニ致シタル點ニ付テハ其所爲ノ全ク過失ニ出
ルトキハ刑法第三百十七條以下過失殺傷ノ例ニ照シテ處斷シ仍ホ明
治十四年第七十二號公布第五條ニヨリ其刑ヲ併セ科スヘキモノナリ
○或問テ曰ク人アリ銃砲ヲ所持セシニ偶然ノ所爲ヨリ鐵道構内又ハ
「グレートシヨン」等ニテ發砲シタルトキハ如何スヘキヤ曰ク本條ニ於
テハ故ラニ發砲シタルモノヲ罰スルニ在ルモノナレハ偶然ノ事ヨリ
シテ其銃砲ノ發聲シタルモノ、如キハ所持人ニ於テ毫モ發砲スルノ
意ナキモノナレハ其罪ヲ論スルヲ得ベカラスト信スルナリ

第十一節 運送物ノ品書ヲ出サヌ又ハ詐欺ノ
品書ヲ出ス者

第十一條 規則第十七條ニ記スル所ノ諸荷物品書其他
ヲ故ラニ出サヌ或ハ故ラニ欺偽ノ物品書ヲ出ス者ハ
三ヶ月以内ニ懲役又ハ禁獄或ハ其品物一噸千七百斤
ヲ云フ

每ニ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス壹噸以下八十圓以内
尤モ一罰ノ贖金高五百圓ニ過キス

- 一 本條ノ解
- 二 零則第十七條ノ解

(一)○本條ハ鐵道零則第十七條ニ對スル制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ
鐵道ニテ運送スヘキ諸荷物其他物品ノ書付ヲ故ラニ鐵道掛ノモノニ
差出サヌ又ハ故ラニ詐欺ノ書付ヲ差出スモノハ三ヶ月以内ノ懲役(即
チ重禁錮)又ハ禁獄(即チ輕禁錮)ニ處セラル、手又ハ其運送物ノ目
方一噸(千七百斤ヲ云フ)毎ニ二十五圓以内ノ罰金ニ處セラルヘキモ
ノナリ將テ其荷物ノ一噸以下ノモノハ拾圓以内ノ罰金ニ處セラル、
ナリ然レトモ己ムヲ得スシテ其荷物ノ書付ヲ差出ヌコヲ得サル乎或
ハ誤テ物品目錄ニ相違ノ事ヲ記載シタルモノハ此例外ニ屬スルモノ
ナレハ決シテ罰スルノ限リニ非サルナリ又其贖罪云々ノ事ヲ定メテ

レタレトモ是レ本條ニ依リテ犯人ヲ三月以内ノ實決ノ刑ニ處スベ
キ場合ニ於テ舊法ニ依リテ贖罪ヲ許ストキハ其金額ハ五百圓以内ニ
止ル事ヲ規定セラレタルモノナラン然リト雖モ今舊法ハ既ニ廢止セ
ラレタルヲ以テ此點ハ悉クハ消滅ニ屬セシナラント信ス

(二)〇鐵道畧則第十七條ニ運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛ノ者へ引渡シ又ハ受
取ノ度毎ニ右荷主或ハ宰領人ヨリ其品柄數量及姓名ヲ記シテ掛リノ
者へ差出スベシトアリ是レ荷物ノ紛失錯亂ヲ生セサラシメノカ爲メ
ナリ然ルニ運送荷物ヲ鐵道掛ノ者へ引渡シナカラ故ラニ其依托シタ
ル荷物ノ書付ヲ鐵道掛ノ者へ渡サ、ル手又ハ其荷物ヲ鐵道掛ノ者ヨ
リ受取ルル荷主又ハ其宰領人ヨリ其品柄數量及ヒ姓名ヲ記シタル受
取書ヲ差出サ、ルモノハ共ニ本條ニヨリテ處斷セララルヘキナリ

第二欸 私設鐵道規則及罰例

明治十六年七月十日
日第二十三号布告

明治五年五月第百四十六號布告鐵道畧則及ヒ同六年三月第

百一號布告鐵道犯罪罰例ハ私設鐵道ニモ適用ス

〇本條ハ官設鐵道畧則及其罰則ヲ私設鐵道ニモ適用スヘキ旨ヲ定ム
ル者ニシテ今ヤ日本鐵道會社ナルモノ起リテ國內ニ鐵道ヲ布設スル
ノ秋ニ當リタレハ之ガ規則及ヒ罰則ヲ設クルハ最モ今日ノ急務ナレ
ハ官設鐵道ノ規則ヲ以テ直チニ之ヲ私設鐵道ノ規則ニ適用スベキ旨
ヲ定ムルモノニシテ別ニ解釋ヲ要セズ

○日本帝國電信條例

第一條 此條例ハ日本帝國政府電信寮ニ於テ所轄スル處ノ電機上ニ施行スルナリ

第二條 此條例中用ウル電報ノ語ハ百般ノ音信總テ電機ヲ以テ傳送シ又ハ傳送セント欲スルモノヲ指テ言フナリ

第三條 日本政府電信寮ハ日本帝國外ノ各地ヨリ傳送スル電報ヲ除キ日本帝國中ニ電報ヲ傳送シ及ヒ受取集メ届渡等一切關係ノ事務ヲ取扱フ專任ノ權ヲ有ス

第二十七章 日本帝國電信條例

明治七年九月廿二日 第九十八号布告撮録

電信條例別冊ノ通相定本年十二月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

第一節 器械ヲ毀損シ又ハ通信ヲ妨害スル者

第四條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ電槽器械柱木信線若クハ其線ヲ覆フ匣蓋管筒或ハ支凸腕木柳木陶器海底線標旗竿號報柱及ヒ電機并ニ其附屬一切ノ物品ヲ毀傷スル者或ハ此電機ニテ通信ノ傳送携致又届渡シテ如何様ナル仕方ニテモ妨碍スル者其他上件ノ架木支凸腕木ヲ拔取ル者ハ五百圓ヨリ多カラサル罰金又ハ懲役或ハ禁獄ニ處ス
但過誤失錯ニ出ル者ハ其損害ノ多少ニ隨テ償金ノ

第四條

本文ハ下段ニアリ

第五條 (同上)

第六條 (同上)

第七條 (同上)

第八條 (同上)

第九條 (同上)

第十條 (同上)

第十一條 (同上)

第十二條 (同上)

第十三條 (同上)

第十四條 (同上)

第十五條 (同上)

第十六條 (同上)

第十七條

明治十二年五月第二十八號布

告削除

○工部省第九号布達

明治十二年五月廿七日

○本條ハ電信ノ器械ヲ毀傷シ及ヒ通信ヲ妨害スル者ノ制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ何人ニ限ラス惡意ヲ以テ電槽器械柱木信線若クハ其線ヲ覆フ匣蓋管筒或ハ支凸腕木柳木陶器海底線標旗竿號報柱及ヒ電機并ニ其附屬一切ノ物品ヲ毀傷スル者又ハ電機ニテ通信ノ傳送或ハ携致届渡ヲ爲スニ當リ其方法ノ如何ヲ問ハス故意ヲ以テ之ヲ妨害スル者其他電信ノ架木支凸腕木ヲ拔取ル者ハ五百圓以内ノ罰金或ハ其罪情ニヨリテ懲役(即チ重禁錮)又ハ禁獄(輕禁錮)ニ處セラル、ナリ然レトモ是レ惡意ヲ以テ爲シタル所爲ニ對シ其刑名ヲ定メタルモノナレハ若シ過誤失錯ニテ電信ノ器械ヲ毀損シタルモノハ毫モ其罪ノ責ムベキナキカ故ニ決シテ之ヲ罰セス唯現ニ生セシメタル損害ヲ償ハシムルニ止マルモノナリ

右ノ如ク規定セラレタリト雖モ刑法上ニ於テ之レト同一ノ刑名ヲ定メラレタルヲ以テ本條ハ多クハ消滅ニ歸シタルモノナリ然レモ悉ク

明治六年八月太政官第三
 三百號布告電信取扱規
 則並同七年當省第三号
 第四号八年第五号電信
 賃錢表中淀泊ノ船艦へ
 送達スル賃錢同年第十
 九號同十一月内務工部
 兩卿連署番外及九年第
 四號等追々及布達候諸
 規則今般別冊ノ通改正
 増補來ル七月一日ヨリ
 施行候條此旨布達候事
 電信取扱規則
 日本政府ハ各種ノ電報
 ナ取扱フニ付テハ務メ
 テ便益ノ方法ヲ撰用シ
 以テ其要旨ヲ秘密ニシ

消滅セシニモアラサルヲ以テ左ニ刑法ノ正條ヲ掲ケテ然ル後其存廢
 ノ點ヲ明ニスベシ
 刑法第百六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ
 電氣ヲ不通ニ致シタルモノハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五
 圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラ
 サルトモキハ一等ヲ減ス
 刑法ニ於テ右ノ如ク規定セラレタルカ故ニ凡ソ電信ノ器械柱木ニ向
 テ損害ヲ與ヘ電氣ヲ不通ニ致シタルモノ若クハ其不通ニ至ラスト雖
 モ其器械柱木ニ損害ヲ與ヘタルモノハ皆刑法ニ據リテ處斷セサルヘ
 カラサルヲ知ルベシ果シテ然ラハ本條ノ制裁ハ自カラ消滅ニ歸シタル
 モノト謂ハサルヲ得ス然リト雖モ通信ノ傳送又ハ携致届渡等ヲ妨害
 シタルモノハ點ニ付テハ刑法上ニ其制裁ヲ規定セサルカ故ニ尙本條

送受ヲ迅速ニスルヲ
 要ス然リト雖國安ヲ害
 シ或ハ國法ニ悖ル電報
 ハ之ヲ送受スルヲ禁
 止ス且總テ通信上ニ關
 シ何等ノ苦情ヲ訟フル
 能一切之ヲ受理セサル
 ナリ
 政府ニ於テ一時通信ヲ
 廢停スルヲ要スルハ
 ハ各所或ハ一部分ノ通
 信ヲ廢停シ又ハ電報ノ
 種類ヲ限リ之ヲ送受ス
 ルヲ禁ス
 第一篇 電信等級
 第一章 電報ハ二等ニ
 區分ス

ニヨリテ處斷セサルヘカラサルヤ必セリ夫レ刑法ハ第百六十三條ニ
 於テ郵便ヲ妨害シタルモノ、制裁ヲ定メ而シテ傳信ノ配達ヲ妨害シタ
 ルモノ、制裁ヲ定メス故ニ實際之ヲ妨害スルモノアルニ當リテモ其
 正條ナキカ故ニ刑法ニヨリテ之ヲ罰スルヲ得ズ往々學者ノ非難スル
 所トナレリ余ハ此點ニ付テ法ノ欠點ナリヤ否ヲ論スルヲ好マス幸ヒ
 ニ本條ニ於テ電信ノ配達ヲ妨害スルモノ、制裁ヲ定メラレタルカ故
 ニ犯人ヲシテ法網ヲ逃ル、ノ憂ナク充分ニ之ヲ懲罰スルヲ得ベシト
 信スルナリ
 第二節 電信掛ノ犯罪
 第五條 電機掛リ官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ハ何
 人ニテモ電信寮ノ事務ニ從事スル際之ヲ攻打シ或ハ
 粗暴ノ舉動ヲナシ其事業ニ妨碍抗抵ヲ爲ス者ハ五百
 圓ヨリ多カラサル罰金又ハ三ヶ月ヨリ長カラサル懲

第一等官報 官報ト
 官省院使局府縣等
 ノ公事ニ關スル音信
 並ニ同盟諸國ノ大臣
 長官陸海軍元帥及ヒ
 公使領事等ノ贈答ス
 ル音信ヲ云フ
 但通商ニ關係シタル
 領事ヨリ出ス所ノ電
 報ハ在官ノ者ニ宛名
 シ公務ニ關スルモノ
 ニ非サレハ決シテ之
 ナ官報ト爲サス
 第二等局報 局報ト
 ハ電信本局又ハ其分
 局ヨリ出スモノニシ
 テ電信ノ事務ニ關ス

役或ハ禁獄ニ處ス
 ○本條ハ電信掛ノ犯罪ニ對スル制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ電信
 掛ノ官員及ヒ電信改メ役或ハ其他ノ官員又ハ其他何人ニテモ總テ電
 信寮ノ事務ニ從事スル際故意ヲ以テ電信ノ諸器械ヲ毆打シ又ハ粗暴
 ニ器械ヲ取扱ヒ爲メニ電信上ニ障害ヲ與フルモノハ五百圓以内ノ罰
 金又ハ三ヶ月以内ノ懲役(即チ重禁錮)又ハ禁獄(即チ輕禁錮)ニ處セラ
 ルベキモノナリ
 ○讀者ハ本條ト前條トヲ對照セハ果シテ如何ナル感想ヲ生スル乎夫レ
 前條ハ一般人民ニ對スル制裁ヲ定メ本條ハ電信掛ノ官員ニ對スル制
 裁ヲ定ムル者ニシテ官吏ノ犯罪ハ一般人民ノ犯罪ヨリモ其情却テ重
 キモノナレハ刑法ニ於テハ官吏ノ犯罪ニ向テハ一般人民ノ刑ニ一等
 若クハ二等ヲ加ヘテラタリ是レ其罪情宜シク然ラサルベカラサルモ
 ノアルヲ知ルナリ然ルニ今ヤ前條ハ刑法ノ頒布ニ付半ハ自ツカラ消

ル報信ヲ云フ
 第三等私報 私報ト
 ハ官報局報ヲ除キ他
 ノ諸信ヲ總稱ス
 第二章 官報ハ他ノ電
 報ヨリ先ニ傳送シ局報
 之ニ次キ私報又タ之ニ
 次リ
 第三章 同等ノ電報ハ
 發信局ニ於テハ其賴信
 ノ前後ニ由リ中繼局ニ
 於テハ其受信ノ順序ニ
 從ラテ之ヲ傳送ス
 第二篇 電信書法
 第一章 電報ハ普通辭
 又ハ秘辭ヲ以テ書スル
 ナ得ヘシ然レモ電信ニ

滅ニ屬シ刑法ヲ以テ之ニ適用スルニ至リテハ大ニ其刑ニ輕重ノ差ヲ
 生スルヤノ嫌ナキチ免レサルモノ、如シ何トナレハ一般人民ニシテ
 電信ノ器械ヲ毀損シタルモノハ三ヶ月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五
 圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加セラル、ニモ拘ハラス官吏之ヲ犯シ
 タルトキハ五百圓以下ノ罰金或ハ三ヶ月以下ノ重禁錮又ハ輕禁錮ニ
 處セラル、モノトセハ其罪情ノ重キ官吏ノ犯罪ニ對シ其刑ハ却テ輕
 キチ感スルモノ、如シ然レモ是レ余輩一己ノ卑見ニ止マリ立法者於
 テハ必スヤ他ニ大ニ見ル所ノ者アランヲ信スルナリ誓シ余カ疑ヲ記
 シテ讀者ノ參看ニ供スルコトナリ
 第三節 柱木浮漂等ニ妨害ヲ爲ス者
 第六條 何人ニテモ不法ニ柱木柳木海底線信線旗竿浮
 標其他電機又ハ其附屬一切ノ物品ニ馬又ハ其他ノ獸
 畜或ハ舟筏等ヲ繫ク者ハ其所行ニ依テ損害ノ有無ヲ

用ナル片假名字号及莫爾斯氏ノ字号ニ翻書シ難キ文字ヲ以テ書スルヲ禁ス
片假名及数字

イ
ロ
ハ
ニ
ホ
ヘ
ト
ナ
リ
ス
ル
チ

論セス一百五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

○本條ハ電信柱木及ヒ浮標等ニ妨害ヲ與ヘタル者ノ制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ電信ノ柱木柳木及ヒ海底傳信ノ旗竿浮標其他電機又ハ其附屬品等ナルヲ知テ之ニ馬又ハ其他ノ獸類或ハ舟筏等ヲ繫クモノハ之カ爲メニ電信上ニ妨害ヲ爲シタルト否トチ問ハス百五十圓以內ノ罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル重禁錮又ハ輕禁錮ニ處セラレヘキモノナリ然レトモ電信ノ器械タルヲ知ラスシテ偶然之ニ妨害ヲ生セシメタル場合ニ於テハ罰スベキ限りニ非サルナリ何トナレハ罪トナルベキ事實ヲ知ラスシテ犯シタルモノナレハナリ

○本條ニ付テハ少シク注意ヲ要セサルヘカラサル所ノモノアリ電信ノ器械又ハ附屬物タルヲ知ルモ之ニ妨害ヲ與フルノ意ナシシテ爲シタルトハ本條ニ依リテ之ヲ罰スベキモノナリト雖モ若シ然ラスシ

テ電信上ニ妨害ヲ生セシメシカ爲メ故テニ牛馬舟筏等ヲ繫キ果ソ其妨害ヲ生シタルトキハ本則第四條ノ釋義ニ於テ説明セシ如ク刑法第百六十四條ニヨリテ處斷セサルヘカラサルナリ何トナレハ其方法手段ノ如何ナルチ問ハス電信上ニ妨害ヲ與フルノ目的ヲ以テ之ヲ犯シタルモノナラハ到底刑法第百六十四條ノ支配ヲ免ル、一能ハサレハナリ

第四節 電信器械ニ妨害物ヲ投射スル者

第七條 何人ニテモ柱木信線陶器旗竿腕木柳木支凸號報柱浮標其他ノ物品ヘ瓦礫若クハ雜物ヲ投擲シ又矢箭火器ヲ彈射スル者ハ其所業ニ依テ毀傷ノ有無ヲ論セス一百五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

○本條ハ電信諸器械ニ物品ヲ投射シタルモノ、制裁ヲ規定スル者ニ

ケ マ ヤ ク ノ ウ ム ラ ナ ネ ツ ソ レ タ ヨ カ リ

Vertical lines for text in the top section of the left page.

フ コ ヌ ヲ テ ア サ キ ヌ メ ミ シ ヒ モ セ ス ノ ヲ
音濁

Table with 10 vertical columns and 10 horizontal rows, containing a grid of lines for text entry.

シテ即チ何人ト雖モ電信ノ柱木信線陶器旗竿腕木柳木支凸號報柱浮
標其他ノ物品ヘ故ラニ瓦礫若クハ雜物ヲ投擲シ或ハ矢箭火器ヲ彈射
スル者ハ其レカ爲メニ電信ニ妨害ヲ與ヘタルト否トチ問ハス百五十
圓以內ノ罰金又ハ四十二日以内ノ重禁錮又ハ輕禁錮ニ處セラルヘキ
ナリ然レトモ是レ唯故ラニ爲シタル場合ニ止マリ若シ知ラスシテ之
ヲ爲スカ又ハ誤テ之ヲ爲シタルトキハ毫モ罪ノ問フベキナキヲ以テ
不問ニ措クベキモノト信スルナリ然レトモ其損害ヲ生セシメタルト
ハ電信寮ノ請求ニヨリテ損害補償ノ責ヲ免ル、コ能ハサルハ勿論ナ
リ

○本條モ亦前條ト同シク電信ニ妨害ヲ與フルカ爲メニ故ラニ爲シタ
ルトキハ刑法ニヨリテ處斷セサルヘカラズ故ニ電信ニ妨害ヲ與フル
カ爲メニ爲シタルト他ノ目的若クハ戲ニ爲シタルトニ由リテ本則ニ
依リテ處斷スルト刑法ニ依リテ處斷スルトノ區別ヲ生スルモノナリ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 零
○ 音濁半
a a a a a a a a a a
b a a a a a a a a a

Table with 10 vertical columns and 10 horizontal rows, containing a grid of lines for text entry.

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○電信條例 七百八十一

第八條 何人ニテモ電線ノ近傍ニテ紙鳶ヲ飛シ信線陶
器腕木柳木支凸其他電機ニ屬スル物品ヘ紙鳶又ハ其
附屬ノ糸類ヲ引掛ケ電氣ノ妨碍ヲ生セシムル者ハ拾
圓ヨリ多カラサル罰金又ハ七日ヨリ長カラサル懲役
或ハ禁獄ニ處ス

一 本條ノ解
二 紙鳶又ハ附屬ノ糸類ヲ引掛ケ電氣ノ妨害ヲ爲シタルモノハ其
者ノ年齢如何チ問ハス悉ク之ヲ罰スヘキ乎

(一)○本條ハ電線ノ近傍ニテ紙鳶ヲ飛シ以テ電信ニ妨害ヲ生セシメタ
ルモノ、制裁ヲ規定スル者ニシテ何人ニ限ラス電信ノ近傍ニテ紙鳶
ヲ飛シテ電信線陶器腕木柳木支凸其他電機ニ屬スル物品ヘ紙鳶又ハ

h g f e v u t s r q p o e d ch c

Vertical lines for handwriting practice on the right page.

其附屬ノ系類ヲ引掛ケ之カ爲メニ電氣ノ妨害ヲ生セシメタルモノハ其故意ニ出ルモノニ非スト雖モ十圓以内ノ罰金又ハ七日以内ノ懲役禁獄(即チ拘留)ニ處セラルヘキモノナリ然レトモ其紙鳶又ハ系類ヲ引掛ルニモセヨ電氣ヲ妨害スルニ至ラサルモノハ本條ノ問フ所ニ非サルナリ何トナレハ本條ニハ電氣ノ妨害ヲ生セシムル者ハ云々トアレハナリ

(二)○或問テ曰ク紙鳶又ハ其附屬ノ系類ヲ電信ニ引掛ケ電氣ノ妨害ヲ生セシメタルモノハ其者ノ年齢如何ヲ問ハス悉ク本條ニヨリテ處罰スヘキ乎曰ク否夫レ紙鳶ヲ飛シテ以テ遊戯ヲ爲スモノハ多クハ小兒ニシテ大人ノ之ヲ爲スモノ甚タ少ナシト雖モ然カモ小兒ノ之ヲ犯シタルトキハ決シテ罰スヘキモノニ非スト信スルナリ何トナレハ刑法第七十九條ニ罪ヲ犯スルハ十二歳ニ滿タサルモノハ其罪ヲ論セストアリテ本條ニ其特例ヲ定メラレサルカ故ニ十二歳未滿ノ者之ヲ犯セシ

5 4 3 2 1 z y x w o u n m l k j i

Vertical lines for handwriting practice on the left page.

其ハ必ス刑法ニヨリテ其罪ヲ論スヘカラサルヤ疑ヲ容レサルナリ

第六節 電線ノ標識揭示等ヲ剝取ル者

第九條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ政府電信寮ヨリ其局々或ハ電線沿道ノ所々ニ取立タル標識揭示等ヲ剝

剝シ又ハ拔去ルモノハ五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

一 本條ノ解

二 電信ノ標識又ハ揭示等ヲ剝取又ハ拔去リタルモノハ悉ク本條ニヨリテ處斷スヘキ乎

(一)○本條ハ電信ノ標識揭示等ヲ剝取ル者ノ制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ何人ニ限ラス政府又ハ電信寮ヨリ取設ケラレタル標識揭示等ヲ剝剝キ又ハ拔去ルモノハ五十圓以内ノ罰金又ハ四十二日以内ノ懲役(即チ重禁錮)禁獄(即チ輕禁錮)ニ處セラルヘキモノナリ然レトモ是

第二章 普通辭トハ和文ハ片假名文歐文ハ羅句語又ハ常ニ通用スル所ノ歐州國語ヲ以テ之ヲ書シ其意味ノ曉解シ易キ者ヲ云フ

第三章 秘辭トハ文字又ハ數字ノ孤立シタルモノ或ハ聯集シタルモノニテ其意味ノ曉解シ難キモノヲ全部又ハ一部分ニ用フ或ハ通信技手ニ於テハ曉解シ難ク唯タ送受兩人ノ私ニ定メタル機杼語ヲ文中ニ用フタルモノ或ハ前章ニ言フ所ノ普通辭ノ類

第十一條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ柱木浮標其他一切電機附屬ノ物品ヘ落書圖繪又ハ鐫刻スル者ハ拾圓ヨリ多カラサル罰金又ハ七日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

○本條ハ電信ノ柱木浮標其他電信ノ附屬物ナルヲ知リテ故ラニ之ニ落書又ハ繪圖ヲ畫キ或ハ此等ノモノヲ鐫刻スルモノハ拾圓以内ノ罰金又ハ七日以内ノ懲役禁獄(即チ拘留)ニ處スヘキ旨ヲ規定スル者ナリ

第九節 電報ノ配達ヲ怠リ又ハ隱匿スル者

第十二條 電機掛官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ハ何人ニテモ他人ヘ届渡スベキ電報ヲ故意ヲ以テ隱匿シ又ハ電信寮ヨリ電報ヲ届渡スベキ命令ヲ怠リ或ハ肯セサル者ハ五拾圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日

ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス

一 本條ノ解

二 電信ノ届渡ヲ爲スヘキ命令ヲ受ケテ之ヲ棄毀シ其届渡ヲ爲サ

ニ非サルモノヲ云フ若シ半ハ普通辭半ハ秘辭ヲ用フルモ其普通辭ト區畫スル爲メ括弧ヲ以テ秘辭ノ前後ヲ圍ムヘシ其秘信ニハ和文ハ片假名又ハ數字ヲ用フ歐文ハ羅馬文字又ハ亞刺比亞數字ヲ以テ記スヘシ但シ私報ノ秘信ハ決シテ數字ト文字トヲ混用スヘカラス

(一)○本條ハ電信掛ノ官吏又ハ電信配達人ニ對スル制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ電信掛ノ官吏及ヒ電信改メ役或ハ其他ノ官吏又ハ何人ニ論ナク他人ヘ届渡スヘキ電報ヲ故意ヲ以テ隱匿シ又ハ電信寮ヨリ電報ヲ届ケ渡スヘキノ命令ヲ受ケナカラ怠リテ之ヲ届ケス又ハ之ヲ届渡スコトヲ承諾セサルモノハ本條ニヨリテ五十圓以内ノ罰金又ハ四十二日以内ノ懲役(即チ重禁錮)禁獄(即チ輕禁錮)ニ處セラルヘキモノナリ

夫レ電信ハ事ノ最モ神速ヲ要スル所以ノモノニシテ若シ之ヲ遲緩セハ爲メニ如何ナル障礙ヲ生スルヤモ測リ知ルヘカラス然ルニ斯クノ

第五章 出狀入ハ信紙
 中名宛ノ下ニ返信料濟
 受信報知照校電報其他
 配達方等ノ囑附ヲ記入
 スヘシ右附囑ハ普通辭
 又ハ電信局中ニ於テ用
 ル所ノ畧符號ヲ以テ書
 載スルモ可ナリ略符號
 ヲ用非ルモハ和文ハ二
 字歐文ハ一語ト看做シ
 テ計算シ普通辭ヲ用ル
 非ハ必ス和文又ハ英文
 ヲ用ウヘシ然ルモ其
 辭數ニ應シテ計算ス
 第六章 出狀人速ニ返
 信ヲ望ムカ爲メ電信局
 ニ在リテ之ヲ待ツ(局待)

如ク神速ヲ要スル所ノモノヲ故ラニ隱匿シ又ハ其届渡ヲ怠ルトキハ
 其害甚ク大ナルヲ以テ本條ノ如ク之ヲ罰スルモノナリ
 (二)或問テ曰ク電信ノ届渡ヲ爲スベキ命令ヲ受ケテ之ヲ毀棄シ其届
 渡ヲ爲サ、ルモノハ如何ニ處斷スヘキヤ曰ク本條ニハ電信ヲ隱匿ス
 ル者ト其届渡ヲ怠リ又ハ肯セサルモノ、制裁ヲ定メテ之ヲ毀棄シク
 ルモノ、明文アラサルカ故ニ到底本條ニヨリテ處斷スルコト得サル
 ベシ曰ク然ラハ則テ遂ニ之ヲ罰スヘカラサル乎豈ニ何ソ其レ然ラン
 本則第四條ニ通信ノ傳送携致又ハ届渡ヲ如何様ナル仕方ニテモ妨碍
 スル者ハ云々トアルニ依リ本問ノ如キモ電信ノ届渡ヲ爲サ、ル者ナ
 レハ取リモ直サス届渡ヲ妨碍シタル者ナレハ該條ニヨリテ處斷スル
 ハ格別本條ニヨリテ罰スルノ限リニ非サルナリ然リト雖モ電信ヲ毀
 棄シタルモノヲ罰スルニ本則第四條ヲ以テスルハ果シ其當ヲ得タリ
 ヤ否ハ余ハ茲ニ之ヲ斷言スル能ハサルナリ何トナレハ法文聊カ明瞭

又ハ其略符號ヲ名宛ノ
 下ニ記入スヘシ然ルモ
 ハ着信局ニ於テ之ヲ封
 皮ニ轉寫シテ配達ス
 但其返信ニハ局待ノ
 字ヲ記スルニ及ハス
 第七章 受信人ノ住所
 姓名ハ總テ着信地ニ於
 テ配達シ易キカ爲メ勉
 メテ詳明ニ肩書スヘシ
 若シ唯街名村名等ノミ
 ニテ他ニ類似ノ地名ア
 ルモノハ必ス府縣名國
 名其他ノ名稱等判然記
 入スヘシ
 宛名記入ノ不正或ハ不
 十分ヨリ起ル所ノ失錯

第十三條 電信寮ニ仕官スル者故意怠慢ヲ以テ音信ノ
 傳送又ハ届渡スコトヲ忘却遅延スル者又ハ同様ノコトニ
 依テ音信ノ傳送届渡シテ妨碍遷延セシムル者又ハ猥
 リニ音信ノ旨趣ヲ傳洩スル者又ハ他ノ人民又ハ電信
 寮ノ官員ト雖モ其場ニ立入ルベキ職務ニ非サル者ヲ
 電信寮ノ器機室ニ立入ラセ又ハ滯居セシムル者等以
 上ノ各犯ハ一百圓ヨリ多カラサル罰金ニ處ス
 ○本條モ亦傳信掛ノ官吏ニ對スル制裁ヲ規定スル者ニシテ即チ職ヲ
 電信寮ニ奉スル者故意又ハ懈怠ニヨリテ電信ノ傳送又ハ届渡ヲ遅延
 セシメ又ハ忘却スル者又ハ故意或ハ懈怠ニヨリテ音信ノ傳送又ハ届
 渡ヲ妨碍遷延セシムル者或ハ電信ノ旨趣ヲ猥リニ他ニ傳洩スル者又

チ欠クノ憾ナキヲ免レサレハナリ

第十節 電信ノ傳送ヲ怠リ及ヒ音信ヲ洩ス者

ヲ納メ歐文ハ其語數ニ
 因テ賃金ヲ納ムヘシ
 第三章 海外通信料國
 内何レノ局ニ於テ發着
 スルモ一語毎ニ墨銀二
 十泉ヲ納ムヘシ
 第四章 通信料ハ必ス
 出狀人ヨリ前納スヘシ
 第五章 送達紙ニハ無
 賃ニテ其發信局名賴信
 ノ月日時分ヲ記入シ受
 信人ニ交附ス
 第六章 出狀人ノ賴信
 紙中ニ記入シタルモノ
 ハ句讀諸點畧符連續點
 ヲ除クノ外ハ總テ賃金
 ヲ納ムヘシ但本文ニ

ノ顯然明白ナルモノアルニモセヨ其所爲ノ豫備若クハ方法タルニ過
 キサルトキハ之ヲ罰スヘカラサルナリ何トナレハ刑法ニ左ノ正條ア
 レハナリ
 刑法第百十二條 罪ヲ犯サントシテ己ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意
 外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサルモ己ニ遂ケタル者ノ刑
 ニ一等又ハ二等ヲ減ス
 右ノ如クナルカ故ニ凡ソ輕罪ニ於テ未遂犯ヲ罰セシニハ必ス其犯罪
 ニ着手シタルコトヲ要ス若シ未タ着手セサルニ於テハ豫備ノ所爲タル
 ニ過キサルヲ以テ罰スヘカラサルナリ又本條ニハ拾圓以内ノ罰金又
 ハ四十圓以内ノ懲役禁獄ニ處ストアレトモ凡ソ未遂犯ナルモノハ刑
 法ノ原則ニ從ヒ其本刑ヨリ一等又ハ二等ヲ減シテ處分スヘキ所ノモ
 ノナレハ縱令ヒ本則ニ於テハ斯クノ如キ制限ナキニモセヨ決シテ本
 刑ヨリ重キ刑ヲ言渡スベキモノニ非サルヤ明ラカナリ例ヘハ本則第

云フ所ノ記号ハ必スシ
 モ傳送スルヲ要セス
 第七章 和文中ニ數字
 又ハ歐字ヲ挿入スルモ
 ノハ一字ヲ片假名一字
 ト看做シ括弧ヲ計算ス
 (假令ハ)
 (Amo 150) 八字
 (一〇五〇七八) 八字
 (五二二五) 六字
 第八章 片假名ヲ以テ
 數目ヲ記スルモノハ其
 片假名ノ字數ニ依テ計
 算ス
 第九章 和文中ノ濁點
 半濁點ハ一箇ヲ一字ト
 看做シテ計算ス

十條ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ二十五圓ノ罰金若クハ二十一
 日ノ禁錮ヨリ重クスルコトヲ得ス又第十一條ヲ犯サントシテ未タ遂ケ
 サルモノハ其刑拾圓ノ罰金又ハ七日ノ拘留ヨリ重クスルコトヲ得サル
 カ如ク加之余ハ未遂犯罪ヲ罰スルニ當リテハ寧ロ刑法ノ原則ニ從ヒ
 本刑ヨリ一等又ハ二等ヲ減シテ處分スルコトヲセハ大ニ其當ヲ得ヘシ
 ト信スルナリ
 第十二節 損害賠償
 第十五條 凡此條例ヲ犯シテ電信寮所轄ノ物品ヲ毀傷
 シ又ハ他人ノ損失妨碍ヲ生スル者ハ例ニ照シテ處分
 スルノ外其毀傷損失ノ償金ヲ出サシム
 但工部省所轄電信私線ノ分モ此條例ニ準シ處分ス
 一 本條ノ解
 二 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタルモハ電信寮ハ損害賠償ヲ請求ス

(假令ハ)

ハ 二字 ヒ 二字

第十章 和文秘信中

用ナル讀點ハ一個チ一

字ト看做シテ計算ス

第十一章 歐文ハ二語

ノ聯綴十五字以下ハ各

一語ニ算シ十五字ヲ超

ユルモノハ又之チ一語

ニ算ス

第十二章 連續點ヲ以

テ繋キタル辭及ヒ略符

ヲ以テ分チタル辭ハ其

分辭毎ニ一語トシテ算

ス

(假令ハ)

Weston super-mare 三語

ルノ權ナキ手

(一)〇本條ハ私訴即チ損害賠償ノコトヲ規定スル者ニシテ即チ此電信條

例チ犯シタルニヨリ電信寮所屬ノ物品ヲ毀損シ又ハ他人ノ損失妨碍

ヲ爲シタルモノハ此條例ニ照シテ處罰スルノ外仍ホ其犯罪ニヨリ生

シタル損害ヲモ賠償セシムルコトアルヘキコト示スモノナリ然レトモ

私訴ヲ爲スノ權ハ被害者ニ在ルチ以テ其被害者ヨリ私訴ヲ爲サ、ル

トキハ裁判所ニ於テハ損害賠償ヲ命スヘキモノニ非サルナリ故ニ損

害ノ賠償ヲ得ント欲セハ必ス別ニ私訴ノ申立ヲ爲サ、ルヘカラサル

ナリ又本條ニ他人ノ損失妨碍ヲ生スル者ハ云々トアリテ電信寮ニ於

テハ舊ニ其損害ニ止ラス仍ホ他人ノ損害マテモ併セテ請求スルカ如

キ意味ニ解シ得ラルヘシト雖モ電信寮ハ其損害賠償ヲ請求スルニ止

マリ他人ノ損害迄モ之ニ干渉セシトスルハ其權外ニ屬スルチ以テ決

New-York 二語

Two 二語

第十三章 一語以上ノ

辭ニ字下線一個ヲ引ク

トハ各一語ト爲ノ算ス

(假令ハ)

The matter is urgent.

七語并字下線

Leave at once

二個合セ九語

但轉倒句讀及括弧ヲ計

算スルモ亦此例ニ因ル

第十四章 國語ノ用法

ニ反セシ語辭ノ聯綴シ

タルモノハ之ヲ用セル

ヲ許サス然リト雖モ若

シ反シタルヤ否ヤ其明

ルノ權ナキ手

(一)〇或問テ曰ク被告人刑ニ處セラレタルトキハ其所爲ニヨリ生シタ

ル損害ヲ賠償セシムルト雖モ若シ審理ノ上無罪ニ歸シタルキハ之ヲ

請求スルコト得サル乎曰ク否損害ノ賠償ハ其者ノ所爲ニヨリ人ニ損

害ヲ與ヘタルチ償フ所以ノモノニシテ犯罪トハ完ク其性質ヲ異ニス

ルモノナレハ縱令被告人其刑ヲ免ル、ト雖モ尚クモ其所爲ニヨリ人

ニ損害ヲ與ヘタル以上ハ決シテ賠償ノ義務ヲ免ル、ヲ得サルモノト

ス唯被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキハ私訴ヲ刑事裁判所ニ爲スコ

ト得サルチ以テ更ニ民事裁判所ニ向テ之ヲ請求スルコト得ルモノナ

リ

第十三節 犯人處斷者

第十六條 凡犯人ヲ處斷シ罰金並ニ償金ノ額ヲ定ムル

ハ總テ裁判官ノ權内ニ屬ス

〇本條ハ此電信條例違犯者ヲ處斷シ及ヒ其範圍内ニ於テ罰金ノ額ヲ

證ヲ得ル能ハサルハ
出狀人ノ書牒ニ從テ之
ヲ計算ス

第十五章 歐文中數字

ニテ記シタルモノ五個
以下ハ各之ヲ一語トナ

シテ算シ之ニ超ル毎ニ
又一語トナス文字ノ聯
集シタルモノモ亦タ此

例ニ由テ算ス

第十六章 歐文中又ハ

數字ニテ孤立シタルモ
ノハ各二語ニ計算ス

第十七章 數字中ニ用

井ル分數點讀點及七歸
除線ハ一個ヲ一字トナ
シテ計算ス

定メ并ヒニ損害ノ大小輕重ヲ考ヘ以テ價金額ヲ定ムルハ總テ裁判官
ノ權内ニアルコトヲ示スモノニシテ此等ハ特ニ本條ノ明文ヲ要セサル
モ何人モ信シテ疑ハサル所ナリ故ニ別ニ解釋ヲ用ヒス

第十四節

水底線路ノ妨碍ヲ爲ス者 明治十六年
二月第五号

告布

水底電信線路ニ於テ投錨漁業採藻等ノ禁ヲ犯ス者ハ二
圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

○本條ハ水底電線路ニ於テハ投錨シ又ハ漁業或ハ採藻ヲ爲スコトヲ禁
スル者ニシテ若シ之ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處
セラル、ナリ是レ水底電線路上ニテ投錨漁業採藻ヲ爲サハ之カ爲メ
ニ電線ヲ損害スルコトアルヲ以テナリ然レトモ是レ其水底線路ノ其所
ニ在ルヲ知リナカラ之ヲ犯シタルモノヲ罰スル所以ニシテ若シ其電
線アルコトヲ知ラスシテ犯シタルトキハ刑法第七十七條第二項ノ罪ト

(設令)

4455 一語 (數字記號
合五個)

44530 一語 (同六個)

5101 二語 (同六個)

第十八章 順序數ヲ作ル爲メ數字ニ加ヘタル文字ハ各數字一個ト看做シテ計算ス (設令)

17786 一語 17786A 二語

○第十九章 秘辭ノ雜リタル電報中其普通辭ハ通常ノ例ヲ以テ

之ヲ算シ數辭又ハ文字ノ聯集シタルモノハ數字ノ例ニ因テ之ヲ算ス第二篇第二章中ニ云フ所ノ

國語ニ非サル語辭ハ文字ノ聯集ト看做シテ之ヲ計算ス ○第四篇 電報配達 ○第一章 電報

ハ受信人ノ住所ハ勿論又ハ預ケ置クヘキ所ノ電信分局若クハ郵便局ヘ宛名ズルモ可ナリ然ルモ

ハ其囑指ニ依テ取扱ヒ受信シタル順序ヲ追テ晝夜ヲ分タス之ヲ配達ス ○第二章 受信人ノ住

所ニ配達スル時ハ本人ハ勿論或ハ家族寄寓者等本人ニ代テ受取ルヘキ者ニ交付スルモ妨ナシ然

レモ受信人ヨリ書面ヲ以テ特ニ誰某ニ與ヘラルヘシトノ指名アルカ又ハ出狀人ヨリ必ス本人ニ

交付スヘシト囑附スルカ又ハ親展内啓等ノ辭アルモ此例ニ非ス 右ノ囑附ハ出狀人ニテ名宛

ノ下ニ記入スヘシ然ルモハ着信局ニ於テ之ヲ其封皮ニ轉寫シテ配達ス ○第三章 電信分局ニ預

カリ置ク所ノ電信ヲ來求スルモハ唯モ受信本人或ハ其委任ヲ受クル代人ニノミ交付スヘキモノ

トス ○第四章 名所不分明等ニテ受信人ヲ尋不得サルモハ其電報ヲ分局ニ留置クナリ ○第五

ナルハキ事實ヲ知ラサルモノナレバ其罪ナキヤ明ラカナリ

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○電信條例

章 前兩章之事故ニ因テ電報分局ニ留置シ所ノ諸電信ハ其住所姓名ヲ詳記シテ局前ニ揭示シ且新聞紙ヲ以テ之ヲ廣告ス然レモ着信ノ後テ二月内ニ尋ネ來ル者アラサレハ沒書トナス 第六章 開港場其他諸港内碇泊ノ船艦ヘ電信ヲ配達スルルハ配達賃トシテ出狀人ヨリ金十五錢ヲ前納スヘシ 第七章 電信分局ヨリ二里以内ハ每一通届賃金一錢五厘トス二里以外ニテ分局ナキ地方ヘハ郵便又ハ別使ヲ以テ之ヲ遞送ス故ニ受信人ノ名下ニ(郵便)或ハ(別使)又ハ其畧符号ヲ記入スヘシ 別使ヲ以テ送達スル電報ハ一里金十二錢ノ割ヲ以テ九町毎ニ賃金三錢トス 但島嶼ヘノ別使配達ハ其實費ヲ徴収スヘシ (明治十六年四月) 郵便ヲ以テ送達スル電報ハ總テ郵便規則ニ照シテ其税金ヲ納メシム 第八章 發信局ニ於テ若シ里程ノ分明ナリカキトキハ(別使ノ里程等) 出狀人ヨリ豫算ノ金額ヲ納メシメ着信ニテ實地ノ調査ヲナシ其不足受信人ヨリ徴収シ過剩ハ出狀人ニ還付ス 第九章 若シ信紙ニ記入シタル名所ニ於テ受信人居住セズ他所ニ轉住セシキ其新居所分明ニシテ配達管内ナレハ別ニ賃金ヲ收メスシテ之ヲ送達ス但配達管外ニテモ新居所分明ノモノハ前拂郵便ヲ以テ遞送シ信紙中ニ其郵便稅額ヲ朱記スルニツキ受信人ヨリ之ヲ返納スヘシ 第十章 總テ不足賃金又ハ受信人ヨリ納ムヘキ賃金ヲ拒却スルカ或ハ其所在ヲ尋得サルヨリシテ徴收シ難キ金額等ハ出狀人ヨリ辨償セシム若シ既ニ收領シタル賃金ニ過剩アラハ之ヲ還付ス 第十一章 凡テ受取人ヨリ徴収スヘキ賃金等ハ其通知ノ日ヨリ一週内ニ納ムヘシ(遠隔ノ地ニ郵便往復ノ日數ヲ除ク)若シ此期限ヲ過ルルハ出狀人ヨリ辨償セシムナリ 第十五篇 特格電報 第一章 至急私報 第一節 私報ノ出狀人ハ其名宛ノ下ニ

(至急) 又ハ其畧符号ヲ記シ通常音信料ノ二倍ヲ納ムレバ他ノ私報ニ先キテ通信スルヲ得ヘシ 第二節 至急私報ハ他ノ私報ヨリ先キニ傳送スルト雖モ其至急私報中ノ順序ハ第一篇第三章ノ例ニ因ル 第三章 返信料前拂 第一節 凡テ出狀人其電報ノ返信ヲ要セバ賃金ヲ前納スルヲ得ヘシ但一音信料ヲ前納スルルハ其電報名宛ノ下ニ(返信料濟)又ハ畧符号ヲ記載スヘシ若シ一音信ヲ超ユテ賃金ヲ納メシトテ欲セバ(幾字幾語返信料濟)又ハ畧符号ヲ設令ハ和文ナレバ「ナツ」二十字(歐文ナレバ(R. P. 30 W. words))ト記スベシ然レモ原信價ノ三倍超ニ過スヘカラス 第二節 (明治十五年六月第十一号布達改正) 着信局ニ於テハ前納ノ金額ニ當ル證券ヲ信書ト共ニ受信人ニ交付シ而シテ何レノ地方ヘ宛ルル此證券ヲ以テ隨意ニ返信ヲ送ラシム 但此返信ハ他ノ電報ト同シク通常ノ取扱タルヘシ 第三節 (明治十五年六月第十一号布達改正) 其返信ノ辭數前納金額ノ辭數ニ充タサルトキハ其剩餘ハ返信ヲ出ス者ニ交付シ若シ此證券ノ金額ニ過ルルハ其不足金ヲ同人ヨリ徴収ス 第四節 (明治十五年六月第十一号布達追加) 此證券ハ交付ノ日ヨリ六週日間費用スヘキモノトス此期限ヲ過レバ廢紙トナシテ前納金額ヲ返還セズ故ニ若シ返信ヲ出サス前納金額ヲ出狀人ニ返却セント欲セバ此期限内ニ其證券ヲ添テ着信局ヘ申出ヘシ 着信局ヨリハ郵便ヲ以テ發信局ニ報シテ出狀人ニ通知セシム故ニ出狀人ハ返信料受領證ヲ持參シテ現金ト引換ヘシ 但右郵便稅ヲ納ムヘシ 第五節 (明治十五年六月十一号布達追加) 若シ其着信ヲ交付スルヲ能ハス又ハ證券ヲ受領スルヲ拒ムルハ着信局ヨリ電報ヲ以テ發信局ヲ經テ其事實ヲ出狀人ニ報知ス此電信ハ返信ノ代リト見做シテ前納シタル金額ヲ收入

第三編 公益ニ關スル罰則 ○電信條例

ス一音信料以上ヲ前納シタルモノハ唯一音信料ヲ收メテ其餘ハ出狀人ニ還付ス。但受信人ニ配達スル能ハサルキ着信局ニ於テハ其名宛ノ不十分ナルカ又ハ傳送上誤謬アリシト思考セハ發信局ヘ局報ヲ以テ報知シ之ヲ正ス。受信人ヲ探索シテ一週日過ルモ其所在ヲ發見セズ或ハ出發後等ニテ配達スルヲ能ハサルニ決セハ左ノ文例ニ因リ直チニ課金局報ヲ以テ之ヲ報知ス。○第何号某ヘノ電報ハ届得ズ。證券ヲ受領スルヲ拒ムキハ左ノ文例ニ因リ直チニ課金局報ヲ以テ之ヲ報知ス。○第何号ノ返信証券ハ某受取ラズ。受信人ニ交付スル能ハサル電報ハ第四篇第五章ニ因リ局ニ留置クナリ。○第二章 照校電報。○第一節 凡テ出狀人電報ノ照校ヲ欲セハ(照校)又ハ其畧符号ヲ名宛ノ下ニ記入スヘシ然ルキハ局々送受ノ際必ス全文ヲ丁寧反復ス。○第二節 照校手數料ハ其電報辭數現貨金ノ半額ヲ増納ムヘシ。○第三節 文字又ハ數字ノ聯集等ニテ全ク語辭文意ノ通曉シカタク電報ハ其誤謬ヲ豫防スルカため照校トナスヲ良トス然レハ通常諸辭ヲ用テ他ノ意味ヲ含マセタル電報ハ此限ニ非ス。○第四章 受信報知。○第一節 凡テ出狀人電報ノ正ニ達セシヤ否ヤノ報知ヲ得ント欲セハ(受信報知)又ハ其畧符号ヲ名宛ノ下ニ記入スヘシ然ルキハ受信人ヲシテ確受ノ時刻ヲ受証紙ニ記入セシメ之ヲ答報ス故ニ之ヲ乞フキハ其手數料トシテ更ニ一音信料ノ貨金ヲ前納スヘシ。○第二節 受信報知ハ信紙ニ記載シ私報ノ例ニ依リ直ニ出狀人ニ送付ス。其文例左ノ如シ。○中央局(發信局)川口局(着信局)○何地何某ニ宛テタル第何号ノ音信ハ(何月幾日)午前後(何時何分)配達セリ(或ハ不達ノ事實)。但其順席ハ局報ノ例ヲ以テ私報ヨリ先ニ傳送ス。○第三節 受信人ニ配達スル能ハサルキハ着信局ニ於テ其名處不十分ナル

カ又ハ傳送上誤謬アリシト思考セハ左ノ文例ノ如ク局報ヲ先ニ送而後音信ヲ配達スルヲ得ハ直ニ受信報知ヲ送ルヘシ若シ其局報ヲ送リシ後二十四時間ヲ過ルモ之ヲ配達シ得サルキハ更ニ其由ヲ報知ス。○第何號某ヨリ月日某(其受信セシ名宛ノマ、ノ寫ニテ)ニ宛タル音信ハ受信人ヲ尋不得ス。○第四節 受信報知ヲ要スル出狀人共着信局ヨリ受信人ニ別使若シハ郵便ヲ以テ配達セラレシコトヲ欲セハ其囑附ヲ名宛ノ下ニ記入シ且第四篇第七章ニ因リ配達賃ヲ納ムヘシ但郵便ニテ遞送スルトキハ其郵便局ニ付托セシ時刻ヲ出狀人ニ答報ス。○第五章 書留電報。○第一節 誤謬ノ憂ヲ防キ且達否ノ確報ヲ得ント欲セハ(書留)又ハ其畧符号ヲ名宛ノ下ニ記入スヘシ其電報ハ照校ト受信報知ト兼併シタルモノナリ。○第二節 書留料ハ通常電報辭數現貨金ノ二倍トス。○第三節 書留電報ヲ郵便ニテ遞送スルトキハ書留郵便トナス故ニ其郵便稅ヲ納ムヘシ而シテ出狀人ニハ郵便局ニ付托セシ時刻ヲ答報ス。○第六章 追尾電報。○第一節 受信人他所ヘ轉居又ハ旅行等ニヨリ其新居所ヘ電報ヲ追送セント欲スル爲メ出狀人豫メ其慮アラハ甲乙丙ノ居所ヲ賴信紙ニ書シ且追尾又ハ其畧符号ヲ名宛ノ下ニ記入スヘシ。○第二節 唯テ追尾トノミ記シテ他ノ居所ヲ記セサル者ハ着信局ニ於テ先ツ之ヲ其名處ニ送り若受信人其住所ニ在ラサレハ更ニ新居所ヲ書改メサスルカ又ハ門戸ニ標示アルキハ直ニ之ヲ再送ス然レハ新居所不分明ナルカ又ハ再送スト雖受信人ヲ尋得サルキハ音信ヲ其局ニ留置クナリ。○第三節 追尾ト記シ且其居處ヲ逐書シタルモノハ受信人ニ達スルマテ逐局之ヲ電送シ若シ受信人ヲ尋不得サルキハ其終尾ノ局ニ於テ前節ノ規則ニ準シ之ヲ取扱フナリ。追尾電報ノ本文ハ素ヨリ

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○電信條例

一辭モ省署セテ逐届之ヲ傳送ス然レモ逐書シタル名處ハ其當サニ送ルルキ名處ノミチ存シ既ニ經過セシモノハ之ヲ削去ス ○第四節 追尾電報ノ出狀人ハ唯ク第一着局マテノ賃金ヲ納メ第一着局以外ノ通信料ハ受信人ヨリ徴収ス ○第五節 凡テ電報ニ何タル囑附ナキモノト雖モ受信家ノ者ヨリ追尾ノ依頼アラハ(改メ追尾)ノ辭ヲ名宛ノ下ニ記入サセ之ヲ逐處電送スルヲ得ヘシ 但和文ノ名處ハ其多少ニ拘ハラズ第一發信ノ際金五錢ヲ收ムルノミ ○第六節 何人ニテモ平常配達ヲ受ル電信分局管内ノ者ハ轉徙等ノ事由ヲ該局ニ陳述シ置キ其電信ノ到着次第本章ノ規則ニ準ジ再送セラルハコヲ請ヒ得ヘシ此諸願ハ必ス書面ヲ以テスヘシ ○第七節 電信分局之レナキ地方ヘノ追尾電報ハ前拂郵便ニテ之ヲ送り信紙中ニ通信料若干郵便税若干ト朱書ス故ニ其金額ヲ納ムルニハ郵便切手ヲ以テスルカ又ハ適宜ノ方便ヲ以テ着信局ヘ送致スヘシ ○第八節 受信人ニ交付スル送達紙ニハ發信局ノ局名月日時分ヲ記入ス ○第九節 追尾傳送ノ後其受信人ノ所在不分明ニテ電報ヲ配達シ得サルカ又ハ受信人ニテ賃金ヲ出スコヲ拒ムルハ其追尾ニ依頼セシ者ニ事實ヲ報シテ不足金ヲ追收ス ○第七章 連名電報 ○第一節 同文ノ電報ヲ其同都邑中ニ住スル數名又ハ同名ノ數家ニ各配達スルコヲ得ヘシ此電報ハ甲一箇ノミニ定則ノ賃金ヲ課シ乙丙丁ハ各騰寫一通毎ニ和文ハ金七錢歐文ハ金二十五錢ヲ納ムヘシ 但和文ノ名所ハ其多少ニ拘ハラズ金錢ヲ收ムルノミ ○第二節 書留電報ヲ連名ニスルキ甲一通ニ書留ノ賃金ヲ課シ其外ハ騰寫料ノ外ニ各一音信料ヲ納ムヘシ ○第三節 照校電報ヲ連名ニスルキハ甲一通ニ増賃ヲ課シ餘ハ皆騰寫料ヲ納ムヘシ ○第四節 受信報知ヲ連名ニスルキハ本章ノ

第一節ニ云フ定則ノ賃金及騰寫料ノ外其名數ニ應ジ各手數料一音信ツ、納ムヘシ ○第五節 其送達チナスニ別局ヲ要スル連名電報ハ一々定則ノ賃金ヲ納ムヘシ 但東京大阪ノ如キ一市内ニテ別局ヲ用ルモノハ本章ノ第一節ニヨルヘシ ○第六節 各地ノ人數名及ヒ同地ノ人數名ニテ電報ハ出狀人ヨリ各通ノ送達紙毎ニ連署スルコトヲ請ハサレハ只タ一名處ノミチ記ス故ニ之ヲ依頼セント欲セバ(連署幾人)ナル辭ヲ名宛ノ下ニ筆記スヘシ ○第七節 數名ニテモ住居ナク同クスル者ニ宛タル電報ハ送達一紙中ニ連署シテ其中ノ一名ニ配達スルカ故ニ別ニ騰寫料ヲ收メス ○第八節 數名ノ中ニテ或ハ郵便或ハ別使ヲ用ルモノハ其名所ヲ括弧ニテ區畫シ直下ニ郵便別使等ノ辭ヲ記入スヘシ(設令ハ)

甲 郵便又ハ
乙 別使
丙

第八章 郵便頼信 ○第一節 電信分局ノ設ケナキ地方ヨリ郵便ニテ電信ヲ差出ス者ハ郵便切手ヲ以テ通信料トナシ電信文ト合封シ書留郵便ニテ其近傍ノ電信分局ニ遞送スヘシ然ルキハ其局ヨリ之ヲ傳送ス ○第二節 電信賃錢表ハ各地郵便局ニ備置キ之レアルニツキ該所ニ至リ閱覽スヘシ若シ通信料等ニ不足アル時ハ先拂郵便ヲ以テ不足ニ倍ノ賃金ヲ追納セシム然レモ出狀人ノ所在不分明等ノキハ受信人ヨリ之ヲ償却セシムヘシ右追納ノ節ハ郵便切手ヲ以テスルカ又ハ適宜ノ方便ニテ送致スヘシ ○第九章 第五篇ノ諸件ヲ實施スルニ方テ至急私報返信料前納照校電報受信報知書留電報追尾電報連名電報郵便頼信郵便送達別使配達等衆庶ノ爲ニ設タル便利ノ方法ヲ併用スルコトヲ得ヘシ然レモ第二篇第五章ノ規則ニ戻ルヘカラス ○第六篇 賃金

賠償 ○第一章 報電送受ノ際甚クシキ誤謬ヲ生シテ判然其用辨ヲ闕キタル書留及ヒ照校電報ト通信取扱上ノ過失ニ因テ甚シク遅延ニ迫ラカ又ハ其届先ニ達セサル諸電報トノ賃金ハ之ヲ還付ス ○第二章 前章ノ賠償規則ハ唯タ不達遅延又ハ誤謬ヲ生シタル原信ノ賃金ニ限ルナリ而シテ其不達遅延誤謬ヨリシテ更ニ信報ヲ要スルニ至ルトモ其賃金ハ賠償セズ ○第三章 凡テ賃金賠償ノ請求ハ電報ノ日附ヨリ二ヶ月以内電信局長ニ宛テ申陳スヘシ此期限ヲ過レハ一切受理セズ ○第四章 不達ノ節ハ着信局カ又ハ受信人ノ書面ヲ添へ誤謬遅延ノ節ハ現ニ受信人ニ達シタル電報ノ原書ヲ添へテ出狀人ヨリ電信局長ニ申陳ス可シ ○第五章 遅延ノ爲メ告訴スルニハ其電報ヲ郵便ニテ遞送スル時日ヨリモ後レ漸ク届先ニ達シタルモノニ限ル ○第六章 國安ヲ害シ或ハ國法ニ悖ル電報ヲ抑止スルハ其徵収シタル賃金ヲ出狀人ニ還付ス ○第七章 連名電報一通以上ノ寫ヲ作シタル音信中幾通カノ賃金ヲ賠償スルハ甲一信ノ定則賃金及ヒ寫ノ數トニ因テ收入シタル金額ヲ連名總數ニテ除算シ其高ヲ以テ賠償スヘキ一通ノ額ト定ム ○第七篇 官報 ○第一章 官報ハ何レノ時ニテモ私信ヲ用ケルヲ得ヘシ ○第二章 官報ハ之ヲ送ル人ノ官印ヲ鈐スヘキモノトス然レモ官報タルノ確証アラハ必シモ之ヲ要セズ ○第三章 受取リシ官報ノ原信ヲ證據トシ持參スレハ其返信ヲ官報トシテ送ルコトヲ許ス ○第四章 明治十五年六月第十一号布達改正(内國至急官報ハ通常音信料ノ二倍ヲ納メシメ他ノ内國官報ヨリ先キニ傳送スヘシ)但閉局後ト雖モ之ヲ賴信送受スルヲ得 ○第五章 官員ヨリ官員ニ送ル電信ト雖モ官用ニ非サルモノハ皆之ヲ私報トス ○第八篇 課金局報 ○第一章 電報ノ改正

補缺及ヒ既送現送ノ音信ニ關シ電信局宛テ電報ハ定規ニ因リ賃金ヲ納メシメ之ヲ課金局報トシテ傳送ス 但電報取扱上ヨリ生シシ誤謬ニ依テ不得止是等ノ通信ニ及フキハ此限ニ非ス ○第二章 受信人ハ電報ヲ受領セシ後二十四時内ナレハ其電報中懸念疑惑スル字句ノ校正ヲ請ヒ得ヘシ 出狀人ハ賴信後七十二時内ナレハ前同様其字句ヲ加削改正スルコトヲ請ヒ得ヘシ 但シ假ニ左ノ金額ヲ納ムヘシ 一受信人ヨリ願出ルキハ尋問現字數音信料及ヒ其校正スヘキ字句添詞ノ現字數ニ因リ計算シタル返信料 二出狀人ヨリ願出ルキハ改正スヘキ字句添詞ノ現字數ニ因リ計算シタル音信料若シ其返信ヲ求ルキハ其現字數音信料 ○第三章 例規ニ據リ之ヲ校正セシ後其文字ノ誤謬ヲ生シタルコト全ク通信上ノ過失ニ決セハ假ニ収メタル金額ヲ還付スヘシ然レモ其原信ノ賃金ハ還付セサルナリ ○第九篇 雜則 ○第一章 凡テ出狀人ハ其出狀人タルニ相違ナキ證據ヲ差出セハ書置キタル電報ヲ停止スルコトヲ得ヘシ未タ此電報ヲ傳送セサル時ハ手數料トシテ金五錢ヲ收メ其餘ハ總テ之ヲ還付ス ○第二章 既ニ傳送中ナレハ其電報ノ現ニ經過セシ處マテノ賃金ヲ収メ其餘額ヲ還付ス ○第三章 既ニ傳送セシ後出狀人ニテ其電報ヲ停止セント欲セハ更ニ着信局ヘ宛テ其事由ヲ電報スルノ外ニ他術ナシ故ニ其現字數ノ賃金ヲ納ムヘシ且此囑托ヲ如何カ處分セシヤノ報知ニテ得ント欲セハ其返信料(現字數)ヲ納ムヘシ ○第四章 電報發着ノ月日ヨリ一ヶ月以内ナレハ出狀人受信人又ハ其代理タル證據ヲ以テ發着局ニアル原書或ハ謄寫ヲ一見センコトヲ乞ハ、則チ之ヲ示ス又其原信ノ文書ニ相違ナシト電信局ノ證印アル正寫ヲ請求スルヲ得ヘシ ○第五章 一ヶ月ノ后更ニ二ヶ月マテハ電信本局ニ申立ヘシ

此期限ヲ過シレハ一切之ヲ聽カス故ニ出狀人又ハ受信人ヨリ其請求スル電信ノ時日ヲ詳細ニ申出ヘシ ○第六章 右第四章ニ據リ請求スル所ノ正寫ノ手數料ハ和文百字以下ハ金二錢トシ歐文百語以下ハ金十錢トス之ニ超ユルモノハ和文百字以下ヲ加ル毎ニ金二錢ヲ増シ歐文百語以下ヲ加ル毎ニ金十錢ヲ増ス ○第七章 電報新書ニ依リ語辭ニ代用ナル數字ヲ以テ書シタル電報ハ普通國語ト見テ其賃金ヲ納メシム ○第八章 海外電報ハ同盟諸國ノ會議ヲ以テ時々定ムル所ノ電信萬國公法ニ據リテ取扱フヘシ

○工部省第四号達 明治十七年 四月廿八日 道路開設修繕等ノ爲メ電信ノ線路ヲ變換シ又ハ電信柱ヲ移轉セシムコトヲ請求スル時ハ其向ニ於テ實地ヲ實査シ不得止ニ出ルモノハ多少ヲ論セス轉換可取計候得共其費用ハ都テ請求者ニ於テ支辨可致義ト可心得此旨相達候事 但家屋構造又ハ店頭商業ノ支障等ニテ電信柱ノ移轉ヲ請求スル者ハ此限ニアラズ

○第六号布達 明治十六年 二月廿八日 兵庫縣下播磨國明石郡西垂水村ヨリ同縣下淡路國津名郡岩浦ニ海底電信線新設並ニ岡山縣下備前國兒島郡澁川村ヨリ愛媛縣下讚岐國阿野郡乃生村ニ海底電信線増設別紙兩圖面ノ通ニ候條右線路左右各二百間以內ニ於テ船艦投錨漁業採藻等之ヲ禁ス(圖面略ス) 右布達候事

○第七号布達 明治十七年 三月十五日 佐賀縣下肥前國東松浦郡小友村ヨリ長崎縣下壹岐國石田郡郷ノ浦同縣下對馬國下縣郡巖原小茂田村ヲ經テ朝鮮國釜山浦ニ海底電信線設置候條別紙圖面ニ記載ノ距離內ニ於テ船艦投錨漁業採藻等之ヲ禁ス(圖面略ス) 右布達候事

○第三十号布達 明治十七年 十二月廿七日 埼玉縣下武藏國南葛飾郡栗橋宿ヨリ茨城縣下下總國西葛飾郡中田村ニ左ノ圖面ノ通水底電信線布設候條右線路ノ左右各二十間以內ニ於テ船筏ノ繫留及漁業土砂堀取等ヲ禁ス 右布達候事

○第三十一号布達 明治十五年 十月十日 青森縣下陸奥國東津輕郡一本木村ヨリ函館縣下渡島國函館區東川町ニ別紙圖面ノ通海底電信線ヲ設置候條右線路左右二百間以內ニ於テ船艦投錨漁業採藻等之ヲ禁ス(圖面略ス) 右布達候事

○第四十五号布告 明治十二年 本年一月露西亞國聖彼得爾堡ニ於テ萬國電信盟約ニ加入シ別冊條約書調印交換相濟候條此旨布告候事

○萬國條約書 第一條 同盟各國ハ何人ヲ問ハズ萬國聯合電信ノ方法ニ依テ通信スルノ權利アルコトヲ承認ス ○第二條 同盟各國ハ通信ノ秘密且速達ヲ擔保スルカ爲メ必用ナル百般ノ處置ヲ爲スヘシ ○第三條 然レトモ同盟各國ハ萬國電信取扱上ヨリ起ル一切ノ責ニ任セサルヘシ ○第四條 同盟各國政府ハ通信ノ速達ヲ擔保スルニ十分ナル線數ヲ設備シ以テ特別ノ電線トナシ萬國電信ノ用ニ充ツヘシ 此特線ハ方今電機學經驗上ニ於テ發明セシ最良ノ方法ヲ以テ建設使用スヘシ ○第五條 電信ヲ區分シテ左ノ三種トナス ○第一 官報ハ即チ同盟國ノ首長大臣陸海軍將帥公使又ハ領事ノ通信ヲ云フ ○第二 局報ハ即チ同盟國各電信局ヨリ出セル電信ニシテ萬國電信ノ處務ニ關シ或ハ各局協議ノ上國益トナルヘキ事件ニ關スル者ヲ云フ ○第三 私報

傳送ハ總テ官報者先ニシ他ノ報信ヲ後ニス ○第六條 官報並ニ局報ハ隨時ニ暗号ヲ用テ報スルコトヲ得ヘシ 暗号ヲ以テ書シタル通信ヲ認許セサル國ト雖モ第八條ニ云フ通信停止ノ時ヲ除ク外其私報ヲ傳送スルコトハ許スヘキモノトス ○第七條 同盟各國ハ其國ノ治安ニ害アリ其國ノ法律若クハ風儀ニ悖ルモノト看認ル私報ハ其傳送ヲ差留ルノ權アリ ○第八條 各國政府ニ於テハ期限ヲ定メス一時萬國電信ノ使用ヲ停止スルヲ必要ナリト思考スル時ハ其趣ヲ同盟國各政府ヘ報知シ管下總體ノ電線或ハ一部ノ電線又ハ音信ノ種類ヲ限リ之ヲ停止スルノ權アリ ○第九條 同盟各國ハ音信ノ傳送及ヒ配達ヲ一層保全且便捷ニスル爲メ同盟國電信各本局ニ於テ協議裁決シタル種々ノ方法ヲ以テ各出狀人ニ利益ヲ與ル事ヲ務ムヘシ此各國中孰レニテモ音信ノ傳送及ヒ配達ニツキ別殊ノ方法ヲ用ルコトヲ定メ之ヲ報知スルトキ其成法ヲ以テ亦各出狀人ニ利益ヲ與フルコトヲ務ムヘシ ○第十條 同盟各國ニ於テ萬國稅則ヲ制定スルニハ左ノ諸件ヲ標準トスヘシ 同盟各國ニ於テ各國孰レノ兩國間ノ局ニテモ同線路ヲ以テ送受スル諸音信ノ稅額ハ此彼同一ナルヘシ而シテ此法ヲ施行スルニ當リ歐羅巴ニ於テハ一國ヲ二大區ニ區分スルヲ得ヘシ稅額ハ首尾ノ政府ト中間ノ政府ト協議ノ上各國順次之ヲ定ムヘシ 同盟各國ノ間ニ送受スル音信ニ適用スヘキ稅額ハ何時タリトモ協議ノ上之ヲ改革増減スルコトヲ得ヘシ 萬國稅則ヲ制定スルニ方テハ(ララン)ヲ以テ貨幣ノ本位ト定ム ○第十一條 同盟各國ノ萬國電信局務ニ關スル音信ハ其各國ノ諸線路ヲ悉ク無稅ニテ傳送スヘシ ○第十二條 同盟各國ハ互ニ其收

稅ノ計算ヲ爲スヘシ ○第十三條 此條約書ハ細目規則ヲ合セテ全備スル者トス而シテ該規則ノ條件ハ同盟國各本局協議ノ上何時タリトモ之ヲ改正スルヲ得ヘシ ○第十四條 細目規則中ニ云フ同盟國中各一政府下ニ置ク萬國電信事務局ハ萬國電信ニ關スル諸般ノ報告ヲ集メ之ヲ整理出版シ稅則並ニ細目規則ノ改正ヲ請求スル者アラハ其書ヲ同盟國各本局ニ回達シ而シテ衆議一致シタル改正ノ件々ヲ廣告シ且萬國電信ノ裨益トナルヘキ諸項ヲ電勉熟慮シテ之ヲ執行スル等ノ任ヲ受クルモノトス 此事務局ニ於テ庶務ヲ調理スル爲メ要スル費用ハ同盟國各本局ヨリ支給スヘシ ○第十五條 第十條ニ云フ稅則及ヒ第十三條ニ云フ細目規則ハ此條約書ニ附屬シタル者ニテ條約書ト同一ノ効ヲ有シ且同時ニ施行スヘキモノトス 右稅則及ヒ細目規則ハ會議ノ上更改スルヲ得ヘシ其際ニ於テハ從來參與セシ各國皆之ニ會同スルヲ得ヘシ 此會議ハ定期毎ニ之ヲ開キ而シテ毎回其次會ノ期日并ニ場所ヲ定ムルモノトス ○第十六條 此會議ハ同盟各國ノ諸本局ヨリ派出スル所ノ理事官ヲ以テ成立スヘキモノトス 會議ニ於テハ各本局ノ理事官數名アリトモ決議ノトキハ一人ヲ以テ算ス但一政府下ノ諸局ヨリシテ各此會議ニ列セシト欲スルトキハ外國交際上ノ手續ヲ經テ期日前ニ其會議ヲ開クヘキ國ノ政府ハ照會シ各別ノ理事官ヲ派出セシムルキハ此限ニアラス 右會議ニ於テ改正スル件々ト雖モ同盟各國政府ノ批准ヲ經タル後ニ非サレハ施行スヘカラス ○第十七條 同盟各國ハ萬國一般ニ關係セサル事務上ノ點ニ就テハ各國各自諸般ノ約定ヲ爲スノ權ヲ有ス ○第十八條 方今此條約ニ與ラサル國ト雖モ其請求ニ依リテハ之ニ加入スルコトヲ許スヘシ 右加入ハ會同ヲ開キシ國ハ外國交際上ノ手續ヲ經

第三編 公益ニ關スル規則 ○電信條例

テ照會スヘシ然ルトキハ該國ヨリ其他諸國ヘ之ヲ報知スヘキモノトス。加入セシトシテ當然ニ此條約ニテ定メタル諸件ヲ行ヒ且衆益ヲ共ニスヘキモノトス。○第十九條 此條約ニ加入セサル國々或ハ私立會社トシテ通信ハ此條約第十三條ニ云フ所ノ規則ニ基キ愈進歩ノ通信方法ヲ以テ衆利ヲ圖リ之ヲ取扱フヘシ。○第二十條 此條約ハ歐曆一千八百七十六年一月一日ヨリ施行シ永久ニ遵守スヘキモノトス若シ之ヲ廢棄セント欲スト雖モ其日ヨリ後一ケ年ヲ過ルマテハ仍ホ遵守スヘシ。何レノ國ニ於テ此條約ヲ廢棄スルトモ其國ヲ除ク外他ノ同盟國ニ於テハ依然之ヲ遵守スヘシ。○第二十二條 今般ノ條約ハ同盟國各政府ノ批准ヲ得テ確定スヘキモノトス因テ其定テシタル憑證ハ勉メテ速ニ(比特堡府)ニ於テ互ニ相交換スヘシ。右條件信證ノ爲メニ各國全權公使各其名テ手署シ且其印章ヲ鈐ス。

- 日本國 日耳曼國 澳地利國 匈牙利國 白義國 丁抹國
- 埃及國 西班牙國 佛蘭西國 大不列顛國
- 英領印度國 印度并歐羅巴間管轄 希臘國 伊太利國 那威國 荷蘭國
- 波斯國 葡萄牙國 露西亞國 瑞典國 瑞西國 土耳其國

○內務省乙第六拾六號達 明治十五年 十二月九日 人民私費ヲ以テ開設シタル橋梁渡津及道路等電信配達人配達(特ニ配達人タルヲ證ス)ノ時ニ限リ賃錢請求不相成候條免許人共へ遺漏ナク達シ置ク可シ此旨相達候事

○徵兵令

第一章 總則

第一條 全國ノ男子年齡滿十七歲ヨリ滿四十四歲迄ノ者ハ總テ兵役ニ服ス可キモノトス。

第二條 兵役ハ陸軍海軍共ニ常備兵役後備兵役及ヒ國民兵役トス。

第三條 常備兵役ハ別テテ現役及ヒ豫備役トス其現役ハ三箇年ニシテ年齡滿二十歲ニ至リタル者之ニ服シ其豫備役ハ四箇年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス。

第四條 後備兵役ハ五

第二十八章 徵兵

第一款 徵兵令罰則 明治十六年十二月二十八日第四十六號布告報錄

徵兵令別冊ノ通改正ス

右奉 勅旨布告候事

第一節 年齡其他ノ届出ヲ怠ル者

第四十三條 第三十四條第三十五條第三十六條第三十九條ノ届出ヲ爲サ、ル者及ヒ檢査時日ノ指定ヲ受ケ正當ノ故ナク其場所ニ參會セサル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

一 本條ノ解 ○本條ノ届出ヲ爲ストキ知ラズ又ハ之ヲ知ルモ忘却シテ届出サルモノハ如何スヘキヤ ○檢査時日ノ指定ヲ受ケザルモノヨリ其場ニ參會セサルモノハ如何スヘキヤ

二 第三十四條ノ解

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵兵

箇年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス
 第五條 國民兵役ハ年
 齡滿十七歳ヨリ滿四十
 歳迄ノ者ニシテ常備兵
 役及ヒ後備兵役中ニ在
 ラサル者之ニ服ス
 第六條 各兵役ノ期限
 己ニ滿ルト雖モ戰時或
 ハ事變ニ際スルトキ若
 クハ臨時ニ演習或ハ觀
 兵ノ舉アルトキ若クハ
 航海中或ハ外國駐劄中
 ハ其期ヲ延スコトアル
 ベシ
 第七條 重罪ノ刑ニ處
 セラレタル者ハ兵役ニ

三 第三十五條ノ解
 四 第三十六條ノ解
 五 第三十九條ノ解
 (一)〇本條ハ年齡其他ノ届出ヲ怠リ又ハ検査時日ニ故ナク其場ニ出頭
 セサル者ノ制裁ヲ規定スルモノニシテ即チ徵兵令第三十四條第二十
 五條第三十六條第三十九條ノ届出ヲ爲サ、ル者及ヒ徵兵検査日ノ指
 定即チ報知ヲ受ケナカラテ正當ノ事故ナクシテ其場所ニ出頭セサルモ
 ノハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處セラル、ナリ是レ其届出ヲ怠リ
 又ハ故ナク検査場ニ出頭セサルニ於テハ徵兵事務上ノ滯滞ヲ生シ一
 人ノ爲メニ却テ一般ノ妨害ヲ來スルヲ以テ斯クノ如ク規定セラレタ
 ルナリ然レトモ若シ病氣其他己ムヲ得サル事故アリテ出頭セサル者
 ハ決シテ罰スル所ニアラサルナリ
 〇或問テ曰ク本條ノ届出ヲ爲スヲ知ラス又ハ知ルモ料ラス忘却シ

服スルコトヲ許サズ
 第二章 服役
 第八條 陸軍現役兵ハ
 毎年所要ノ人員ニ應ジ
 壯丁ノ身材藝能職業ニ
 從ヒ步兵騎兵砲兵工兵
 輜重兵及ヒ雜卒職工ニ
 區別シ抽籤ノ法ニ依リ
 當籤ノ者ヲ以テ之ニ充
 ツ
 海軍現役兵ハ海軍所要
 ノ人員ニ應ジ沿海地方
 及ヒ島嶼ノ人民ヲ調査
 シ海軍ニ適ズル職業ニ
 從ヒ水兵火夫職工等ニ
 區別シ抽籤ノ法ニ依リ
 當籤ノ者ヲ以テ之ニ充

テ之ヲ爲サ、ルモノハ如何スヘキヤ曰ク其届出ヲ爲スヲ知ラサル
 モノハ罪ヲ犯スノ意ナキモノナレハ罰スヘカラサルカ如シト雖モ然
 カモ刑法第七十七條第四條ニ法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナ
 シト爲ストヲ得ズトアルヲ以テ到底其罪ヲ免ル、ヲ得サルモノトス
 何トナレハ人民ハ皆法律ヲ知ルト見做シ罰スベケレハナリ若シ夫レ
 然ラスシテ其之ヲ知レリヤ否ヲ鑑別シ以テ罪ノ有無ヲ判セハ天下復
 タ罰スヘキノ罪人ナキニ至ラン是レ法律ノ斯ノ如キ變則ヲ設ケタル
 所以ナリ又其届出ヲ爲スヲ忘却シタル者モ故ラニ其届出ヲ爲サ、
 ル者ニ非ス其情大ニ憐ムヘキモノアルヲ以テ故ラニ届出サル者ト同
 一ノ刑ニ處スルハ允當ナラサルカ如シト雖モ然カモ法律ハ忘却スル
 ト故ラニ爲ストヲ區別セズ概シテ届出ヲ爲サ、ル者ヲ罰スト定メタ
 ル以上ハ忘却者モ到底其刑ヲ免ル、ヲ得サルベシ
 〇或問テ曰ク検査時日ノ指定ヲ受ケサルコヨリ其場ニ參會セサリシ

ツ但海軍志願兵徵募規則ニ依リ就役スル者ハ本令ノ限ニアラス

第九條 陸軍雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮スルコトアル

但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十條 年齢二十歳ニ滿テテ下雖モ滿十七歳以上ノ者ハ現役ヲ志願スルコトヲ得

第十一條 年齢滿十七歳以上滿二十七歳以下ニシテ官立府縣立學校ヲ除ク卒業證書ヲ所

者ハ如何スヘキヤ曰ク本條ノ罪ヲ形成セシハ三ケノ條件備具スルヲ要ス若シ其内一チ欠ケハ決シテ本條ノ罪ヲ成サズルナリ即チ指定ヲ受ケタルコト正當ノ事故ナキコト其場ニ參會セサリシコト是レナリ然ルニ本問ノ場合ニ於テハ其三ケノ條件中一チ欠クモノナレハ所謂本條ノ罪ヲ成サズルモノニ付之ヲ罰スヘカラス勿論ナリトス

(二)○第三十四條ニ毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齢滿十七歳トナル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主(本人戸主ナレハ自身以下戸主トナル者皆同シ)ヨリ本人ノ氏名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ本籍ノ戸長ニ届ケ出ツヘシトアリ故ニ毎年一月ヨリ十二月迄ノ間ニ年齢滿十七歳トナルヘキモノハ其十七歳トナルヘキ年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主又ハ本人ヨリ其旨ヲ本籍ノ戸長ニ届出サルヘカラス若シ其届出チ爲サズ若クハ之ヲ忘却シタル者ハ第四十三條ニヨリテ處罰セラルヘキナリ

持シ服役中食料被服等ノ費用ヲ自辨スル者ハ願ニ因リ一個年間陸軍現役ニ服セシム

其技藝ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ歸休ヲ命スルコトアル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十二條 現役中殊ニ技藝ヲ熟シ行狀方正ナル者及ヒ官立公立學校小學校ノ歩兵操練科卒業證書ヲ所持スル者ハ其期未タ終ラスト雖モ歸休ヲ命スルコトアル

(三)○第三十五條ニ毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齢滿二十歳トナル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ書面ヲ以テ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出ツヘシ若シ届出ノ後翌年四月十日迄ニ異動チ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届出ツヘシ但二十歳未滿ニシテ現ニ服役スル者ハ届出ルニ及ハストアリ故ニ毎年一月ヨリ十二月迄ノ間ニ滿二十歳ニ至ル者ハ其二十歳トナルヘキ年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ノ内ニ前條ト同シク本人ノ氏名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ本籍戸長ニ届ケ出サルヘカラス若シ之ヲ届出テス或ハ其届出チ忘却シタルトキハ本條ニヨリテ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處セラルヘキナリ又其届出チ爲シタル後其者ノ身上ニ關シ異動チ生シタルトキハ其事由ヲ記シテ其事由ノ生シタル日ヨリ三日以内ニ届出テサルヘカラス若シ三日以内ニ之ヲ届出サルトキハ前ト同シク處罰セラルヘモノナリ然レトモ滿二十歳未滿ニシテ志願兵ト

第十三條 豫備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集シ常備隊ヲ充實シ又補充隊ニ編制ス平常ニ在テハ技藝復習ノ爲メ毎年一度六十日以内之ヲ召集シ又兵員實查ノ爲メ毎年一度點呼ヲ爲ス但海軍豫備兵ハ技藝復習ノ爲メ召集スルコトナシ

第十四條 後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ豫備兵ニ次テ之ヲ召集シ常備兵ノ後援ト爲ス平常ニ在テ其技藝復習ノ爲メニ召集シ及ヒ兵員

ナリ現ニ兵役ニ服スル者ハ之ヲ届出ルニ及ハサルナリ

(四)○第三十六條ニ當ル者其資格ヲ失ヒ第十八條第十九條第二十一條ニ當ル者其事故止ミ及ヒ第三十二條但書ニ當ル異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戶主ヨリ本籍ノ戶長ニ届出ベシ但九月十六日以後翌年四月十日以前本條ニ當ル者ハ三日以内ニ本籍ノ戶長ヘ届ケ出ベシトアリ故ニ徵兵令第十七條ニ當リ徵集猶豫ニ屬セシモノ其猶豫ヲ受クヘキ資格ヲ失ヒタルカ或ハ同第十八條第十九條第二十一條ニ當リテ其事故ノ存スル間徵集猶豫ニ屬セシモノ其事故ノ止ミタルカ又ハ同第三十二條ニ當リ第二豫備徵員トナリタルモノ六ヶ年以内ニ第十七條ニ當ル資格ヲ失ヒタル等何レモ其年九月一日以前ニ其異動ヲ生シタルモノハ其年九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戶主ヨリ本籍ノ戶長ニ届出テサルヘカラス又其事故ノ九月十六日ヨリ翌年四月十日迄ノ間ニ生シタルモノ

實查ノ爲メニ點呼ヲ爲スコト豫備兵ニ同シ

第十五條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限り之ヲ召集シ隊伍ニ編制シテ軍役ニ充ツ

第三章 免除及猶豫

第十六條 兵役ヲ免除スルハ癩疾又ハ不具等ニシテ徵兵檢査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘサルモノニ限ル

第十七條 左ニ掲グル者ハ徵集ヲ猶豫ス但其年補充員不足スルトキ

ハ其事故ノ生シタル日ヨリ三日以内ニ之ヲ届出サルヘカラス然ルニ故ラニ又ハ怠リテ或ハ忘却シテ届出サルキハ本條ニヨリテ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處セラル、者ナリ

(五)○第三十九條ニ疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キモノハ其事由ヲ詳記シ其疾病ニ罹ルモノハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ即日戶長ニ届出ツベシ其事故止ムキ亦同シトアリ故ニ疾病犯罪其他何ニ限ラズ入營ノ期ニ際シ突然事故ヲ生シテ入營シ難キモノハ其事故ノ生セシ即日事由ヲ詳記シテ戶長ニ届出サルヘカラス其内疾病ニ罹ル者ニ限リ必ス醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ實病タルヲ保證セサルヘカラス又其病氣或ハ事故ノ己ミタルキハ同様即日ニ届出ヲ爲サルヘカラス然レトモ此際ハ醫師ノ診斷書ヲ要セサルナリ若シ此等ノ届出ヲ爲サス或ハ忘却シテ届出サルトキハ何レモ本條ニヨリテ處罰セラル、者トス

又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員等ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第一項 兄弟同時ニ徵集ニ應スル者ノ内一人及ヒ現役兵ノ兄或ハ弟一人

第二項 現役中死没又ハ兵務ノ爲メ負傷シ若クハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄或ハ弟一人

第三項 戸主年齢滿六十歳以上ノ者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 戸主癡疾又ハ不具ニシテ一家ノ

第二節 兵役ヲ免レント謀ル者

第四十四條 兵役ヲ免レンカ爲メ逃亡シ又ハ潛匿シ若クハ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲アル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

一 本條ノ解○徵兵入營ノ期ニ際シ逃亡又ハ潛匿シタル者ハ總テ本條ニヨリテ處斷セサルヘカラサル乎

二 兵役ヲ免レンカ爲メニ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲スルノ點ニ付テハ刑法ニモ其明文アルヲ以テ何レニヨリテ處斷スヘキヤ○兵役ヲ免カレ又ハ徵集猶豫セラルヘキ者徵集セラルベシト誤信シ本條ノ罪ヲ犯シタルトキハ如何ニ處斷スヘキヤ○兵役ヲ免レンカ爲メニ故ラニ身體ニ疾病毀傷ヲ加フルト雖モ其所爲ハ以テ兵役ニ堪ヘサルニ至ラズ徵集セラルベキハ之ヲ罰ス

生計ヲ營ムコト能ハ

サル者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 戸主

第十八條 左ニ掲グル

者ハ其事故ノ存スル

間徵集ヲ猶豫ス

第一項 教正ノ職ニ在ル者

第二項 官立府縣立

學校ヲ除クノ卒業証

書ヲ所持スル者ニシ

テ官立公立學校教員

タル者

第三項 官立大學校

及ヒ之ニ進スル官立

學校本科生徒

ルヲ得ル乎

(一)○本條ハ兵役ヲ免レンカ爲メニ逃亡シ又ハ兵役ヲ免レンカ爲メニ潛匿シ若クハ兵役ヲ免レンカ爲メニ故ラニ身體ヲ毀傷シ又ハ兵役ヲ免レンカ爲メニ故ラニ疾病ヲ作爲シ其他方法ノ如何ヲ問ハズ總テ詐欺ノ所爲ヲ以テ兵役ヲ免レント謀リタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加セラルハナリ
○或問テ曰ク徵兵入營ノ期ニ際シ逃亡或ハ潛匿シタル者ハ總テ本條ニヨリテ處罰セサルヘカラサル乎曰ク否本條ニ明記セル如ク此罪ヲ組成セシニハ其目的ノ兵役ヲ避クルニ在ルヲ必要トス若シ然ラスシテ他ノ目的ヲ以テ逃亡潛匿シタル者ハ決シテ罰スルヲ得サルナリ何トナレハ逃亡律ハ既ニ廢セラレテ其跡ヲ留メズ又刑法中ニ逃亡ヲ罰スルノ正條アラサレハナリ然リト雖モ本人逃亡ノ目的ハ意中ニ存シ他ヨリ之ヲ證據立ルコト能ハサル處ノモノナレハ事實ノ模樣ニヨ

第四項 陸海軍生徒
海軍工夫

第五項 身幹未定
尺ニ滿タサル者

第六項 疾病中或ハ
病後ノ故ヲ以テ未タ
勞役ニ堪ヘサル者

第七項 學術修業ノ
爲メ外國ニ寄留スル
者

第八項 禁錮以上ニ
該ル可キ刑事ノ被告
人ト爲リ裁判未決ノ
者

第九項 公權停止中
ノ者

第十九條 官立府縣立

リテ果シテ逃亡ノ意アリシヤ否ヲ判定スルハ事實裁判官ノ方寸中ニ在
ルモノナレハ縱令本人他ノ目的ナリト申立ルモ裁判官ニ充分ノ信憑
ヲ與フルニ非サルヨリハ決シテ其罪ヲ免ル、ヲ得サルモノトス
(二)○或問テ曰ク兵役ヲ免レンカ爲メニ身体ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シタ
ル點ニ付テハ刑法第七十八條ニ其明文アリ然ルニ本法ニモ亦同一
ノ罪名ヲ定メラレタル以上ハ聊カ重複ノ嫌ナキヲ免レサルヲ以テ實
際犯人アルニ當リテハ本法ニヨリテ處斷セン手將テ刑法ニヨリテ處
斷セン手聊感ナキヲ免レス曰ク此場合ニ於テハ必ス本法ニヨリテ處
斷スベク刑法ニヨリテ處斷スルヲ得サルナリ何トナレハ刑法ニ其正
條アルニモ拘ハラス更ニ同一ノ制裁ヲ定メラレタルヲ見レハ立法者
於テ其刑ハ刑法中ニ定ムヘキモノニ非スト爲シタル乎又ハ其刑ニ不
完全ナル廉アリテ更ニ其刑ヲ設ケサルヘカラサルノ必要ヲ感セシカ
故ニ更ニ之ヲ本法中ニ掲ケラレタルニ外ナラス故ニ斯クノ如キ場合

學校小學校ニ於テ修業

一箇年以上ノ課程ヲ卒
リタル生徒ハ六箇年以
内徵集ヲ猶豫ス

第二十條 左ニ掲グル
者ハ豫備兵ニ在ルト後
備兵ニ在ルトトナ問ハス
復習點呼ノ爲メ召集ス
ルコトナシ但戰時若シ

ハ事變ニ際シテ太政官
ノ決裁ヲ經テ召集スル
コトアル可シ

第一項 官吏判任
以上及
ヒ局長

第二項 教導職試補
ヲ除ク

第三項 官立公立學

ニ於テハ余カ總則中屢次説明セシ如ク特別法ハ普通法ニ優ルノ原則
ニ從ヒ本條ニヨリテ處斷セサルヘカラサルナリ語ヲ代ヘテ之ヲ言ヘ
ハ刑法ノ該條ハ本法ノ制定ニヨリテ自ツカラ消滅ニ歸シタルモノト
謂フヘキナリ
○或問テ曰ク本來兵役ヲ免カレ又ハ徵集猶豫セラルヘキ者徵集セラ
ルベシト誤信シ本條ノ罪ヲ犯シタルトキハ如何スヘキヤ曰ク其猶豫
セラルヘキモノハ亦時アリテ徵集セラル、コトアルベキモノナレハ身
體ヲ毀傷シ又ハ疾病等ヲ作爲シ徵集スル能ハサラジムルニ致シタル
トキハ到底本條ノ刑ヲ辭スル能ハサルヘシト雖モ兵役ヲ免ルヘキ者
本條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一種ノ不能犯ナレハ之ヲ罰スルヲ得サルナ
リ然レトモ其兵役ヲ免ル、カ爲メニナシタル所爲獨立シテ罪トナル
ヘキ時ハ其刑ヲ免ル、コト得スト雖モ是レ兵役ヲ免レントシタル者
ヲ罰スルニ非スシテ其方法ヲ罰スルモノナレハ完ク本條トハ關係ナ

校教員

第四項 府縣會議員
 第五項 官立府縣立
 醫學校ノ卒業證書ヲ
 所持シテ醫術開業ノ
 者

第二十一條 官省院廳
 府縣ニ於テ餘人ヲ以テ
 代フ可カラサル技術ノ
 職ヲ奉スル者ハ太政官
 ノ決裁ニ依テ徵集ヲ猶
 豫スルコトアル可シ
 第二十二條 左ニ掲ク
 ル者ハ第十七條ニ照シ
 テ徵集ヲ猶豫スルノ限
 ニ在ラス
 第一項 附籍戶主及

キモノトス

○或問テ曰ク兵役ヲ免レンガ爲メ故テニ身体ニ疾病毀傷ヲ加フルト
 雖モ其所爲ハ以テ兵役ニ堪ヘサルニ至ラスシテ徵集セラルベキハ
 之ヲ罰スルヲ得ル乎曰ク斯ノ如クセハ兵役ヲ免ルベシト誤信シテ之
 チ爲シタルモ而カモ其目的ヲ達スル能ハサルトキハ所謂意外ノ舛錯
 ニヨリテ未ダ遂ケサル者ニシテ未遂犯ト云ハサルヲ得ル而モ本法中
 ニ未遂犯ヲ罰スルノ明文ナキカ故ニ刑法總則第百十二條第二項ニヨ
 リテ之ヲ罰スルヲ得サルモノトス

第二款 徵兵事務條例罰則 明治十七年六月第
十八号布達報錄

第百五十九條 明治十六年十二月迄ニ年齡滿二十歳ト
 ナリタル者ニシテ舊徵兵令第六十條第六十一條及ヒ
 舊徵兵事務條例第百八十條ノ届出ヲ怠リタル者明治
 十七年九月十五日迄ニ届出サルトキハ新徵兵令第四

七附籍戶主ノ嗣子或

ハ承祖ノ孫

第二項 癡疾又ハ不
 具等ニシテ一家ノ生
 計ヲ營ムコト能ハサ
 ルニ非ス或ハ重罪ノ
 刑ニ處セラレタルニ
 非スシテ嗣子承祖ノ
 孫若クハ相續人ヲ罷
 メ更ニ定メタル嗣子
 承祖ノ孫
 第三項 年齡六十歳
 未滿ノ戶主癡疾又ハ
 不具等ニシテ一家ノ
 生計ヲ營ムコト能ハ
 サルニ非ス或ハ重罪
 ノ刑ニ處セラレタル

十三條ニヨリ處分スヘシ

○本條ハ徵員相當ノ年齡ニ達シタルニ故ナク其届出ヲ怠リタルモノ
 、制裁ヲ規定スル者ナリ抑モ新徵兵令第四十三條ニ於テ同令第三十
 四條第三十五條等ノ届出ヲ怠リタルモノハ三圓以上三十圓以下ノ罰
 金ニ處ストノ制裁ヲ定メタル以上ハ舊徵兵令施行ノ際同様ノ届出ヲ
 怠リタルモノモ亦同一ノ刑ニ處セサルヲ得サルニ會セリ然リト雖モ
 法ハ將來ニ行フヘシ既往ニ及ホスヘカラストハ是レ法理ノ原則ナレ
 ハ縱令新徵兵令ニ於テ年齡ノ届出ヲ怠リタル者ヲ罰スルノ刑名ヲ定
 メタルニモセヨ決シテ之ヲ以テ舊徵兵令實施ノ際年齡ノ届出ヲ怠リ
 タルモノヲ罰スヘカラスハ論ヲ族々サルナリ故ニ之ヲ罰スル爲メ
 本條ニ於テ特ニ其明文ヲ設ケラレタル所以ノモノナレハ明治十六年
 十二月迄ニ年齡滿二十歳トナリタル者ニシテ舊徵兵令第六十條第六
 十一條及ヒ舊徵兵事務條例第百八十條ノ届出ヲ怠リタル者ハ明治十

ニ非スシテ戸主ヲ罷メ年齢六十歳以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主及ヒ其戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 嗣子承祖ノ孫失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

第六項 第二項第三項第四項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ

七年九月十五日迄ニ其年齢ヲ届出サルトキハ新徴兵令第四十三條ニ依リ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處セラルヘキナリ

舊徴兵令第六十條第六十一條及ヒ舊徴兵事務條例第百八十條ハ別ニ解釋ナ下サ、ルモ其意味了然タルヲ以テ參照ノ爲メ左ニ其本文ヲ掲ク

舊徴兵令第六拾條 全國ノ男子年齢十七歳ニ至レハ國民軍籍ニ入ルヘキヲ以テ毎年一月ヨリ十二月迄ニ十七歳トナル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ其戸主(本人ナレハ即チ自身)ヨリ本人ノ姓名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ戸長ヘ届出ベシ戸長之ヲ取調ヘ同月二十五日迄ニ郡區長ヘ差出シ郡區長點檢ノ上十一月十日迄ニ使府縣廳ヘ差出シ國民軍名簿ニ載セ置クベシ

但他府縣ヘ寄留スル者ハ本籍ノ戸長ヘ届出テ寄留地ノ戸長ヘハ届出ルニ及ハス

戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼ギタル戸主

第七項 年齢六十歳未滿ノ者癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼ギタル戸主

第八項 嗣子承祖ノ孫又ハ相續人癡疾又

全 第六十一條 男子二十歳ニ至レハ兵役ニ就クヘキヲ以テ毎年一月ヨリ十二月迄ニ二十歳トナル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ左式ノ如ク其戸主(本人戸主ナレハ即チ自身)ヨリ戸長ヘ届ケ出ベシ戸長之ヲ取調メ同月二十五日迄ニ郡區長ヘ差出シ郡區長點檢ノ上箇條ヲ區別シ十月十日迄ニ名目ノ届書ト共ニ使府縣廳ヘ差出スヘシ使府縣廳之ヲ調査シ徴兵諸名簿ニ載セ十二月二十五日迄ニ所管鎮臺ヘ出スヘシ(圖書式之ヲ略ス)

舊徴兵事務條例第百八十條 徴兵令第三十條ノ項目ニ當リ徵集猶豫ノ者並ニ同令第四十一條第四十二條ニ當ル翌年廻シノ者事故止ムトキハ勿論第三十二條ニ當ル者ハ徴兵各自届出期限ニ至レハ第十二條乃至第十九條揭示ノ手續ヲ以テ戸長ヘ届出テ戸長ハ第十二條ニヨリ郡區長ヘ差出シ郡區長ハ部類ヲ分テ名簿ヲ作り第二十二條ノ名簿ト共ニ徴兵支署ヘ差出スヘシ

ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタ

但徴兵令第三十二條ニ當ルモノニシテ更ニ免役又ハ徴集猶豫相當ノ名稱ヲ得タル者及ヒ同令第三十四條第三十五條ニ當ル者亦本條ノ例ニ準ス

ルニ非スシテ戸主ノ死亡跡若クハ戸主ヲ罷メタル跡ヲ繼カス他ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主
第九項 戸主失踪シテ五箇年ヲ經サル者ノ跡ヲ繼キタル戸主 ○第二十三條 第十八條第一項第三項第四項徒ヲ除ク陸海軍生第十九條第二十一條ニ當ル者ト雖モ第三十五條ニ示シタル徴兵各自屆出期限即チ九月十六日以後ニ係ル者ハ徴集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス ○第四章 徴兵區及ヒ抽籤 ○第二十四條 徴兵區ハ軍管師管及ヒ府縣ノ區域ニ從フ其軍管ニ從フモノヲ軍管徴兵區ト爲シ師管ニ從フモノヲ師管徴兵區ト爲シ府縣ニ從フモノヲ府縣徴兵區ト爲ス但府縣ノ管地兩師管ニ分屬スルモノハ師管毎ニ一區ヲ設ク ○軍管及ヒ師管ノ徴兵區域ハ別表ニ掲ク ○第二十五條 各鎮臺ニ屬スル歩兵ハ其師管徴兵區限リ其他ノ諸兵ハ其軍管區限リ之ヲ徴集ス但現役徴員及ヒ其補充員不足スルトキ歩兵ハ他ノ師管其他ノ諸兵ハ他ノ軍管徴兵區ヨリ之ヲ補フ ○海軍及ヒ近衛ノ諸兵ハ各軍管徴兵區ニ配當シテ全國ヨリ之ヲ徴集ス ○第二十六條 抽籤ハ各府縣徴兵區限リ之ヲ行フモノトス ○府縣徴兵區ニ於テハ其區壯丁ノ身體檢査終リタル後兵役ニ適ス可キ人員ノ身材職業ニ從ヒ兵種ヲ區別シ番号ヲ定メ抽籤セシム ○第二十七條 籤ハ一郡區毎ニ籤丁ノ人撰キ以テ一名乃至三名ノ總代人ヲ出シテ之ヲ抽カシム ○第二十八條 抽籤

ノ法ハ籤丁ノ數ニ應ジ籤札ニ兵種番號ヲ記シ籤箱ニ納レ籤簿掛ノ面前ニ置キ籤丁名簿ノ順序ニ從ヒ其姓名ヲ呼ビ總代人ノレヲ抽カシメ籤簿掛ハ抽籤ノ正否ヲ監シ抽キ舉グル所ノ番號ヲ高聲ニ呼ハシメ其籤札ヲ受取リ籤簿ニ氏名番号ヲ記シ籤札ハ總代人ニ交付ス ○第二十九條 籤ハ其番号現役徴員ノ數ニ滿ツル迄ヲ以テ現役籤トシ其餘ヲ以テ補充籤トス ○第五章 補充員及ヒ豫備徴員 ○第三十條 補充員ハ補充籤ヲ抽キタル者ヲ以テ一個年問之ニ充ツ其期限內現役兵欠員スル時又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ其番号ノ順序ニ從ヒ之ヲ徴集ス ○補充員ノ數ハ概シ現役徴員五分ノ二ヨリ少カラサルモノトス ○第三十一條 補充員ニシテ其期限內徴集ノ命ナキ者及ヒ第十八條第三項ノ生徒ニシテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ年齡滿二十七歲迄之ヲ第一豫備徴員トス ○第三十二條 第十七條ニ當ル者ニシテ其年徴集ノ命ナキ者第十八條第二十一條ニ當ル者ニシテ七個年問其事故ノ存スル者及ヒ第一豫備徴員ヲ終リタル者年齡滿三十二歲迄ハ之ヲ第二豫備徴員トス但シ第十七條ニ當ル者第二豫備徴員ト爲リタル後六個年問ニ該條ニ掲グル資格ヲ失ヒタルトキハ現役ニ徴集ス ○第三十三條 豫備徴員ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スル時之ヲ徴集ス但シ第二豫備徴員ヲ徴集スルハ後備兵ヲ徴集スルトキニ限ル ○第六章 雜則 ○第三十四條 毎年一月ヨリ十二月マテニ年齡滿十七歲下ナル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主(本人戸主ナレハ自身以下戸主トアルモノ皆同シ)ヨリ本人ノ氏名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ本籍ノ戸長ニ届出ル ○第三十五條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿二十歲ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同

第三編 公益ニ關スル刑則 ○徴兵

月十五日迄ニ書面ヲ以テ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出ヘシ若シ届出ノ後翌年四月十日迄ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届出ヘシ但シ二十歳未満ニシテ現ニ服役スル者ハ届出ルニ及ハス ○第三十六條 第十七條ニ當ル者其資格ヲ失ヒ第十八條第十九條第二十一條ニ當ル者其事故止ニ及ヒ第三十二條但書ニ當ル異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出可シ但九月十六日以後翌年四月十日以前本條ニ當ル者ハ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届出可シ ○第三十七條 他ノ府縣ニ寄留スル者其地ニ於テ徵集ニ應ゼント欲スルトキハ其地ニ居住スル者(戸主)ヲ以テ證人ト爲シ八月十五日迄ニ戸主ヨリ其旨ヲ本管廳ニ願出可シ但第三十五條ノ届書ハ寄留地ノ戸長ニ差出ス可シ

○第三十八條 現役兵在營在艦中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ服食等ヲ給ス ○第三十九條 疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ其事由ヲ詳記シ其疾病ニ罹ル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ即日戸長ニ届出可シ其事故止ムトキ亦同シ ○第四十條 第三十九條ニ掲クル者其年九月一日ニ至ルモ事故猶止マサルトキハ之ヲ翌年廻シノ者ト爲シ翌年更ニ検査ヲ遂ケ他ノ徵員ニ先テ徵集ス可シ但戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ翌年徵集ノ期ヲ待タズ徵集ス ○第四十一條 兵役ヲ免レンカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潛匿シタル者又ハ正當ノ故ナク検査所ニ參會セズ又ハ第三十五條第三十六條ノ届出ヲ怠リタル者ハ抽籤ノ法ヲ用ヒス直ニ現役ニ徵集シ又ハ翌年検査ヲ遂ケ第四十條ニ掲クル者ニ先テ抽籤ノ法ヲ用ヒス徵集ス ○第四十二條 常備現役年期ノ計算ハ總テ其入營年ノ四月二十日(第四十一條ニ

掲クル者ハ)ヨリ起算シ豫備役及ヒ後備役年期ノ計算ハ其定例編入ス可キ年ノ四月廿日ヨリ起算ス但禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレ又ハ逃亡シタル者其刑期中ノ日數及ヒ逃亡中ノ日數ハ服役年期ニ算入セス ○第四十三條 釋義ノ部ニアリ ○第四十四條 譯義ノ部ニアリ ○第四十五條 本令施行ノ爲メニ要スル規則ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム

○陸軍省甲第三十六號達 明治十七年 八月十九日 徵兵事務條例布達ニ付陸軍徵兵事務取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事 陸軍徵兵事務取扱手續 ○第一項 近衛局及ヒ鎮臺ハ十一月一日ノ現員ニ依リ翌年ノ所要徵員表ヲ製シ十一月十五日迄ニ之ヲ陸軍省ニ開申スベシ ○第二項 徵集人員ニ配當ハ步兵ニ在テハ一師管區内ノ壯丁名簿及ヒ壯丁異動名簿ノ徵集ノ部ニ記載シタル總人員ヲ率トシ他ノ諸兵及ヒ雜卒職工ハ一軍管徵兵區内ノ壯丁名簿及ヒ壯丁異動名簿ノ徵集ノ部ニ記載シタル總人員ヲ率トシ之ヲ府縣徵兵區内ノ壯丁名簿及ヒ壯丁異動名簿ノ徵集ノ部ニ記載シタル人員ニ配當シテ徵兵事務條例第三十三條ノ配當表ヲ作ルベシ 但近衛諸兵ハ一軍管徵兵區内ノ壯丁名簿及ヒ壯丁異動名簿ノ徵集ノ部ニ記載シタル人員ヲ率トシ府縣ニ配當ス可シ ○第三項 毎年新兵徵集ノ季節ニ至レハ鎮臺司令官ハ後備軍司令官府縣駐在官郡區駐在官軍醫其他後備軍司令部書記等ニ巡回ヲ命ス可シ ○第四項 一等軍醫ノ人員ハ一師管徵兵區ニ一人トシ二等軍醫以下軍醫試補以上ノ人員ハ一府縣徵兵區ニ一人乃至三人トス ○第五項 後備軍司令部書記ノ人員ハ一師管徵兵區ニ一人トス ○第六項 地方醫員ハ内務省醫術開業免狀ヲ所持スルモノニシテ其人員ハ概ネ一府縣徵兵區ニ四人乃至六人トス又筆生ノ人員ハ徵兵署ニ五人乃至十

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵兵

八トシ検査所ニ三人乃至七人トス ○第七項 徴兵検査所ハ務メテ壯丁遠路往復滞在等ノ費用
 ナ省署スルカ爲メ一ケ所概ネ二百人乃至五百人ノ見込ヲ以テ之ヲ設ク可シ ○第八項 徴兵檢
 查所ハ壯丁ヲシテ裸体ナラシメ全体ヲ検査シ四支ノ運動ヲ爲サシムルヲ以テ官舎或ハ社寺等ノ
 廣潤ニシテ能ク光線ヲ引キ且温暖ナル適當ノ家屋ヲ撰ビ之ニ充ツ可シ ○第九項 壯丁ノ身体
 検査ノ上合格者ノ等位ヲ甲乙ノ二種ニ區別シ体格強壯ノ者ハ甲種トシ体格甲種ニ亞ギ五種兵ニ
 適セザルモノヲ乙種トスベシ ○第十項 砲兵ニ編入スベキ者ハ体格最健全ニシテ視力清明ナ
 ル者ヨリ之ヲ撰ブ可シ ○第十一項 騎兵ニ編入スベキ者ハ成ルヘク資質敏捷ニシテ馬匹ヲ使
 用スルニ慣レ其体格ハ筋肉肥滿ニ過キズ又瘦瘠ニ失セズ上体ト下体トヲ比較シテ股脚稍長キ者
 ヨリ之ヲ撰ブ可シ ○第十二項 工兵ニ編入スベキ者ハ成ル可ク木工石工竹工船工土工鍛工鑄
 工桶工泥工馬具職屋根職茅屋根職木挽職指物職建具職穴藏職井戸堀職棒削職節職柵職舟夫等ヨ
 リ之ヲ撰ブベシ ○第十三項 輜重兵ニ編入スベキ者ハ成ルベク馬匹ヲ使用スルニ慣レ且讀書
 算術ヲ爲シ得ル者ヨリ之ヲ撰ブベシ ○第十四項 歩兵ニ編入スベキ者ハ職業又ハ技能ノ有無
 ナ問ハズ身体輕捷ニシテ銃器ヲ執リ能ク勞動ニ堪ユル者ヲ採用スベシ ○第十五項 近衛兵適
 當ノ者不足スルトキ其不足ハ鎮臺諸兵適當ノ者ヨリ身幹体格品行ヲ撰ミ之ヲ補フベシ ○第十
 六項 雜卒若クハ職工適當ノ者不足スルトキ其不足ハ体格ノ五種兵ニ亞ク者ヨリ之ヲ補ヒ尙不
 足スルトキハ身幹四尺九寸以上ニシテ体格甲種ノ者ヨリ之ヲ補フモノトス ○第十七項 徴兵署
 ニ於テハ一年志願者ノ人員ヲ調査シ種類ヲ分テ府縣駐在官ヨリ所屬後備軍司令官ヲ經テ毎年十

一月十日限リ所管鎮臺ニ申告シ鎮臺ニ於テハ一軍管ニ取纏メ同月三十日限リ之ヲ陸軍省ニ開申
 スベシ ○第十八項 後備軍司令官徴兵署巡回日割ハ成ルヘク三月十日以前ニ於テ其師管ノ徴
 兵事務ヲ竣ハル如ク之ヲ定ムベシ ○第十九項 徴兵相當ニシテ合格ノ者抽籤以前現役ヲ志望
 スルトキハ徴兵署ニ於テ身幹職業ニ從ヒ現役編入順序ニ據テ許可スベシ ○第二十項 徴兵事
 務條例第百二十二條ニ當ル志願ハ徴兵令第十條ニ當ル者ノ次ニ列シ又前條ノ志願者ハ尙ホ其次
 ニ列シ之ヲ現役ニ編入スベシ ○第二十一項 一年志願兵合格ノ者ハ抽籤ノ法ヲ用ヒス年齢ノ
 順序又同年齡ノ者ハ誕生日日ノ順序ニ從ヒ別ニ府縣及ヒ種類毎ニ一貫ノ番号ヲ付スベシ ○第
 二十二項 徴兵令第二十八條ノ籤丁名簿ハ郡區ヲ分テ美濃紙半葉ニ三名若クハ四名宛籤丁ノ住
 所姓名ヲ登記シ而シテ抽籤施行ノ後一人毎ニ之ヲ截テ切リ總代人ニ附與スベシ ○第二十三項
 徴兵事務條例第七十八條ニ掲グル附添人ノ割合ハ概ネ新兵五人以上三十人未滿ノ一群ニハ附
 添人一名三十人以上ノ一群ニハ三十人毎ニ二名ノ附添人タルベシ 但四名以下ハ附添人ヲ要セ
 ズ各自單行セシムベシ ○第二十四項 徴兵各自屆出期限ハ徴兵令第三十四條第三十五條及ヒ
 第三十六條第三十七條ノ如シト雖トモ土地廣潤或ハ遠隔ノ島嶼ヲ管轄スル府縣ニ在テハ所管鎮
 臺上議シ其期限ヲ操上クルモ妨ケナシ尤同令第二十三條揭示ノ項目ニ當ル徴集猶豫ニ關スル者
 ハ凡テ九月十五日ヲ以テ分界トスベシ ○第二十五項 徴兵令第十七條ノ項目ニ當ルモノニシ
 テ同令第十八條若クハ第十九條第二十二條ニ當ル名稱ヲ併有スル者ハ尙ホ第十七條ノ名稱ニ從
 ヒ徴集猶豫名簿ニ登記シ又同令第七條ニ當ル者ハ之ヲ除役名簿ニ登記スベシ ○第二十六項

徵兵事務條例第十五書式ノ番號割符ハ川紙ハ鎮臺ニ於テ左ニ示ス雛形ノ如ク厚紙ヲ以テ之ヲ製スヘシ ○第二十七項 徵兵事務條例第六書式ノ人別表川紙及ヒ第十三書式ノ検査表川紙ハ府縣廳ニ於テ左ニ示ス雛形ノ如ク美濃紙半葉ニ之ヲ製シ又雛形圖面ノ身幹度尺ヲ製シ検査所及ヒ徵兵署ニ備ヘ置クヘシ

番號割符雛形ハ之ヲ零ス

明治十六年十月十八日

○第三十八號布達 海軍志願兵徵募規則別冊ノ通之ヲ定ム 右布達候事 別冊 海軍志願兵徵募規則 ○第一條 海軍兵員ヲラソコトテ志願スル者ハ本則ニ照シテ之ヲ徵募ス但軍樂隊ハ別ニ規則ヲ設ク ○第二條 志願兵ノ服役ヲ別チテ現役及ヒ豫備役トス ○現役年期卒ニ在テハ長期ヲ十箇年短期ヲ七箇年トシ准卒ニ在テハ總テ三箇年トス ○豫備役ハ現役長期ヲ終リシ者ヲシテ二箇年間短期ヲ終リシ者ヲシテ五箇年間之ニ服セシム ○准卒ニ在テハ豫備役ナシ ○第三條 卒ニ徵募スル者ハ年齡十七歳ヨリ二十五歳迄ノ者ニシテ其職名ノ大別ハ左ノ如シ ○水兵 火夫 職工 看病夫 ○第四條 准卒ニ徵募スル者ハ年齡十五歳ヨリ四十歳迄ノ者ニシテ其職名ハ左ノ如シ ○裁縫夫 造船夫 守燈夫 剃夫 ○廚宰介及ヒ諸廚宰 ○割烹手介 割烹夫及ヒ諸割烹手 ○諸從僕及ヒ諸仕丁 ○第五條 卒ノ年齡ハ第三條ニ掲クル如シト雖モ左ニ掲クル者ハ出願スルコトヲ得

- 一 十五歳以上ニシテ體格強壯ナル者但十七歳ニ滿タサレハ服役年數ニ算入セス
- 二 二十五歳未滿ニシテ西洋形船舶或ハ造船所等ニ從事シ其技藝ニ熟達スル者
- 三 二十五歳未滿ニシテ府縣立商船學校ノ卒業證書ヲ所持スル者

四 前二項ノ者ハ直ニ下士ニ任スルコトアリ

○第六條 水兵火夫ニ徵募スル者ノ身幹ハ五尺以上トス但十七歳未滿ノ者ハ四尺九寸以上トス ○第七條 豫備役ニ入ル者ニハ其証書ヲ附與シ常ニ家居シテ產業ヲ營マシメ戰時或ハ事變ニ際シ之ヲ召集ス ○第八條 卒ニシテ現役ヲ終リ尙一箇年以上ノ再役ヲ出願スル者ハ之ヲ許可ス但現役十二年ニ滿ル者ハ豫備役ニ服セシメス ○第九條 准卒ニシテ兵役ヲ終ル者ハ尙一箇年以上ノ再役ヲ出願スルコトヲ得 ○第十條 現役中技藝ニ熟達シ行狀方正且才氣アル者ハ之ヲ拔擢シテ下士ニ任ス ○第十一條 現役中ハ食料被服ヲ官給シ且相當ノ日給ヲ與フ ○第十二條 現役中ハ卒ノ家族アル者ニ限リ其扶助金トシテ一箇年拾圓而シテ其半額宛チ每六箇月ニ海軍省ヨリ各地方廳ヲ經テ其家族ニ下付スルモノトス 明治十七年九月六日 ○第十三條 服役年期中ハ現役豫備役ヲ論セス何等ノ事故アルモ免役出願ヲ許サス ○第十四條 現役年期已ニ滿ル者ト雖モ戰時若シハ事變ノ際或ハ航海中ハ其期ヲ延スコトアル可シ此場合ニ於テハ其延期日數ヲ豫備役年期ヨリ除算ス ○第十五條 徵募ノ地方及ヒ其人員等ハ徵募ヲ要スルトキ豫メ海軍卿ヨリ其地方廳ニ達ス可シ但准卒ハ臨時鎮守府或ハ艦船營ヨリ徵募スルモノトス ○第十六條 地方廳ハ其達書ニ記載スル日限迄ニ本籍密留別ナシ志願人ヲ調査シ其人員ヲ鎮守府ニ通牒ス可シ ○第十七條 志願人ハ父兄其他親族或ハ後見人ヲ以テ身元引受人爲ス可シ然レトモ居住ノ地ニ親族或ハ後見人ナキトキハ其地ニ本籍アル身元正確ナル者ヲ以テ之ニ充ルコトヲ得 ○第十八條 身元引受人ハ第一号書式ノ願書ニ志願人ノ履歷書ヲ添ヘ管轄地方廳ニ差出シ

該廳ハ其願書正副共ニ巡回募兵使ニ出ス可シ但准卒ハ身元引受人ヨリ直ニ鎮守府或ハ艦船營ニ出ス可シ ○第十九條 左ニ掲クル者ハ兵役ヲ出願スルコトヲ許サス ○刑事被告人ト爲リ裁判未決ノ者 ○公權停止中ノ者 ○重罪ノ刑ニ處セラレタル者 ○第二十條 募兵官員及ヒ其職務ハ左ノ如シ

募兵使 海軍佐官或ハ大尉ヲ以テ之ニ充ツ府縣ニ派出シテ兵員徵募ノ事務ヲ掌ル

募兵副使 海軍尉官ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ヲ補助スル事ヲ掌ル但時宜ニ因リ之ヲ欠クコトアリ

募兵醫官 海軍軍醫ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ニ從ヒ志願人ノ身幹體格ヲ檢スル事ヲ掌ル

募兵書記 海軍下士或ハ十等以下ノ軍屬ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ニ從ヒ諸記録ノ事ヲ掌ル

○第二十一條 地方長官ハ屬官ヲシテ管内兵員徵募ノ事務ヲ補助セシム可シ ○第二十二條

郡區長及ヒ戶長ハ其郡區町村內兵員徵募ニ關スル事ヲ掌ル可シ ○第二十三條 募兵使ハ府縣

屬官及ヒ郡區長ト商議シ檢査ノ場所及ヒ日割人員等ヲ定メ戶長ヲ經テ志願人ニ出頭ヲ命ス可シ

○第二十四條 志願人ノ檢査ハ府縣屬官或ハ郡區長ノ立會ヲ要ス但郡區長事故アルトキハ其書記ヲシテ代理セシムルコトヲ得 ○第二十五條 檢査合格ノ者ニハ募兵使ヨリ立會ノ府縣屬官或

ハ郡區長ヲシテ第二號書式ノ採用証書ヲ附與セシム ○第二十六條 檢査合格ノ者ニ採用証書

ヲ附與シタルトキハ戶長ヨリ第三號書式ノ本人戶籍明細書ヲ出サシム其用紙ハ募兵使ヨリ下附

ス ○第二十七條 寄留地ニ於テ採用スル者ハ募兵使ヨリ其旨本籍ノ地方廳ニ通知シ該廳ハ本

人所管ノ戶長ヲシテ二十六條ニ掲クル戶籍明細書ヲ出サシメ募兵使或ハ鎮守府ニ送附ス可シ

○第二十八條 採用ノ兵員ハ募兵使携帶ノ誓約書ニ各自記名捺印ス可シ ○第二十九條 合格

ノ者所要ノ人員ニ超過スルトキハ抽籤法ヲ以テ當籤者ヲ採用ス ○第三十條 抽籤ハ各自ニ之

ヲ行ハシムルモノトス但便宜ニ因リ一名乃至三名ヲ抽籤總代ト爲スコトヲ得 ○第三十一條

檢査呼出ニ際シ病氣或ハ父母ノ重病等ノ爲メ一時出頭シ難キ者或ハ之カ爲メ願書却下ヲ請フ者

ハ其事實ヲ詳記シ戶長ノ證印ヲ受ケ郡區長ヲ經テ募兵使ニ申出共處分ヲ受ク可シ ○第三十二

條 徵募ノ兵員各地發程ノ期限ハ募兵使ヨリ達ス可シ府縣屬官或ハ郡區長ハ府縣或ハ郡區毎ニ

其兵員ヲ便宜ノ場所ニ集合セシメ其內一名若クハ二名ヲ取締ト爲シ同時ニ發程セシム可シ ○

第三十三條 疾病其他己ムヲ得サル事故ニテ發程シ難キ者ハ其事實ヲ詳記シ 疾病者ハ醫師ノ戶

長ノ證印ヲ受ケ郡區長ヲ經テ募兵使或ハ鎮守府ニ届出可シ ○第三十四條 徵募ノ兵員各自居

住ノ地ヨリ入營迄ノ旅費ハ官給トス檢査ノ場所ニ往復並ニ滞在等ノ費用ハ總テ自辨タル可シ

○第三十五條 現役中公務ニ因リ傷痍疾病ヲ受ケ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ海軍恩給令ニ照準シテ相

當ノ恩給ヲ與フ ○第三十六條 現役中傷痍疾病ニ罹ル者ハ海軍病院ニ入レ治療セシメ若シ兵

役ニ堪ヘ難キ者ハ免役ノ上旅費ヲ給シ歸郷セシム但服役實期十一年以上ノ者ハ第三十五條ニ同

シ ○第三十七條 現役中父母ノ重病或ハ一家ノ安危ニ係ル等非常ノ事故アリ一時己ヲ得スシ

テ父母又ハ親族等ヨリ其事實ヲ詳記シ 疾病ハ醫師ノ 郡區長ノ與書証印ヲ受ケ本人ノ所轄廳ニ願

出ルトキハ詮議ノ上往復ヲ除キ二週日以内ノ歸省ヲ許ス其旅費ハ自辨タル可シ但二等若水兵若

火夫ハ本文ノ限ニ在ラス ○第三十八條

明治十七年九月六日 第二十一号布達刪除

書式零ス

○陸軍省第二號告示

明治十七年十一月四日

明治十四年一月ヨリ同十六年十二月迄ニ滿二十歳トナリ

タル者ニシテ舊徵兵令第二十八條乃至第三十一條及ヒ第三十四條ニ據リ免役又ハ徵集猶豫ニ屬スル者常備年期ノ第七年検査時限内ニ在テ名稱ヲ止メタル時ハ更ニ徵集スヘキ義ニ付本年九月十六日以後其名稱ヲ罷メタル時ハ新徵兵令第三十六條ニ據リ戶主ヨリ本籍ノ戶長ニ届出ヘシ此旨告示候事 但本文ノ届出ヲ爲サ、ルトキハ新徵兵令第四十一條及ヒ第四十三條ニ據リ處分スヘキモノトス

○陸軍省甲第四十八號達

明治十七年十一月十九日

本年第十九号布達ヲ以テ教導職被廢候ニ付テハ徵兵令第十八條第一項及ヒ第二十條第二項ハ消滅ニ屬シ候所舊教導職ヲリシ者ハ其在職ノ時ノ等級ニ準シ徵集又ハ召集ヲ猶豫シ又明治十四年一月ヨリ同十六年十二月迄ニ滿二十歳トナリタル者ニテ舊徵兵令ニ據リ既ニ教導職試補以上ニテ國民軍ノ外免役ニ處分セシ者ハ其儘閑クヘキ義ト可心得此旨相達候事

○陸軍省甲第四十六號達

明治十七年十一月十三日

士官學校若クハ教導團生徒検査合格ニシテ未タ入校入團ヲ命セサル以前ニ在テ徵兵検査又ハ入營ニ際スルトキハ尋常徵集者同様可取扱此旨相達候事 但入營以前ニ入校入團ヲ命スル者ハ其校團ヨリ府縣廳ニ照會シ入營迄ニ入校入團ヲ命セサルモノハ其府縣廳ヨリ其旨ヲ近衛局鎮臺士官學校若クハ教導團へ通牒シ追テ入校入團ノ義其校團ヨリ近衛局鎮臺へ照會スヘキ義ト心得ヘシ

○陸軍省甲第四十七号達 明治十七年十一月十四日 徵兵令ニヨリ來ル十八年海軍水兵徵集致候ニ付テハ徵員配當及該兵撰定方ノ儀左ノ三項ニ據リ取扱其他ハ陸軍徵兵事務取扱手續並ニ陸軍醫官徵兵検査規則等ヲ適用スヘシ此旨相達候事 ○第一項 水兵徵集人員ノ配當ハ一軍管徵兵區ニ於テ人別表記載ノ職業ニ據リ第二項ニ當ル者ト見認ムル總人員ヲ率トシ之ヲ府縣ニ配當スヘシ ○第二項 水兵ハ徵兵事務條例第五十六條ニ掲クル項目ノ順序ニ從ヒ左ノ諸項ニ相當スル者ヨリ撰フヘシ 第一 第五十六條第一項中航海學卒業ノ者 第二 同條第二項中船長運轉手水夫長水夫又ハ小使等ノ職ニ從事セシ者 第三 同條第五項第六項相當ノ者 ○第三項 水兵身幹五尺以上ニシテ體格甲種ノ者ヨリ採用スヘシ

○陸軍省甲第四十一号達 明治十七年十月十日 陸軍醫官徵兵検査規則 ○第一條 徵兵検査ノ要ハ身軀強健精神完全ニシテ定年間ノ役ニ堪ユヘキ者ト疾病畸形アリテ之ニ堪ユ可ラサル者トヲ區別スルニアリ而シテ其服役ニ堪ユ可キ者ヲ以テ合格トシ之ニ堪ユ可カラサル者ヲ以テ不合格トス ○第二條 曾テ重病ニ罹リシモ再發ノ患ナキ者又現ニ輕患徵恙ヲ帶ルモ直ニ兵ニ編入シテ害ナキ者或ハ數日月ノ治療ヲ加レハ快復ニ至ル目途アル者皆之ヲ不合格トスヘシ ○第三條 疾病傷痕ニ論ナク常備年期内轉歸豫定シ難キ者或ハ醫治ス可カラサル疾病及畸形ノ者皆之ヲ不合格トスヘシ ○第四條 身軀ノ發育未タ十全ノ度ニ至ラサル者或ハ急性及慢性病其他傷或ハ病後衰憊復セサル者等ニシテ常備年期内快復ノ目途アル者ハ皆之ヲ翌年ノ検査ニ廻ス可者トス ○第五條 發作間歇ノ病或ハ晝間確

定シ難キ病其他自覺症ノ如キ確實ノ徵候ヲ見サルモノハ之ヲ採ルモ妨ケナシ ○第六條 疾病ノ輕重虛實ヲ診定センカ爲メニ綿密ノ検査ヲ遂ケ學術上諸種ノ法方ヲ施スヲ得ヘシ ○第七條 前諸條ニ基キ身軀ヲ検査シ其長否ヲ判決スヘキモ殊ニ視官聽官ノ機能及胸廓ノ構造ハ左ノ格ニ適スル者ヲ撰フヘシ 視官ノ機能ハ二十尺ノ距離ニ於テ「スネルレン」氏表ノ二十号ヲ明視スル者 聽官ノ機能ハ六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽取シ得ル者 胸廓ノ構造ハ靜息時ニ於テ其周圍身長ノ半ヨリ大ナル者但呼吸縮張ノ差ハ一寸五分以上ナルヘシ ○第八條 軀格検査ハ先ツ其全軀ヲ視察シ後テ各部ノ構造官能等逐次ニ検査シテ遺漏ナキヲ要ス ○第九條 終身兵役ニ堪ユ可ラサル疾病畸形大凡左ノ如シ

- 一 全身發育ノ不全
- 二 全身ノ畸形
- 三 筋肉ノ薄弱甚キモノ
- 四 筋肉ノ羸瘦甚キモノ
- 五 著シク脂肪夥ノモノ
- 六 著大ナル慢性腺腫起。慢性腺潰瘍。腺病
- 七 骨若シハ軟部ノ惡性腫瘍及潰瘍
- 八 骨ノ慢性炎及骨潰瘍。腐骨疽
- 九 骨ト癒着スル癒痕若シハ甚ク廣大ナル
- 二十二 頭蓋骨ノ著大ナル陥沒及骨質欠損等
- 二十三 眼瞼ノ内外翻轉眼瞼結膜ノ動痕性變性等
- 二十四 淚癩
- 二十五 角膜虹彩等ノ疾病ニシテ著ク視力ヲ妨クルモノ
- 二十六 白內障黑內障
- 二十七 視力減退シテ尋常視力ノ二分ノ一以下ニ至ルモノ

- 二十八 斜視眼
- 二十九 近視眼
- 三十 遠視眼
- 三十一 一眼ノ失明
- 三十二 夜盲
- 三十三 一耳ノ慢性重聽若シハ聾強度ノ吃語一耳殼ノ缺亡
- 三十四 鼻ノ缺亡若シハ鼻ノ大醜形
- 三十五 鼻。前頭竇。上顎洞ノ慢性潰瘍等
- 三十六 口ノ惡性潰瘍。唇頰ノ廣濶ナル癒着口ノ一部ノ閉鎖
- 三十七 齒牙若シハ唇ニ疾病缺損アリテ咀嚼或ハ言語ヲ妨クルモノ
- 三十八 唾癩
- 三十九 口蓋ノ破潰口蓋ノ一部若シハ全部欠損若シハ穿孔癒着等
- 癩痕ニシテ軀部ノ機能ヲ妨ケ若シハ陸軍々裝ノ着用ヲ妨ケ若シハ著ク醜形ヲナスモノ
- 十 進行性筋萎縮。爾余ノ筋變性
- 十一 血管ノ慢性疾病例之ハ動脈瘤
- 十二 血液病
- 十三 尿漏
- 十四 慢性痛風
- 十五 慢性關節僂麻質斯ニテ著ク運動ニ妨ケアルモノ
- 十六 腦及ヒ脊椎ノ慢性疾病
- 十七 神經慢性疾病例之ハ舞踏病
- 十八 白癩癲狂其他ノ精神病ニシテ確證アルモノ
- 十九 癩癩
- 二十 頭蓋ノ畸形
- 廿一 頭部ノ醜形甚キモノ例之ハ廣濶ナル禿頭

四十 舌若クハ腺ノ腫瘍異常ノ肥大著キ 六十三 陰囊水腫ノ過大ナルモノ
 實質欠損ニシテ發語及嚥下ニ困難 六十四 陰弛緩ノ甚キモノ
 ナルモノ 六十五 睪丸副睪丸ノ慢性炎若クハ其肥大
 四十一 嘔。聲啞 甚キモノ
 四十二 甲状腺腫ノ過大ナルモノニシテ呼 六十六 睪丸尙腹輪中ニ在テ疼痛ヲナスモノ
 吸困難ヲ起スモノ 六十七 睪丸及精系ノ惡性腫瘍兩睪丸ノ缺亡等
 四十三 鎖骨ノ畸形 六十八 精系ノ靜脈擴張ヨシテ容積廣大ナル
 四十四 喉頭及氣管ノ畸形及著大ナル其慢 六十九 四肢ノ著大ナル延長。短縮。彎曲。強直
 性疾患 假關節等
 四十五 氣管ノ狹窄 肢ノ肥大。麻痺萎小
 四十六 著名ナル斜頸ニシテ運動障害ヲ兼 七十 關節ノ畸形。強直
 スルモノ 七十一 諸關節ノ慢性疾病及著大ナル疾患並
 四十七 脊梁ノ彎曲及ヒ運動ニ障害ヲナス 七十二 關節弛緩シテ尋常ノ運動ニ由テ脫
 其疾病及ヒ畸形 臼ヲ將來スル度ニ至リシモノ
 四十八 胸廓ノ畸形 四十九 拇指及示指ノ爪全失
 胸廓ノ構造甚ク薄弱ナルモノ肺及 七十三 拇指示指ヲ除クノ他指爪全缺シテ其
 ヒ胸膜ノ疾病及其慢性病ニシテ著 七十四

ク呼吸ニ障害ヲナスモノ
 五十 頻回發作スル喘息 用ニ妨ケアルモノ
 五十一 頻回反復スル咯血 七十五 指若クハ趾ノ交互ノ癒着
 七十二 心臟及心嚢ノ慢性疾病 七十六 左右ノ論ナク一指ノ欠損。彎曲。強直等
 五十三 腋臭甚シキモノ 七十七 脚ノ過大ナル靜脈結節ニシテ運動ニ妨
 ケアルモノ下腿ノ潰瘍癩痕等ニシテ
 五十四 骨盤ノ畸形 運動ニ妨ケアルモノ
 五十五 下腹瘻兒尼回 七十八 膝關節ノ内外前後屈曲
 五十六 服内臟器ノ疾病ニシテ全身健康ニ 七十九 足ノ變形(内翻足若クハ馬蹄狀足扁足等
 著明ノ害ヲ及スモノ 八十 足驢汗ノ惡臭甚キモノ
 五十七 慢性直腸弛脫著大ノ痔結節ニシテ有八十一 一趾ノ缺亡若クハ切斷
 期性失血若クハ膿潰ヲ兼スルモノ 八十二 大趾ヲ除ク外ノ數趾ノ缺亡
 五十八 鼠蹊腺ノ過大ナルモノ 八十三 一趾若クハ數趾ノ著大ナル彎曲ニシテ
 痔瘻 靴ヲ穿ツテ能ハサルモノ
 五十九 陰莖全缺 八十四 剩趾ニシテ同上ノ妨碍アルモノ
 六十一 著大ナル尿道畸形例之ハ上裂尿口
 六十二 泌尿器ノ慢性疾病。尿瘻結石病

以上掲載ノ外百般ノ疾病畸形ハ前各條ニ照準シテ詳細ノ検査ヲ遂ケ其服役ニ堪ユルヤ否ヲ判決スヘシ

○陸軍省甲第四十二號達 〔明治十七年十月廿二日〕 徴兵事務條例第十一條ノ地方醫員ノ義ハ明治九年內務省乙第五号達ニ據リ醫術開業免狀授與ノ者ヲ以テ之レニ充ツヘシ此旨相達候事

但明治九年內務省乙第五号達ノ免狀授與ノ者不足スル府縣ニ在テハ當分本年同省乙第四号達ニ據リ免狀授與ノ者ノ中適任ノ者ヲ撰ヒ交用スルモ不苦候事

○第八十四號達 〔明治十七年十月十四日〕 明治十六年〔十一月〕 第四十六號布告徴兵令第二十一條ニ依リ徵集猶豫伺出ノ節ハ本人履歴並ニ其技術ニ係ル明細書ヲ添フヘシ此旨相達候事

○陸軍省甲第四十九號達 〔明治十七年十二月四日〕 明治十四年一月ヨリ同十六年十二月迄ニ滿二十歳トナリタルモノニテ適齡ノ當時舊徴兵令第二十八條第三項第四項若クハ第二十九條第一項ニ據リ嗣子承祖ノ孫及ヒ相續人ノ名稱ヲ有シ免役ニ屬シ新徴兵令發布後常備年期間ニ在テ戸主隱居シ其跡ヲ繼キ戸主トナリ前戸主年齡六十歳未滿ナルトキハ徴兵事務條例第五百三條第五百四條前段ニ據リ徵集スヘキ儀ニ候處本年各府縣徴兵抽籤ノ當日迄ニ免役名稱ヲ罷メ更ニ免役名稱ヲ得タルモノハ其當時届出ヲ爲スモノト否トテ問ハス其儘免役ニ屬シ抽籤翌日以後ニ係ルモノヨ

リ新徴兵令第二十二條第七項ニ據リ更ニ徵集スヘキ儀ト可心得此旨相達候事

○徴兵事務條例目錄

第一章 徴兵事務官及ヒ其職掌 第二章 徴兵検査所及ヒ徴兵署 第三章 各自届出

第四章 下調 第五章 徴員配當 第六章 検査準備

第七章 検査 第八章 抽籤準備 第九章 抽籤

第十章 簿冊表面調製 第十一章 現役兵編入順序

第十二章 新兵入營前ノ扱 第十三章 歸休歸省

第十四章 補充員及ヒ豫備徴員 第十五章 一年志願兵 第十六章 臨時徴兵事務

第十七章 雜則 第十八章 附則

徴兵事務條例 第一章 徴兵事務官及ヒ其職掌 第一條 徴兵事務官ハ左ノ如シ

一 鎮臺後備軍司令官 二 營所後備軍司令官 三 府縣駐在官

四 郡區駐在官 五 醫官 六 府知事縣令

七 府縣兵事課長 八 郡區長

第二條 鎮臺後備軍司令官ハ其軍管內徴兵ノ事ヲ掌ル ○第三條 營所後備軍司令官ハ其師管內徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新徴集ノ際府縣徴兵署ヲ巡行シ兵種ノ撰定簿冊ノ審査兵役免除ノ處分ヲ爲シ徵集猶豫ニ係ル者ハ府知事縣令ト商議シ之ヲ裁決ス但鎮臺營所在地ニハ營所後備軍司令官ヲ置カサルヲ以テ鎮臺後備軍司令官其職掌ヲ兼攝スルモノトス ○第四條 府縣駐在官ハ其府縣內徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際醫官及ヒ府縣兵事課長ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ壯丁検査ノ事ヲ掌ル ○第五條 郡區駐在官ハ其郡區內徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際名簿調査ノ事ヲ掌ル ○第六條 醫官ハ毎年新兵徴集ノ際一等軍醫以下試補以上ヲ以テ之ニ充ツ

○第三編 公益ニ關スル規則 (徴兵)

一等軍醫ハ後備軍司令官ニ從ヒ府縣徵兵署ニ巡行シ壯丁ノ身材骨格兵役ニ適スルヤ否ヲ検査スル事ヲ掌ル 二等軍醫以下軍醫試補以上ハ府縣駐在官ト共ニ徵兵検査所ヲ巡行ス其職掌一等軍醫ニ同シ ○第七條 每年新徵集ノ際前諸條官員ノ外海軍將校ヲシテ後備軍司令官ノ事務ニ參セシムルコトアル可シ ○第八條 府知事縣ハ管内徵兵ノ事ヲ掌リ又每年新兵徵集ノ際府縣徵兵署ニ於テ後備軍司令官ト商議シ徵集猶豫ノ裁決ヲ掌ル ○第九條 府縣兵事課長ハ其府縣内徵兵ノ事務ヲ整理シ又每年新兵徵集ノ際府縣駐在官ト共ニ徵兵検査所ヲ巡行シ検査ノ事ヲ補助ス ○第十條 郡區長ハ郡區内徵兵ノ事ヲ掌リ又每年新兵徵集ノ際名簿調製ノ事ヲ掌ル ○第十一條 每年新兵徵集ノ際師管徵兵區ノ諸記録ハ後備軍司令部書記ヲシテ之ヲ掌ラシム 検査及ヒ抽籤ノ筆記ハ筆生ヲシテ之ヲ掌ラシメ身體検査ノ記録ハ地方醫員ヲシテ掌ラシメ又身體検査ノ補助ヲ爲サシムルコトアル可シ醫員筆生ハ府知事縣令ノ撰ヲ以テ命スルモノトス ○第十二條 徵集猶豫ノ事ニ係リ後備軍司令官ト府知事縣令ト商議整ハサルトキハ各其事由ヲ具シ陸軍卿ニ伺出可シ但後備軍司令官ハ其所管長官ヲ經由スヘシ ○第十三條 壯丁ノ検査ヲ施行スル爲メ府縣管地ノ廣狹及ヒ壯丁ノ多寡ニ應シ集合便宜ノ地ヲ撰ニ若干ノ徵兵検査所ヲ設ク可シ ○第十四條 各府縣徵兵區ニ於テ其事務ヲ整理スル爲メ每年新兵徵集ノ期ニ先テ府縣廳所在ノ地又ハ管内便宜ノ地ニ一ノ徵兵署ヲ設ク可シ但一府縣ノ管地兩師管ニ分屬スルモノハ每師管ニ一ノ徵兵署ヲ設ク可シ ○第十五條 徵兵検査所及ヒ徵兵署ハ每年新兵徵集中開クモノニシテ該事務竣レハ之ヲ閉ツ

可シ ○第三章 各自届出 ○第十六條 徵兵令第三十四條ノ届書ハ第二書式第三十六條ノ届書ハ第三書式ニ據リ之ヲ認メ戶長ニ差出ス可シ但第三十五條ノ届書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ 一 徵兵令第七條ニ當ル者ハ刑名宣告書寫 二 徵兵令第十七條第一項第二項ニ當ル者ハ事由ヲ記シタル詳細書第三項第五項ニ當ル者ハ第四書式ノ事由書及ヒ戶籍寫第四項并ニ同令第二十二條ノ諸項ニ當ル痼疾不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル爲メ徵集猶豫ニ關スル者ハ事由ヲ記シタル詳細書及ヒ第五書式ノ醫師診斷書并ニ同郡區内現役兵ノ戶主タル者二人以上ノ保證書及ヒ戶籍寫重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑名宣告書寫 三 徵兵令第十八條第一項ニ當ル者ハ辭令書寫第二項ニ當ル者ハ卒業證書寫及ヒ辭令書寫第三項第四項ニ當ル者ハ學校長若クハ所屬長ノ證明書第七項ニ當ル者ハ地方校名及ヒ修業ノ學科并ニ入校ノ年月日等記載ノ書及ヒ公使又ハ領事ノ證明書第八項ニ當ル者ハ檢察官ノ証明書第九項ニ當ル者ハ刑名宣告書寫 四 徵兵令第十九條ニ當ル者ハ學科并ニ等級ヲ記シタル學校長又ハ所屬長ノ證明書 五 徵兵令第二十一條ニ當ル者ハ決裁書ノ寫 ○第十七條 各自届出ヲ爲スニ當リ戶主旅行又ハ外國寄留等ニテ届出ヲ爲ス能ハサルハ本人又ハ親族ノ者ヨリ届出可シ ○第十八條 各自届出ヲ終ルノ後抽籤ノ前他ノ府縣ニ轉籍スル者ハ三日以内ニ舊住地新住地雙方ノ戶長ニ届出可シ ○第四章 下調 ○第十九條 每年九月一日以前戶長ハ各自届出ヲ爲ス可キ者ヲシテ徵兵令第三十四條第三十五條第三十六條ノ届出ヲ怠ラシメサル様注意ス可シ ○第二十條 戶長届書ヲ領收セハ其町村ノ戶籍ニ照シ届出ノ者ナキヤ否ヲ調査シ國民兵入籍者ト徵兵相當者トチ分チ

徵兵相當者ノ各自姓名ノ頭ニ記載シタル箇條并ニ事由書或ハ證書等相違ナキヤ否ヲ審査シ其屆書ニ署名押印シ更ニ徵兵令第十七條第十八條第十九條第廿一條ニ當ル者ト檢査ヲ受ク可キ者トナ區別シ國民兵入籍者ノ屆書ト共ニ書類目錄ヲ添へ毎年九月二十五日迄ニ郡區長ニ差出ス可シ但徵兵令第三十五條但書ニ當ル者ハ戶長之ヲ調査シ其族職業氏名住所誕生年月日及ヒ隊號ヲ記シ本條ノ書類ト共ニ郡區長ニ差出ス可シ ○第二十一條 戶長ハ檢査ヲ受ク可キ者ノ戶籍ニ基キ人別表(第六書式)ニ葉ヲ製シ各自屆書ト共ニ郡區長ニ差出ス可シ但人別表用紙ハ各自屆出ノ季節ニ先テ府縣廳ヨリ之ヲ下付ス可シ ○第二十二條 各自屆出ノ後身上ノ異動ヲ屆出ル時ハ戶長之ヲ調査シ三日以内ニ郡區長ニ差出ス可シ ○第二十三條 郡區長ハ戶長ヨリ差出ス所ノ各自屆書人別表其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ點檢シ然ル後壯丁名簿(第七書式)及ヒ壯丁異動名簿(第八書式)ヲ製シ卷末ニ署名押印シ各自屆書人別表其他諸書類ト共ニ十月十五日迄ニ之ヲ郡區駐在官ニ送致ス可シ ○第二十四條 郡區駐在官ハ郡區長ヨリ送致スル所ノ名簿并ニ諸書類ヲ點檢シ其郡區内ノ壯丁中遺漏或ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ又人別表備考區畫ニ記載スル件々ノ適否ヲ訂正加書シ然ル後名簿ノ卷末ニ署名押印シ諸書類ト共ニ郡區長ニ返付ス可シ ○第二十五條 郡區長ハ郡區駐在官ヨリ返付スル所ノ名簿ニ各自屆書人別表其他諸書類ヲ添へ十月二十五日迄ニ之ヲ府縣廳ニ差出ス可シ ○第二十六條 壯丁名簿調製ノ際郡區長ハ人別表備考區畫ニ記載スル件々ノ適否ヲ訂正加書シ ○第二十七條 寄留地ニ於テ徵集ニ應ジ又ハ檢査ヲ受ケ下欲スル者ハ該部内ノ者ト混セサル爲メ他府縣ヨリ寄留ノ部ト題シ本籍地ニ於テ

ハ他府縣ニ寄留ノ部ト題シ之ヲ別簿ニ作ル可シ ○第二十八條 郡區長ハ壯丁名簿壯丁異動名簿整頓前第二十二條ニ據リ身上ノ異動屆書ヲ戶長ヨリ差出ストキハ之ヲ調査シ名簿ヲ訂正ス可シ若シ名簿整頓後ニ係ルトキハ府縣廳又ハ徵兵署或ハ檢査所ニ送ル可シ但徵兵令第三十四條ノ各自屆出後身上異動ノ屆書ハ三日以内ニ府縣廳ニ差出ス可シ ○第二十九條 他府縣ニ籍ヲ轉スルノ異動屆書ハ郡區長ヨリ府縣廳ニ差出シ該廳ヨリ新住地府縣廳ニ通牒ス可シ ○第三十條 郡區長ハ壯丁名簿壯丁異動名簿等ヲ府縣廳ニ差出シタル後國民兵入籍者ノ屆書ニ據リ國民兵名簿(第九書式)ヲ調製シ卷末ニ署名捺印シ各自屆書ト共ニ十月三十日迄ニ之ヲ郡區駐在官ニ送致ス可シ ○第三十一條 郡區駐在官ハ郡區長ヨリ送致スル所ノ名簿ヲ點檢シ其郡區内ノ國民兵入籍者ノ遺漏或ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ然ル後卷末ニ署名押印シ郡區長ニ返付シ郡區長ハ各自屆書ト共ニ十一月十日迄ニ之ヲ府縣廳ニ差出ス可シ ○第五章 徵員配當 ○第三十二條 每年徵集ス可キ陸軍新兵ノ員數ハ陸軍卿之ヲ告示シ海軍新兵ノ員數ハ海軍卿之ヲ告示ス可シ ○第三十三條 鎮臺司令官ハ其告示ニ基キ後備軍司令官ヨリ差出ス所ノ人員ヲ率トシ軍管徵集人員配當表(第十書式)ヲ作り之ヲ陸軍省ニ開申又管内府縣廳及ヒ府縣駐在官ニ通牒ス可シ府縣廳ニ於テハ之ヲ管内ニ告示ス可シ ○第六章 檢査準備 ○第三十四條 府縣廳ニ於テハ毎年十一月一日ヨリ徵兵署ヲ開設シ府縣駐在官醫官府縣兵事課長地方醫及ヒ筆生出頭シ徵兵檢査ノ準備ヲ爲ス可シ ○第三十五條 府縣廳ニ於テハ各自屆書人別表其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ審査シ戶籍帳ト照較シ遺漏又ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ然ル後徵兵署ニ送致ス可シ ○第三十

第三編 公益ニ關スル規則 ○徵兵

六條 府縣駐在官ハ府縣廳ヨリ徵兵署ニ送ル所ノ諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ調査シ又壯丁名簿壯丁異動名簿中徵集ニ應スヘキ者ノ總人員ヲ營所後備軍司令官ニ差出ス可シ但營所後備軍司令官ハ之ヲ一師管ニ取纏メ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ呈ス可シ ○第三十七條 府縣駐在官ハ前條書類調査ノ後府縣兵事課長ト商議シ管地ノ廣狹及ヒ壯丁ノ多寡ニ應シ檢査所並ニ巡回日割ヲ定メ其表面(第十一書式)ヲ製シ後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ府縣兵事課長ハ府知事縣令ニ之ヲ開中ス可シ ○第三十八條 檢査所並ニ巡回ノ日割已ニ定マル時ハ府縣廳ヨリ郡區長及ヒ戶長ニ達シ戶長ハ之ヲ其町村内檢査ヲ受ク可キ者ニ達シ置キ徵集ノ日時ニ至レハ壯丁ヲ引纏メ指定ノ場所ニ出頭ス可シ ○第三十九條 府縣兵事課長ハ徵兵署ニ於テ筆生ヲシテ人別表ニ基キ檢査表(第十二書式)ヲ製セシメ檢査ノ席ニ備ヘ置ク可シ但檢査表用紙ハ檢査ノ季節ニ先チ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ ○第四十條 壯丁中疾病處刑又ハ逃亡失踪等ニテ檢査所ニ出頭セサル者アルトキハ戶主或ハ親族ノ者ヨリ逃亡失踪等ノ者ハ其事由書ニ戶長ノ與書證印憲兵部若クハ警察署ノ證認ヲ受ケ疾病ノ者ハ醫師ノ診斷書(第五書式)處刑中ノ者ハ刑名宣告書寫ヲ以テ郡區長ヲ經テ徵兵檢査所ニ届出可シ但起居自在ナラサル疾患ニシテ車駕等ヲ用フルモ出頭スル能ハサル者ハ其家ニ就キ之ヲ檢査シ若クハ他ノ檢査所ニ出頭セシムル等府縣駐在官府縣兵事課長商議シテ之ヲ處分ス可シ ○第四十一條 徵兵檢査所ニ於テ領收スル所ノ諸願届書ハ府縣駐在官府縣兵事課長ト商議シ之ヲ處分シ壯丁名簿壯丁異動名簿ニ訂正ヲ加ヘ若シ處分スルコト能ハサルモノ或ハ成規外ニ係ルモノハ竟見書ヲ添ヘ之ヲ巡行ノ後備軍司令官ニ

差出ス可シ

第七章 檢査 ○第四十二條 檢査ハ概ネ十一月十日ヨリ始メ第三十四條ニ掲クル所ノ諸員徵兵檢査所ヲ巡行シ其事務ヲ調理ス ○第四十三條 戶長ヨリ檢査ノ達ヲ受ケタル者ハ戶長ニ從ヒ指定ノ日時ニ其場所ニ出頭シ府縣駐在官府縣兵事課長ノ面前ニ於テ身體ノ檢査ヲ受ク可シ ○第四十四條 身體檢査ヲ爲ストキハ郡區駐在官郡區長列席シ郡區駐在官ハ壯丁名簿壯丁異動名簿中徵集ノ部ニ記載シタル順序ニ壯丁ヲ呼出シ醫官ハ徵兵檢査規則ニ據リ體格ヲ檢査シ合格ノ者ハ更ニ其體格ノ等位ヲ區別ス不合格ノ者及ヒ身幹四尺九寸未滿ノ者ハ地方醫員ヲシテ之ヲ檢査表ニ記註セシメ醫官之ニ捺印シテ府縣駐在官ニ差出ス可シ但四尺九寸未滿ノ者及ヒ不合格ノ骨相ハ檢査表ニ記註スルヲ要セス唯其尺度並ニ骨相ノ部ニ主任ノ醫員捺印ス可シ ○第四十五條 壯丁ノ身體檢査終ル毎ニ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ人別表ニ據リ本人ニ姓名住所族籍職業父兄ノ姓名等相違ナキヤ否ヲ尋問ス可シ ○第四十六條 人別表調査ノ後府縣駐在官ハ檢査表ニ據リ筆生ヲシテ人別表中身幹尺度ノ區畫ニ各自ノ寸尺ヲ記註セシメ又疾病缺損又ハ身幹四尺九寸未滿ノ者ノ備考區畫ニハ何ノ事故ニ付徵集猶豫疾病缺損ニ付除役等其要領ヲ記註セシム可シ ○第四十七條 壯丁中癲癩狂病白痴夜盲聾啞遺尿等ノ如キ疾病アリ其狀ヲ申告セシトスル者ハ平素其病狀ヲ熟知スル近隣ノ戶主二人以上ノ證書ヲ添テ檢査所ニ申出可シ醫官ニ於テ相違ナシト認定スル時ハ之ニ與書証印ス可シ若シ認定スルト能ハサルトキハ府縣駐在官ハ之ヲ徵集ノ部ニ加フ可シ ○第四十八條 壯丁ノ身體檢査終ル毎ニ府縣駐在官ハ府縣兵事課

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵兵

長ト共ニ合格又ハ不合格或ハ徵集猶豫ノ要領ヲ壯丁名簿壯丁異動名簿中ノ各自姓名ノ頭ニ記註ス可シ ○第四十九條 身體檢査終リタル後郡區長ハ合格者ヲシテ抽籤總代人ヲ撰ハシメ其姓名住所ヲ府縣兵事課長ニ通牒ス可シ ○第五十條 府縣駐在官ハ人別表備考區畫ヲ案シ訂正ヲ加フ可キモノハ之ヲ加ヘ醫官ニ謀リ身體最モ健全ニシテ近衛兵ニ適當スト思考スルモノハ人別表備考區畫ニ近衛何兵適當ノ文字ヲ記註ス可シ ○第五十一條 府縣駐在官ハ壯丁ノ職業ニ注意シ海軍兵ニ適當スト思考スルモノハ人別表備考區畫ニ海軍何兵適當ノ文字ヲ記註ス可シ ○第五十二條 府縣駐在官ハ合格者ノ人別表及ヒ檢査表ニ照シ各自ノ身材藝能職業ニ應シ豫メ兵種ヲ區別ス可シ ○第五十三條 近衛諸兵ハ總テ品行方正ニシテ且體格最健全ナル者ヨリ之ヲ撰フ可シ其身幹砲兵ハ五尺五寸以上歩兵騎兵工兵ハ五尺三寸以上ノ者タル可シ ○第五十四條 鎮臺ニ屬スル諸兵ノ身幹砲兵ハ五尺五寸以上歩兵騎兵工兵輜重兵ハ五尺三寸以上ノ者タル可シ若シ不足スルトキハ砲兵ハ五尺四寸以上歩兵騎兵工兵輜重兵ハ五尺二寸以上ノ者ヲ以テ之ニ充テ仍ホ不足スルトキハ臨時其定尺ヲ減スルコトアル可シ ○第五十五條 陸軍雜卒又ハ職工トシテ徵集スル者ハ身幹五尺以上ニシテ雜卒又ハ職工ノ勤務ニ適當ノ者ヨリ之ヲ撰フ可シト雖モ若シ所要ノ人員不足スルトキハ其體格五種兵ニ亞ク者又ハ身幹四尺九寸以上ニシテ各其勤務ニ堪フ可キ者ヨリ之ヲ撰フ可シ ○第五十六條 海軍兵ハ左ニ掲クル項目ノ順序ニ從ヒ之ヲ撰フ可シ其身幹水兵火夫ハ五尺以上ヲ定尺トス ○第一項 航海學又ハ機關學卒業ノ者 ○第二項 西洋形船舶ニ乗組ノ者 ○第三項 漁車或ハ諸製造所ニ於テ機關手又ハ火夫ノ業ニ從事スル者 ○第四項 現ニ前諸項ノ職業ニ從事セスト雖モ一箇年以上嘗テ之ニ從事セシ者 ○第五項 日本形五百石以上ノ船舶ニ乗組ノ者 ○第六項 日本形五百石未滿ノ船舶ニ乗組ノ者 ○第五十七條 海軍職工トシテ徵集スル者ハ身幹四尺九寸以上ニシテ其勤務ニ適當ノ者ヨリ之ヲ撰フ可シ ○第五十八條 兵種ノ區別己ニ竣レハ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ壯丁名簿壯丁異動名簿人別表檢査表其他一切ノ書類ヲ取纏メ巡行ノ後備軍司令官ニ差出ス可シ ○第八章 抽籤準備 ○第五十九條 營所後備軍司令官ハ府縣駐在官ノ報告ニ據リ一府縣ノ徵兵檢査事務完了ノ日時ヲ量リ巡回日割表(第十二書式)ヲ作り鎮臺後備軍司令官ヲ經テ之ヲ鎮臺司令官ニ開申シ又其巡行ス可キ府縣廳及府縣駐在官ニ通牒ス可シ ○第六十條 府縣廳ニ於テハ後備軍司令官ノ通牒ニ據リ其日時場所ヲ抽籤總代人ニ達シ出頭セシム可シ ○第六十一條 抽籤執行情ニ先チ府縣兵事課長ハ徵兵署ニ於テ筆生ヲシテ籤丁名簿及ヒ各兵種現役補充ノ徵員ヲ記載セシメ之ヲ抽籤場所ニ揭示可シ ○第六十二條 籤丁名簿ハ籤丁ノ姓名住所ヲ記シ又籤札ハ左式ノ如ク厚紙ヲ凡ソ方三寸ニ切リ之ヲ四ツ折ニシテ中分ヲ拈リ合格者ノ數ニ應シ調製ス可シ

近衛(鎮臺)
 籤札 (海軍)
 何兵第何番

○第六十三條 後備軍司令官ハ府縣巡行期日ニ至レハ徵兵署ヲ巡行シ壯丁名簿壯丁異動名簿其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ審査ノ上檢印シ又徵集猶豫ニ關スル書類ハ府知事縣令ト商議シ成規ニ照シテ之ヲ處分ス可シ ○第六十四條 後備軍司令官ハ抽籤施行ニ先チ徵兵令第四十二

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵兵

條ニ當ル先入兵同令第四十條ニ當ル入營延期ノ者及ヒ同令第十條ニ當ル志願兵ヲ調査シ現役兵編入ノ順序ニ從ヒ現役番號ヲ附ス可シ

第九章 抽籤 ○第六十五條 抽籤ハ後備軍司令官府知事縣令府縣駐在官府縣兵事課長郡區長及ヒ郡區駐在官列席シ徵集人員配當表ニ基キ近衛諸兵鎮臺諸兵及ヒ海軍諸兵ヲ區別シ雜卒職工亦其種類ヲ分テ之ヲ行フヘシ ○第六十六條 抽籤總代人ノ抽キタル籤ヲ確證スル爲メ籤簿掛ハ其籤ヲ總代人ヨリ領収シ籤丁名簿姓名ノ頭ニ貼付シ徵兵署ノ割印ヲ押シ然ル後總代人ニ返付ス可シ ○第六十七條 抽籤施行ノ際後備軍司令官ハ書記ヲシテ人別表ニ番號ヲ記入シ又籤簿第十四書式)ヲ調製セシム可シ 籤簿ハ兵種ヲ分テ當籤番号ノ順序ヲ以テ登記シ卷末ニ籤簿掛署名押印ス可シ但籤簿ハ別ニ一部ヲ作り府縣廳ニ備ヘ置ク可シ ○第六十八條 抽籤施行ノ後徵兵署ニ於テハ人別表ニ據リ番號ヲ割符(第十五書式)ヲ作り籤簿ニ引合セ徵兵署ノ割印ヲ押シ籤札ニ照シ抽籤總代人ニ交付ス可シ但抽籤總代人ハ後領證書(第十六書式)ヲ差出ス可シ 第十章 簿冊表面調製 ○第六十九條 抽籤竣ルノ後徵兵署ニ於テ左ノ名簿ヲ作ル可シ 一 除役名簿

徵兵令第七條及ヒ第十六條ニ當ル者ノ部類ヲ分テ(第十七書式)ニ據リ登記ス

徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二十一條ニ當ル者ノ部類並ニ條目ヲ分テ第十入書式ニ據リ登記ス同令第十八條第五項及ヒ第六項ニ當ル者ハ年度ヲ分テ別冊ニ登記ス

六

三 先入兵不參名簿

徵兵令第四十一條ニ當ル者ニシテ其年検査ヲ受ケサル者ヲ第十九書式ニ據リ登記ス

四 入營延期不參名簿

徵兵令第四十條ニ當ル者ニシテ其年 九 近衛補充員名簿

検査ヲ受ケサル者ヲ第二十書式ニ據 十 鎮臺補充員名簿

リ登記ス 十一 海軍補充員名簿

五 一年志願兵名簿

十二 現役兵検査名簿

六 近衛現役兵名簿

十三 補充員検査名簿

七 鎮臺現役兵名簿

右九名簿ハ番号ノ順序ニ從ヒ兵種及ヒ部類ヲ分テ人別表及ヒ検査表ヲ以テ編製ス

八 海軍現役兵名簿

第七十條 前條ニ掲クル名簿ハ各二部検査名簿ハ一部ヲ作り券末ニ後備軍司令官府知事縣令署名押印シ一部ハ府縣廳ノ原簿トシ一部ハ府縣徵兵表ト共ニ後備軍司令官之ヲ領収ス可シ ○第七十一條 抽籤竣ルノ後徵兵署ニ於テハ府縣徵兵表第二十一書式ヲ作り又師管內徵兵事務全竣レハ後備軍司令部ニ於テ府縣徵兵表ヲ以テ師管徵兵表ヲ編製シ第六十九條ニ掲クル所ノ諸名簿並ニ一師管ノ徵兵景況書及ヒ書類目錄ヲ添ヘ營所後備軍司令官ハ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ差出ス可シ ○第七十二條 鎮臺司令官ハ前條ノ名簿諸書類領収ノ後師管徵兵表ヲ以

テ軍管徵兵表ヲ編製シ徵兵景況書ヲ添ヘ五月十日迄ニ之ヲ陸軍省ニ送致シ近衛兵名簿海軍兵名簿ハ四月一日迄ニ直ニ近衛局或ハ海軍省ニ送致ス可シ ○第七十三條 國民兵名簿ハ壯丁名簿ノ原簿タルヲ以テ之ヲ府縣廳ニ備置キ二十歳以下ノ者ノ年齢二十歳ニ至ル迄ハ身上ノ異動アル毎ニ訂正ヲ加フ可シ 府縣廳ハ國民兵名簿ニ從ヒ毎年十二月一日調ヲ以テ國民兵人員表第二十二書式ヲ製シ翌年一月三十日迄ニ之ヲ陸軍省及ヒ鎮臺ニ差出ス可シ ○第十一章 現役兵編入順序 ○第七十四條 現役兵ニ編入ノ順序左ノ如シ

- 一 徵兵令第四十一條ニ當ル者
- 二 現役當籤ノ者
- 三 第三項ノ者ニ亞キ當籤番號ノ順序ニ從フ
- 四 現役當籤ノ者
- 五 補充當籤ノ者
- 六 第一項ノ者ニ亞キ年齢ノ順序又同年齡ノ者ハ誕生月日ノ順序ニ從フ
- 七 兵區内ニ平均シ當籤番號ノ順序ニ從フ

第七十五條 歩兵ノ補充員不足シ師管徵兵區内ニ於テ現役兵ヲ充實スル能ハサルトキハ營所後備軍司令官ハ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ上申シ鎮臺司令官ハ他ノ師管ヨリ之ヲ充實シ又他兵ノ補充員不足シ軍管内ニ於テ現役兵ヲ充實スル能ハサルトキハ鎮臺司令官ヨリ之ヲ陸

軍省ニ開申ス可シ 第十二條 新兵入營前ノ振 ○第七十六條 現役籤ニ當リズル者ハ入營ノ命ヲ待ツモノナルカ故五日間ニ往復スル能ハサル地ニ出ルヲ許サズ ○第七十七條 新兵概シ毎年四月二十日ヨリ五月二十日迄ニ入營セシム可シ ○第七十八條 新兵入營ノ日時及ヒ場所ハ毎年近衛局鎮臺又ハ鎮守府ヨリ府縣廳ニ通牒シ府縣廳ハ速ニ其旨ヲ入營ス可キ者ニ達セシメ左ノ手續ヲ爲ス可シ 一 鎮臺兵ハ其員數及ヒ入營地ニ應シ最寄テ分テ所要ノ附添人ヲ附シ入營地ノ後備軍司令部ニ出頭セシム可シ 二 近衛兵及ヒ海軍兵ハ一府縣ハ一人若クハ二人ノ附添人ヲ附シ近衛局或ハ鎮守府ニ出頭セシム可シ 第七十九條 新兵入營地迄ノ旅費並ニ附添人ノ旅費ハ定則ニ照準シ大藏省ヨリ支給ス可シ ○第八十條 新兵入營ノ期ニ臨ミ父母ノ重病或ハ死歿等ノ故ヲ以テ入營延期ヲ願フ者ハ戶主又ハ親族ノ者ヨリ事實ヲ詳記シ(其重病ハ醫師ノ診斷書(第五書式)ヲ添ヘ戶長郡區長與書證印シ郡區駐在官ヲ經テ府縣駐在官ニ願出ニ於テハ詮議ノ上十四日以内ノ延期ヲ許ス可シ ○第八十一條 前條ノ延期ヲ許可セシトキハ府縣駐在官ハ其旨ヲ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令部ニ通牒ス可シ ○第八十二條 入營延期ノ許可ヲ得タル者期滿ツレハ即日戶長ニ届出戶長ハ直ニ出發セシメ其旨ヲ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令部ニ届出可シ ○第八十三條 新兵入營ノ期ニ臨ミ其身疾病犯罪等ニテ入營シ難キ旨戶長ニ届出ルトキハ戶長與書證印シ郡區長ヲ經テ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令部ニ届出可シ其事故止ムトキ亦同シ尤モ疾病延ヒテ十五日以上ニ及フ者ハ最初届出ノ日ヨリ三十日毎ニ届出其年九月一日ニ至ルモ事故尙止マサル者ハ本人所持ノ番號割符ヲ添ヘ同月十五日限

リ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ ○第八十四條 新兵入營前
 甲府縣ヨリ乙府縣ニ轉籍又ハ全戶寄留スル者ハ即日戶主ヨリ甲府縣戶長ニ届出戶長ハ郡區長ヲ
 經テ府縣廳ニ届出可シ又乙府縣ニ到着スルトキハ前全様ノ手續ヲ以テ番號割符ヲ添へ届出可シ
 然ルトキハ甲府縣ノ當籤番号ヲ存シ他日入營ノ時ニ至リ乙府縣同番號ニ次テ入營セシム可シ但
 本人ヨリ轉籍又ハ全戶寄留ノ旨ヲ甲乙府縣ノ郡區駐在官ニ届出可シ
 第十三章 歸休歸省 ○第八十五條 徵兵令第十七條ニ照シテ徵兵ヲ猶豫スルハ抽籤以前該條
 項ニ當ル者ニ限ル但戶主若クハ父兄等死没シ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレ或ハ不具等トナリ本人ヲ
 要スルニアラサレハ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルトキハ詮議ノ上郷里ニ歸休セシメ又ハ第一
 豫備徵員ニ編入ス抽籤後養子又ハ他家ノ和續人トナリ前項ノ事故ヲ生スルモ詮議ニ及ハス ○
 第八十六條 前條但書ニ當ル者ハ戶主又ハ親族ノ者ヨリ其事由ヲ詳記シ戶籍寫若クハ刑名宣告
 書寫若クハ醫師診斷書(第五書式)並ニ同郡區内現役兵ノ戶主タル者二人以上ヲシテ事實ヲ證セ
 シメ戶長郡區長與書証印ノ上郡區駐在官ヲ經テ府縣廳駐在官ニ差出シ該官ハ後備軍司令官ヲ經テ
 近衛局鎮臺或ハ鎮守府ニ申牒シ近衛局鎮臺ハ陸軍省ニ鎮守府ハ海軍省ニ開申ス可シ但癩疾不具
 等ノ者ハ陸海軍醫官ヲシテ地方醫師診斷書ノ當否ヲ判定セシメ又ハ府縣駐在官及ヒ其他陸海軍
 醫官ヲシテ其家ニ就キ檢査セシムルコトアルヘシ ○第八十七條 前條ノ者生兵或ハ二等若水
 兵若クハ二等若火夫ノ卒業後ナレハ郷里ニ歸休セシメ又卒業以前ナレハ之ヲ第一豫備徵員ニ編
 入ス ○第八十八條 近衛兵ニシテ前條ニ據リ歸休セシメ又ハ第一豫備徵員ニ編入スル者ハ近

衛局ヨリ本籍所管ノ鎮臺ニ通牒シ該鎮臺ノ管理ニ屬ス可シ ○第八十九條 現役兵在營在艦中
 父母ノ重病或ハ死亡等ニテ歸省ヲ願フトキハ其戶主又ハ親族ノ者ヨリ事實ヲ詳記シ(其重病ハ
 醫師ノ診斷書第五書式)戶長郡區長ノ與書証印ヲ以テ直ニ本人所屬ノ隊或ハ鎮守府ニ願出ニ於
 テハ詮議ノ上往復ヲ除キ十四日以内ノ歸省ヲ許ス可シ尤旅費ハ自辨タル可シ但生兵二等若水兵
 二等若火夫ノ卒業ニ至ラス或ハ臨時ニ演習觀兵ノ舉アルトキ又ハ航海中ハ本條ノ限ニ在ラス
 ○第十四章 補充員及ヒ豫備徵員 ○第九十條 補充員ハ臨時補充員除クノ外鎮臺ニ於テ毎年
 九月一日ノ現役兵缺員ニ應シ概ネ十月二十日ヨリ同月三十一日迄ニ入營スルモノトス但近衛兵
 海軍兵ニ在テハ近衛局海軍省ヨリ所要ノ人員ヲ九月二十日迄ニ陸軍省ニ通牒シ陸軍省ハ之ヲ各
 軍管ニ賦課ス可シ ○第九十一條 補充員入營ノ期ニ臨ミ疾病又ハ犯罪等ニテ入營スル能ハサ
 ル者ハ其事實ヲ詳記シ本人所持ノ番號割符ヲ添へ(疾病ハ醫師ノ診斷書第五書式)ヲ添へ速ニ戶
 長ニ届出可シ戶長ハ與書証印シ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ差出ス可シ該廳ニ於テハ其次番号ノ者ヨ
 リ順次ニ繰上ケ徵集人員ヲ充實シ入營セシメ其旨ヲ府縣駐在官ニ通牒ス可シ ○第九十二條
 前條ノ事故ニ據リ入營セサル者ハ翌年徵集ノ期ニ當リ郡區長ニ於テ其名簿ヲ作り府縣廳ニ差出
 シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ルヘシ ○第九十三條 補充員ニシテ入營ヲ命セラレタル者其入
 營迄ノ扱ハ總テ現役當籤者入營前ノ扱ト異ナルコトナシ ○第九十四條 補充員ハ十日間ニ往
 復スルコト能ハサル地ニ出ルヲ許サス然レトモ己ムヲ得サル事故ヲ生シ其日限ヲ越ユル地ニ出
 テンコトヲ欲スル者ハ事實並ニ往先ヲ詳記シ戶長郡區長ノ與書証印ヲ受ケ郡區駐在官ニ出願ス

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵兵

可シ ○第九十五條 補充員ニシテ現役ヲ志願スル者ハ本人ノ願書ニ親族連署シ戸長郡區長ノ
 與書證印ヲ受ケ郡區駐在官ニ願出ルトキハ詮議ノ上當籤番号ノ順序ニ拘ハラヌ補充員徵集同時
 之ヲ入營セシム可シ ○第九十六條 補充員身上ニ異動ヲ生スルトキハ戸主又ハ親族ノ者ヨリ
 三日以内ニ戸長ニ届出戸長郡區長與書證印シ郡區駐在官ヲ經テ之ヲ府縣駐在官ニ届出可シ ○
 第九十七條 補充員ニシテ甲府縣ヨリ乙府縣ニ轉籍又ハ全戸寄留スル者ハ第八十四條ノ例ニ據
 ル可シ ○第九十八條 補充員ニシテ第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生シ徵集豫豫ヲ出願スル者
 ハ第八十六條ノ手續ニ據リ主務省ニ開申ス可シ但主務省ニ於テハ詮議ノ上第一豫備徵員ニ編入
 ス可シ ○第九十九條 第一豫備徵員身上ニ異動ヲ生スルトキハ戸主又ハ親族ノ者ヨリ三日以
 内ニ戸長ニ届出戸長ハ第九十六條ノ例ニ據リ之ヲ處分ス可シ ○第一百條 第一豫備徵員ニシテ
 十五日間ニ往復スルコト能ハサル地ニ旅行セント欲スル者ハ其往先ヲ詳記シ戸長郡區長ヲ經テ
 郡區駐在官ニ届出テ然ル後旅行ス可シ但其屆書ニハ旅行中徵集ノ命アルトキハ直ニ之ヲ通牒ス
 可キ者ノ姓名住所ヲ記入ス可シ ○第一百一條 徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備徵員トナル者
 ハ其年四月二十日ニ至レハ別ニ命ナクシテ第二豫備徵員ニ編入セラレタル者ト心得ヘシ 第二
 豫備徵員年齢三十三歳トナル年ノ四月二十日ニ至レハ別ニ命ナクシテ國民兵役ニ編入セラレタ
 ル者ト心得ヘシ ○第一百二條 補充員服役年期ノ計算ハ現役兵ト同シ四月二十日ヨリ起算シ
 第一豫備徵員服役年期ノ計算ハ其編入ス可年ノ四月二十日ヨリ起算ス可シ但第八十七條ニ當リ
 第一豫備徵員トナル者ハ其入營年ノ四月二十日ヨリ起算ス

第十五章 一年志願兵 ○第一百三條 徵兵令第十二條ニ據リ一個年間現役ニ服セシコトヲ志願
 スル者ハ毎年九月一日ヨリ同月十五日迄ニ其願書(第二十二書式)ヲ戸長ニ差出ス可シ戸長ハ之
 ニ與書證印シ郡區長ヲ經テ十月一日限リ府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ ○
 第一百四條 志願者ハ當分ノ内各自ノ志望ニ由リ步兵看護卒及ヒ看馬卒ノ内ニ就キ其種類ヲ撰ヒ
 出願スルコトヲ得 ○第一百五條 食料被服等ノ自辨金ハ一名金壹百圓ニシテ其現品ハ官ヨリ之ヲ
 支給ス但自辨金ハ二月一日迄ニ府縣廳ヲ經テ納ム可シ徵兵令第十一條第二項ニ據リ若干
 月ニシテ歸休ヲ命シタル者ニハ殘金ヲ返付スヘシ ○第一百六條 志願兵入營前ノ扱ハ總テ現役
 當籤者ト異ナルコトナシ入營後第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生セシトキハ第八十六條及ヒ第八
 十七條ヲ適用ス可シ ○第一百七條 步兵志願者ハ各軍管ニ之ヲ纏メ別段ノ教育ヲ受ケシメ看護
 卒看馬卒志願ハ各軍管ノ其部ニ屬シ教育ヲ受ケシム可シ ○第一百八條 志願兵現役一個年ヲ終
 レハ六個年間豫備役ニ服ス可シ ○第一百九條 志願兵中品行方正勤務勉勵ニシテ技藝ニ熟達シ
 下士ノ任ニ堪フ可キ者ニハ其適任證書ヲ付與ス可シ 又教育上拔群ノ結果ヲ得タル者ハ豫備役
 下士ニ任シ士官適任證書ヲ付與ス可シ ○第一百十條 志願兵檢査所往復及ヒ入營歸郷ノ旅費ハ
 總テ自辨トス ○第十六章 臨時徵兵事務 ○第一百十一條 戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要ス
 ルトキハ左ニ掲クル項目ノ順序ニ從ヒ徵集ス可シ

- 一 徵兵令第四十條ノ事故止ミタル者
- 二 補充員
- 三 第二豫備徵員
- 四 徵兵令第十七條ニ當リ徵集ヲ猶豫セシ者

五 第三豫備徵員

第一百十二條 豫備徵員ハ年次ヲ逐ヒ服役日尙淺キ者ヨリ當籤番号ノ順序ニ從ヒ之ヲ徵集シ又徵兵令第十七條ニ當リ徵集ヲ猶豫セシ者ハ項目及ヒ當籤番号ノ順序ニ從ヒ之ヲ徵集ス ○第一百十三條 第一百十一條第一項第二項第三項ニ掲クル者ヲ徵集スルノ手續ハ平常補充員ヲ徵集スルニ同シ ○第一百十四條 第一百十一條第四項第五項ニ掲クル者ヲ徵集スルトキハ府縣廳ニ於テ臨時徵兵署ヲ設ケ徵集ノ準備ヲ爲ス可シ ○第一百十五條 臨時徵兵署ニ於テハ檢査所並ニ巡回日割ヲ定メ後備軍司令官及ヒ府知事縣令ニ開申ス可シ但府縣廳ニ於テハ日長ヲシテ壯丁ヲ引纏メ指定ノ日時場所ニ出頭セシム可シ ○第一百十六條 檢査所巡行ノ諸員ハ府縣駐在官醫官府縣兵事課長地方醫員及ヒ筆生トス但郡區長郡區駐在官ハ檢査所ニ出頭シ同所ノ事務ヲ補助ス可シ ○第一百十七條 身體檢査竣ルノ後府縣駐在官ハ臨時徵兵署ニ於テ府知事縣令ト商議シ徵兵令第十七條ニ當ル者ハ各項目ニ番号ヲ分テ第二豫備徵員ハ各年度ニ番号ヲ分テ抽籤ヲ施行ス可シ ○第一百十八條 一府縣ノ臨時徵兵事務全ク竣ルノ後府縣駐在官ハ人別表檢査表ヲ點檢シ兵種及ヒ部類ヲ分テ人別表ハ臨時徵員明細名簿トシ檢査表ハ臨時徵員檢査名簿トシ籤簿ト共ニ營所後備軍司令官ニ差出シ該官ハ之ヲ一師管ニ取纏メ兵種ヲ分テ人員表ヲ製シ名簿ト共ニ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ差出シ鎮臺司令官ハ其軍管人員表ヲ製シ之ヲ陸軍省ニ開申ス可シ ○第一百十九條 臨時徵兵事務ハ本章ニ掲クル諸條ヲ除ク外定期徵兵事務ニ準シ便宜處分ス可シ ○第一百二十條 國民兵ヲ徵集スルノ方法ハ別ニ之ヲ定ム ○第十七章 雜則 ○第一百二十

一條 徵兵令第十條ニ據リ現役志願ノ者ハ其願書(第二十四書式)ニ戶長郡區長ノ與書證印ヲ受ケ徵兵檢査所ニ出願ス可シ但檢査所ニ往復ノ旅費ハ合格者ニ限リ官給ス ○第一百二十二條 徵兵令第十七條第十八條第二項乃至第三項及ヒ第十九條ニ當ル者年齢滿二十七歲以下ニシテ現役ヲ志願スルトキハ前條ノ手續ヲ以テ徵兵檢査所ニ出願ス可シ但旅費ハ前條ニ同シ ○第一百二十三條 徵兵令第十一條及ヒ第十八條第二項ノ卒業證書ハ學期二個年以上ノ學校ニ於テ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル證書ニ限ル ○第一百二十四條 徵兵令第十七條ニ當ル者ヲ徵集スルトキハ其項目ノ順序ニ從フ可シ ○第一百二十五條 徵兵令第十七條第一項及ヒ第二項ノ兄弟ハ同戶籍中ノ實兄弟ニ限ル ○第一百二十六條 徵兵令第十七條第一項ノ兄弟同時徵集ニ當リ檢査ノ上共ニ合格スルトキハ情願ニ據リ一人ハ猶豫ス可シ 前項ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ檢査ヲ受ケント欲スルトキハ各自届出ヲナス年ノ八月十五日迄ニ其旨ヲ寄留地戶長ニ願出本籍戶長ニ届出可シ ○第一百二十七條 武官並ニ陸海軍生徒ノ兄弟ハ徵兵令第十七條第一項第二項ニ據ルノ限ニ在ラス ○第一百二十八條 豫備兵後備兵召集中死没又ハ公務ノ爲負傷シ若クハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄弟徵集ニ當ルトキハ徵兵令第十七條第二項ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ ○第一百二十九條 徵兵令第十七條第一項ノ現役兵ノ兄或ハ弟一人ハ徵集ヲ猶豫スヘシト雖モ現役中ノ者其年四月現役滿期或ハ脱走中又ハ歸營償勳中ナルトキハ徵集ニ應ス可シ ○第一百三十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二十一條ニ當リタル者七個年間ニ其資格ヲ失ヒタルトキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ第十八條第七項ニ當ル者並ニ陸海軍生徒トナル者ハ

徵集猶豫ニ屬ス可シ ○第百三十一條 各自届出後即チ九月十六日以後ニ於テ徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項 〔陸海軍生〕第十九條及第二十一條ニ當ルモ徵集猶豫ノ限リニ在ラズト雖モ翌年四月十一日以後九月十五日迄ニ該條項ノ名稱ヲ得タルモノハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

○第百三十二條 徵兵令第十八條第三項ノ生徒ニシテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ同令第二十一條ニ據リ第一豫備徵員ニ編入ス可キヲ以テ徵兵検査時限ニ至レハ郡區長ヨリ其學校ニ通牒シ最寄ノ徵兵検査所ニ出頭セシメ身体ノ検査ヲ受シム可シ ○第百三十三條 徵兵令第十八條第二項ニ掲ケタル官立大學校ニ準スル官立學校ハ左ノ如シ

一 工部大學校

三 司法省法學校

二 農商務省駒場札幌農學校

第百三十四條 徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項第十九條第二十條 〔第五項〕及ヒ第二十一條ニ當ル者其事故止ミタルトキハ學校長若シハ所屬長ヨリ本人所管ノ府縣廳ニ通牒ス可シ

○第百三十五條 徵兵令第十九條ニ掲ケル修業一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒トハ該校ニ於テ其課程ヲ卒リタル者ノミニ限ラズ他ノ學校ヨリ入學シ一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ニ編入セラレタル者亦該條ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ ○第百三十六條 官吏 〔判任〕及ヒ局長ハ徵兵令第二十條第一項ニ據リ召集ヲ猶豫スル雖モ准官吏ハ該條項ニ據リ召集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラズ ○第百三十七條 附籍戶主及ヒ其嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵兵令第二十二條第一項ニ據リ徵集スル雖モ其戶主徵兵各自届出期限即チ九月十五日以前ニ一戶ヲ設立スルトキハ徵兵令第十七條

第三項及ヒ第五項ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ但分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戶主ニシテ更ニ附籍シタル後別ニ一戶ヲ設立スルモ本條ノ限ニ在ラズ ○第百三十八條 徵兵令第二十二條第四項ノ嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵集スル雖モ其戶主分家又ハ絶家廢家再興後廢疾不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

○第百三十九條 徵兵令第二十二條第二項ノ嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵集スル雖モ各自届出チ爲ス年ノ九月十五日迄ニ前嗣子承祖ノ孫若クハ相續人 〔同戶籍〕廢疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

○第百四十條 徵兵令第二十二條第二項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ其第六項ニ據リ戶主トナリタル者及ヒ其第七項ノ戶主ハ徵集スル雖モ其徵集ニ應スヘキ年ノ一月迄ニ前戶主 〔同戶籍〕者 〔己ニ六十歳ニ至ルカ又各自届出チ爲ス年ノ九月十五日迄ニ廢疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ〕

○第百四十一條 徵兵令第十七條第三項第二十二條第三項及ヒ第七項ニ掲ケル六十歳又同令第二十二條第五項及ヒ第九項ニ掲ケル五個年ニ徵集ニ應スヘキ年ノ一月ヲ以テ分界ト爲ス可シ

○第百四十二條 徵兵令第十八條第五項第六項ニ當ル者ハ事故ノ存スル間徵集猶豫ニ屬スト雖モ毎年検査所ニ出頭シ身体ノ検査ヲ受シ可シ ○第百四十三條 徵兵検査呼出又ハ入營ニ際スルトキハ民事訴訟ノ爲メ裁判所ノ召喚アリト雖モ検査又ハ入營日時ヲ延期セス ○第百四十四條 戦時若クハ事變ニ際シテハ第八十條第八十五條但書及ヒ第八十九條ニ當ル事故生スト雖モ

詮議ニ及ハス ○第四百四十五條 徵兵令第十七條第四項及ヒ同令第二十二條ノ諸項ニ當ル癩疾
 又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ハ徵兵檢査所ニ呼出シ檢査ス可シ但起居自
 在ナラサル疾患ニシテ車駕等ヲ用フルモ出頭スル能ハサル者ハ府縣駐在官醫官及ヒ府縣兵事課
 長其家ニ就キ檢査スルコトアル可シ ○第四百四十六條 前條ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ檢
 査ヲ受クント欲スルトキハ適齡者ノ各自届出ヲ爲ス年ノ八月十五日迄ニ其旨ヲ寄留地戸長ニ願
 出本籍戸長ニ届出可シ ○第四百四十七條 徵兵署閉鎖後徵兵令第三十六條ニ當ル者ハ翌年之ヲ徵
 集ス可シ ○第四百四十八條 徵兵令第四十一條ニ當ル者其年疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入
 營スルコト能ハスシテ九月一日ニ至ルモ事故尙止マサルトキハ翌年更ニ檢査ヲ遂ケ仍ホ先入兵
 トシテ徵集ス可シ ○第四百四十九條 徵兵令第四十一條ニ當ル者ニシテ爾後同令第十七條第十
 八條第四項第五項第六項及ヒ第十九條ニ該當スト雖モ徵集猶豫ノ限リニ在ラス ○第五百十
 條第八項第九項ヲ除ク 徵兵既行ノ地在籍ノ者ニシテ沖繩縣及ヒ北海道ノ内徵兵未行ノ地ニ轉シ更ニ他ノ府縣ニ寄
 留スル者ハ寄留地ニ於テ各自届出ヲ爲シ其本籍ノ者ト同シク徵收ニ應ス可シ徵兵未行ノ地ニ單
 身寄留ノ者ハ本籍地ニ歸リ徵兵ニ應ス可シト雖モ全戶寄留ノ者ハ徵兵猶豫ニ屬ス可シ ○第百
 五十一條 徵兵令第三十四條第三十五條第三十六條第三十九條ノ届出ヲ怠リ又ハ兵役ヲ免レン
 カ爲メ身体ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐偽ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡潛匿シタル者又ハ正當ノ故ナ
 ヲ檢査所ニ參會セサル者アルトキハ普通治罪法ノ手續ニ據リ之ヲ告發ス可シ ○第五百十二條
 徵兵檢査所ニ差出ス可キ願書ハ三通届書ハ二通徵兵署宛ニテ差出ス可シ

第十八章 附則 ○第五百二十三條 明治十四年一月ヨリ明治十六年十二月迄ニ滿二十歳トナリタ
 ル者ニシテ舊徵兵令第二十八條ニ當リ國民軍ノ外免役ニ屬スル者新徵兵令ニ照シ常備年期ノ第
 七年檢査時限内ニ在テ名稱ヲ罷メタルトキハ更ニ徵兵ニ應ヒシメ其第七年檢査時限ヲ經過スル
 者ハ舊徵兵令ニテ處分セシ儘之ヲ名簿ニ据ヘ置ク可シ ○第五百二十四條 明治十四年一月ヨリ
 明治十六年十二月迄ニ滿二十歳トナリタル者ニシテ舊徵兵令第二十九條第三十條第三十一條及
 ヒ第三十四條ニ當リ平時免役又ハ徵集猶豫ニ屬スル者新徵兵令ニ照シ常備年期ノ第七年檢査時
 限内ニ在テ名稱ヲ罷メタルトキハ更ニ徵集ニ應ヒシメ其第七年檢査時限ヲ經過スル者ハ新徵兵
 令第三十二條ニ據リ第二豫備徵員トナス可シ ○第五百二十五條 現今豫備兵役中ノ者ハ最初豫
 備軍ニ編入セシ年ノ四月二十日ヨリ起算シ四個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後後備兵役ニ服セシム
 但定期ニ在ラスシテ臨時後備軍ニ編入セシ者ハ其編入セシ日ヨリ起算シ四個年ノ役ニ服セシメ
 滿期ノ後後備兵役ニ服セシム ○第五百二十六條 現今後備兵役中ノ者ハ最初後備軍ニ編入セ
 シ年ノ四月二十日ヨリ起算シ五個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後國民兵役ニ服セシム但定期ニ在ラ
 スシテ臨時後備軍ニ編入セシ者ハ其編入セシ日ヨリ起算シ五個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後國民
 兵役ニ服セシム ○第五百二十七條 舊徵兵令第三十六條ニ據リ第一豫備徵兵服役中ニシテ年齡
 二十七歳ヲ經過セシ者及ヒ現ニ第二豫備徵兵服役中ノ者ハ新徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備
 徵員ト爲ス可シ ○第五百二十八條 新徵兵令第二十二條ノ諸項ニ當ル者ト雖モ其事柄ノ明治六
 年一月十日即チ徵兵令制定以前ニ係ル者ハ該條項ヲ以處分スルノ限ニアラス ○第五百二十九條

〔本文ハ釋義
ノ部ニアリ〕

○陸軍省甲第三十九号達 明治十七年 九月六日 徵兵事務條例第二十三條及第三十條ニ據リ郡區長ハ壯
丁名簿及ビ壯丁異動名簿ヲ製シ各自屆書人別表其他書類ト共ニ郡區駐在官ニ送付可致儀ニ候處
當分ノ内壯丁名簿壯丁異動名簿ノニ駐在官ニ送致シ該官ニ於テハ其名簿ノ卷末ニ署名押印シ郡
區長ニ返付スヘキ儀ト可心得此旨相達候事

第一書式 國民兵入籍御届

國民兵入籍御届
郡(區)町(村)番地住 族及職業 姓
名 年月日生
右私或ハ私何男(養嗣子(承祖ノ孫等)ニテ本年何月十一
歳ニ相成候間此段及御届候也

年月日 戸主 郡(區)町(村)戸長 姓 名 職
族及職業 姓 年月日生 名 印

前書之通相違無之候也

年月日 戸 姓 長 名 印

第二書式 徵兵適齡届書

徵兵適齡御届
郡(區)町(村)番地住 族及職業 姓
名 年月日生
除役及徵集猶豫ニ當ルヘキ事
故アル者ハ茲ニ記載ス例ヘ
重懲役十年(父六十五歳)祖(父七十歳)子(承祖ノ孫)
右私或ハ私何男(弟孫甥又ハ附籍等)ニテ本年何月二十
歳ニ相成候間此段及御届候也

<p>郡(區)町(村)番地住 族及職業 年月日 戶主 名 印 年月日 姓 名 殿</p>	<p>前書之通相違無之候也 戶長 年月日 姓 名 印</p>	<p>第三書式 徵兵異動御届 徵兵異動御届 郡(區)町(村)番地住 族及職業 年月日 名 印 年月日 姓 名 殿</p>	<p>右明治何年徵兵適齡ノ時兄某現役中(郡村番地何某養嗣子等)ニテ徵集猶豫相成候處年月日現役滿期ニ相成該家離縁私何男(弟甥附籍ニ復シ)候間此段及御届候也 郡(區)町(村)番地住 族及職業 年月日 名 印 年月日 姓 名 殿</p>	<p>前書之通相違無之候也 戶長 年月日 姓 名 印</p>
--	--	--	---	--

<p>本人戶主ナレハ本人ヨリ事由ヲ詳記シ届出可シ 第四書式 其一 事由書</p>	<p>事由書 郡(區)町(村)番地住 族及職業 年月日 名 印 右先代實父(母)某儀ハ來何年一月六十何歳ト相成且祖父亡某ノ死跡ヲ繼キタル戶主ニテ私儀ハ何年月日何人ノ隠居跡ヲ繼キタル戶主ニ相違無御座候也 郡(區)町(村)番地住 族及職業 年月日 名 印</p>	<p>前書之通相違無之候也 戶長 年月日 姓 名 印</p>	<p>此書式ハ一例ヲ示スモノナレハ實際ニ就キ調査ニ要スル事由ヲ詳記スヘキモノトス其二書式亦同シ 第四書式 其二 事由書 事由書 郡(區)町(村)番地住 族及職業 年月日 名 印</p>	<p>右ハ私實養嗣子ニ候處私儀來何年一月六十何歳何ヶ月ト</p>
--	---	--	--	----------------------------------

相成且先養父(母)亡某ノ死跡ヲ繼キタル戸主ニ相違無御座候也

郡(區)町(村)番地住
族及職業
年月日 戸主 姓名 印
郡(區)町(村)戸長 姓名 殿
年月日生

前書之通相違無之候也

年月日 戸長 姓名 印

第五書式 其一 醫師診斷書

診斷書

府(縣)郡(區)町(村)番地住
族及職業
姓名

年月日生

右ハ天資強實或ハ何々ニシテ嘗テ病ニ罹リシコトナシ或ハ何病ニ罹ル云々何年月何日何症ヲ發シ爾來何々ノ症候ニ記載スヘシ
現症候ヲ精密アルヲ以テ何症ト診斷シ何々劑ヲ與ニ何々ノ法ヲ施シ己ニ何過テ經過セシ處何々症增加スルニ由リ或ハ何々ノ症ヲ遺スニ由リ遂ニ危篤ニ陥ル者或ハ所詮治癒ス可ラサル者ト及診斷候也

年月日 府(縣)郡(區)町(村)番地住
主任醫 姓名 印

右診斷書調査候處不都合無之候也

府(縣)病院長 病院ナキ地方ハ內務省開業免狀所持醫
姓名 印
年月日

先天不具ノ者ニシテ治療ヲ加ヘサル者ハ其景况部分ヲ明細ニ記載スヘシ病院長ニ於テ醫師ノ診斷書上其病症及治療法等番按シ成規ニ適合スルモノト見認トキハ與書押印スヘシ(其二書式亦倣之)

診斷書

府(縣)郡(區)町(村)番地住
族及職業
姓名

年月日生

右ハ何年月何日山林樵伐ノ際或ハ何々ノ時何部ヲ打撲シ何骨ヲ折斷ス或ハ何ノ部ニ何々ノ傷ヲ被リ即日何術及何綱帶ヲ施シ或ハ何々法ヲ施シ何々劑ヲ與ヘ何々ノ症ハ治癒スルヲ得ルモ何々症ヲ遺シ或ハ何々ノ症ヲ繼發スルニ由リ所詮治癒ス可ラサル者或ハ爾後何ヶ月ヲ經サレハ治癒セサル者ト及診斷候也

年月日 府(縣)郡(區)町(村)番地住
主任醫 姓名 印

右診斷書調査候處不都合無之候也

年月日 府(縣)病院長 病院ナキ地方ハ內務省開業免狀所持醫
姓名 印

第十七書式 除役名簿		用紙美濃紙		府(縣郡區)抽籤總代人		年月日		徵兵署		御中		姓名印							
備考	除役名簿	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同
備考	及ヒ第十六條及第十七條ニ當ル事項	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同
備考	及ヒ第十六條及第十七條ニ當ル事項	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同
備考	及ヒ第十六條及第十七條ニ當ル事項	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同

第十八書式 其一 徵集猶豫名簿		用紙美濃紙		府(縣郡區)抽籤總代人		年月日		徵兵署		御中		姓名印							
備考	徵集猶豫名簿	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同
備考	徵兵令第十七條ニ當ル事項	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同
備考	及ヒ第十六條及第十七條ニ當ル事項	職	業	生	年	月	日	住	所	郡(區)	町(村)	姓	名	某何男	本人	戸主	同	同	同
														(養子)	ナレ	ハ	戸	主	同

第十八書式 其二

用紙美濃紙

姓名	備考	住 所	誕 生	職 業	徵兵令第十八條第十九條第二十一條ニ當ル事項	姓名	備考	住 所	誕 生	職 業	徵兵令第十八條第十九條第二十一條ニ當ル事項
	一 徵兵猶豫名簿				年月日決裁濟 某省奉職	某何男 本人戸主 (養子)ナレハ戸 (兄弟)主ト記ス (伯叔)ヘシ (甥)何 某					年月日 少 教 正
											年月日入校 (團)陸海軍某 校團生徒
	何府縣										卒ル生徒

第十九書式 先入兵不參名簿 用紙府縣欸名ノ美濃紙

十八年 徵兵

某何男(養子)兄弟(伯叔)甥(本人戸主ナレハ戸主ト記スヘシ)

何村 平民農 何 某

十八年徵兵檢査ノ節失踪十九年同斷 年月日生

十九年同斷

同

何町 十族農 同

十九年徵兵檢査ノ節逃亡二十年同斷 同

二十年徵兵

同

二十年徵兵檢査ノ節故ナシ檢査ニ參會セス 同

以下倣之

計 何人

第二十二書式 國民兵人員表 用紙美濃紙

明治 何年 何府 國民兵人員表 主任 官姓名印

十二月一日調 何縣 國民兵人員表

郡區	年齡	計
何郡區	十七歲	何人
	十八歲	何人
	十九歲	何人
	計	何人

第二十二書式 一年志願兵願書

府(縣)郡(區)町(村)番地住
 族及職業 姓 名
 年月日生

右私或ハ私何男(養嗣子)承祖ノ孫等ニ候處徵兵令第十
 一條ニ據リ食料被服等ノ費用トシテ金一百圓上納可仕
 候間御檢査ノ上一箇年間歩兵(看護卒)看馬卒ノ現役ニ
 御徵集相成度別紙某學校卒業證書並ニ學業履歷書相添
 此段奉願候也

府(縣)郡(區)町(村)番地住
 族及職業 姓 名
 年月日 戶主 名印

徵兵署 中

前書之通相違無之候也

年月日 戶長 姓 名 印

第二十四書式 志願兵願書

府(縣)郡(區)町(村)番地住
 族及職業 姓 名
 年月日生

右私或ハ私何男(養嗣子)承祖ノ孫等徵兵令第十條ニ據
 リ現役志願仕候間御檢査被成下度尤御採用ノ上ハ定規
 ノ服役年期中家事ノ故障ヲ以テ一切苦情申立間敷候此
 段奉願候也

○徵發令

第一條 徵發令ハ戰時若シハ事變ニ際シ陸軍或ハ海軍ノ全部又ハ一部ヲ動カスニ方リ其所要ノ軍需ヲ地方ノ人民ニ賦課シテ徵發スルノ法トス

但シ平時ト雖モ演習及ヒ行軍ノ際ハ本條ニ准ス

第二條 徵發ハ陸軍若シハ海軍官憲ノ徵發書ヲ以テ之ヲ行フ

第三條 左ニ記列スル官憲ハ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス

第二十九章 徵發令 明治十五年八月十二日 第四十三號布告附錄

徵發令別冊ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

第一節 徵發ヲ拒ミ或ハ規避スル者

第五十一條 徵發ヲ拒ミ或ハ規避シ或ハ漫リニ使役ヲ離レタルモノ及ヒ之ヲ教唆誘導シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

一 本條ノ解

二 徵發ヲ命セラレタルニ其物件存在セサルモ如何スヘキヤ○ 徵發ノ時期ニ違ヒ府知事縣令又ハ郡區長戸長他ノ方法ヲ以テ 調進シ爲メニ生シタル損害ヲ本人辨償ノ資力ナキトキハ如何ニ處分スヘキヤ

一 陸軍卿海軍卿鎮臺

司令官及ヒ鎮守府長官

二 陸軍ニ於テハ特命

司令官軍團長師團

長旅團長分遣隊長

若シハ演習及ヒ行

軍ノ軍隊長

三 海軍ニ於テハ特命

司令官艦隊司令長

官艦隊司令官分遣

艦長若シハ操練及

ヒ航海ノ艦隊司令

官又ハ艦長

第四條 徵發スヘキモ

ノ種類ニ依リ徵發區

〔會社モ之ニ准ス〕ヲ定

(一)○本條ハ徵發ヲ命セラレタルニ之ヲ徵發スルヲ拒ミ或ハ之ヲ忌

ミテ避ケ逃レ又ハ其徵發ニ應シテ出頭シナカラ漫リニ使役ヲ離レタ

ル者及ヒ此等ノ犯罪ヲ教唆誘導シタル者ハ何レモ一月以上一年以下

ノ輕禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加セラレヘキナリ

然レトモ本條ニ付須ラシク注意ヲ要スヘキモノアリ例ヘハ本令第三條

ニ於テ徵發書ヲ出スノ權アル官憲ヲ定メラレタルカ故ニ此第三條中

記載ノ官憲ヨリ徵發ヲ命セラレタルニ之ヲ拒ミ又ハ規避シタルトキ

ハ本條ニ依テ處罰セラル、ハ勿論ナリト雖モ若シ他ノ官憲ヨリ命シ

タルニ之ヲ拒ミ又ハ規避スルトモ決シテ罰スヘカラサルナリ何トナ

レハ第三條以外ノ官憲ハ徵發書ヲ出スノ權ナキモノナレハナリ又同

第四條ニ於テ徵發スヘキモノ、種類ニ依リ徵發區ヲ定メ之ヲ府縣郡

邑、町村、會社、ノ四項ニ區分セラレタルカ故ニ各其負擔セシメラレタ

ル物件ヲ徵發スルノ義務ヲ負フモノナレハ若シ其負擔セシメラレタ

ハムルコ左ノ如シ
 一第十二條第一項ハ 府縣
 二第十二條第二項及 ヒ第三項ハ 郡區
 三第十二條第四項以 下各項及ヒ第十三 條各項ハ 町村
 四船舶會社所有ノ船 舶及ヒ鐵道會社所 有ノ瀛車ハ 會社
 第五條 徵發ス可キモ ノハ徵發區内ニ現存ス ルモノニ限ル
 第六條 徵發書ハ徵發 區ニ從ヒ府知事縣令郡 區長戶長若クハ停車場 區長戶長若クハ停車場

ル物件ノ徵發ヲ拒ミタルハ本條ニヨリテ罰セラルベシト雖モ他
 ノ物件ヲ徵發スヘキノ命ヲ受ケタルハ拒ミ或ハ規避スルモ決シ
 テ本條ノ罰スヘキノ命ヲ受ケタルナリ何トナレハ他ノ物件ハ之ヲ徵集
 マルノ義務アラサレハ之ヲ拒ムモ亦其責アラサルハ勿論ナレハナリ
 (二)○或問テ曰ク徵發ヲ命セラレタルニ其物件存在セサルトキハ如何
 スヘキヤ曰ク本條ニ徵發ヲ拒ミ或ハ規避シ云々トアルヲ以テ充分ニ
 徵發シ得ヘキ余地アルニモ拘ハラズ之ヲ徵發セサリシトキハ處罰セ
 ラルヘシト雖モ若シ其物件徵發區内ニ存在セサルニヨリ徵發セサル
 モノハ之ヲ拒ミ或ハ規避スルニ非ス眞ニ己ムヲ得サル所ノモノナレ
 ハ決シテ之ヲ罰セサルナリ況ンヤ本令第五條ニ徵發スヘキモノハ徵
 發區内ニ現在スルモノニ限ルトハ明文アルニ於テオヤ
 ○或問テ曰ク本令第九條ニ徵發ノ時機ニ違フトキハ府知事縣令郡區
 長戶長他ノ方法ヲ以テ調進シ爲メニ生シタル費用ハ本人ヲシテ之ヲ

長船舶會社ノ店長ニ付
 スヘシ
 第七條 徵發書ヲ受ケ
 タル府知事縣令郡區長
 戶長若クハ停車場長船
 舶會社ノ店長ハ時期ヲ
 誤ルコトナク其供給ヲ完
 全セシムルノ責アルモ
 ノトス
 第八條 各徵發區ニ於
 テハ臨時徵發ニ應スヘ
 キ便宜ノ方法ヲ豫定ス
 ヘキモノトス
 第九條 徵發ヲ課セラ
 レタルモノハ時期ニ違
 フコトナク之ヲ供給スル
 ノ義務アルモノトス若

辨償セシムトアリ若シ本人其費用ヲ辨スル能ハサルトキハ如何ニ處
 分スベキヤ曰ク此點ニ付テハ左ノ布告アリ
 明治十六年第三十一號布告
 徵發令ニヨリ負擔スヘキ費用ノ意納者ハ明治十年十一月第七十九
 號布告ニ依リ處分スヘシ但財產公賣ノ際買受望人ナキトキハ徵發
 區ニ没入シ不足金アルトキハ其區ノ損失ニ歸ス右費用ニ關スル處
 分ニ付不服アルモノハ明治十五年第二十二號布告ニ依ルベシ
 第二節 故ラニ徵發ヲ爲サス又ハ懈怠ニ出ル
 者
 第五十二條 徵發ノ命令ヲ受ケタル府知事縣令郡區長
 戶長停車場長船舶會社ノ店長其處置ヲ爲サル者ハ
 二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以
 下ノ罰金ヲ附加ス其懈怠ニ出ル者ハ二十圓以上百圓

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵發令 八百八十七

シ其時期ヲ違フキハ府知事縣令郡區長戶長他ノ方法ヲ以テ調達シ爲メニ生シタル費用ハ本人チシテ之ヲ辨償セシム但會社ニ係ルモノハ陸海軍官憲直ニ其處分チ爲ス可シ

第十條 徵發チ課セラレタルモノ商用其他ノ事故ヲ以テ供給ヲ拒ミ又ハ供給スヘキモノヲ藏匿シタルキハ直ニ之ヲ使用スルヲ得
第十一條 供給ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ其受領證票ヲ府知事縣令郡

以下ノ罰金ニ處ス

○本條ハ徵發ノ命チ受ケタル府知事縣令郡區長戶長停車場長船舶會社ノ店長故ラニ其徵發ノ處置チ爲サル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金チ附加セラル、ナリ又故ラニ爲サルニ非スシテ懈リテ之ヲ爲サルモノハ其罪情輕キカ故ニ唯二十圓以上百圓以下ノ罰金チ科セラル、ニ止ルナリ

○本條ノ意義ハ殆ント前條ト同シキヲ以テ重複ニ屬スルヲ恐レ別ニ解釋チ下サス讀者宜シク參看スベシ

第三節 妄リニ徵發書ヲ出シ又ハ其權ナキ者之ヲ出ス時

第五十三條 徵發書ヲ出スノ權チ有スル官憲妄リニ徵發書ヲ出シ又ハ其權チ有セサル官憲徵發書ヲ出シタル時ハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ劓官

ヲ附加ス

一 本條ノ解

二 徵發書ヲ出スノ權チ有スル官憲妄リニ之ヲ出シ又ハ其權チ有者之ヲ出シタルトキハ徵發者ハ之ニ應セサルモ可ナル乎

(一)○本條ハ妄リニ徵發書ヲ出ス者及ヒ徵發書ヲ出スノ權チ有者之ヲ出シタルキノ制裁ヲ規定スル者ナリ夫レ徵發ナル者ハ其徵發者ニ向テ重大ノ義務チ負擔セシムル所ノモノナレハ之ヲ出スハ實ニ己ムチ得サルノ時ニ於テセサルヘカラス一方ニ向テハ徵發者ニ必ス之ヲ徵發セサルヘカラスナルノ義務チ負ハシメタル以上ハ又一方ニ向テハ之ヲ出ス者チ制シテ以テ濫出ノ弊ナキチ期セサルヘカラス是レ本條ノ設ケアル所以ナリ故ニ徵發書ヲ出スノ權アル官憲必要ナラサルニ妄リニ徵發書ヲ出シ又ハ其權チ有官憲之ヲ出シタルトキハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ若シ陸海軍ノ將校之ヲ犯シタルトキハ仍ホ其

區長區長若シハ停車場長船舶會社ノ店長ニ交付ス可シ
第十二條 徵發スヘキモノ左ノ如シ
一 米麥秣粥鹽味噌醬油漬物梅干及ヒ薪炭
二 乘馬馱馬駕馬車輛
其他運搬ニ供スル獸類及ヒ器具
三人夫
四 宿舍廐園及ヒ倉庫
五 飲水石炭
六 船舶
七 鐵道馬車
八 演習ニ要スル地所

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵發令

九演習ニ要スル材料

器具

第十三條 戰時若クハ事變ニ際シテハ第十二條ノ諸項ニ掲クルモノ、外徴發スヘキモノノ左ノ如シ但シ平時ノ演習及ヒ行軍ニハ徴發スルコトヲ得ス

一 造船所工作所及ヒ軍事ノ工作ニ要スル材料器具

二 職工礦夫洗濯人ノ類

三 被服裝具艸鞋兵器

彈藥船具寢具藥劑

治療器械及ヒ紮帶

官職ヲ剝奪セラル、者ナリ

二〇或問テ曰ク徴發書ヲ出スノ權ヲ有スル官憲安リコ之ヲ出シ又ハ其權ナキ者之ヲ出シタルトキハ徴發者ハ之ニ應セサルモ可ナル乎曰ク其權ナキ者之ヲ出シタルトキハ之ニ應セシテ可ナルノ理由ハ第五十一條ノ釋義ニ於テ既ニ辨明シ盡セリ而シテ其徴發書ヲ出スノ權アル官憲之ヲ出シタルトキハ其妄リニ出スト正當ニ出ストヲ問ハス徴發者ハ必ス之ニ應セサルヘカラスト信スルナリ何トナレハ徴發者ニ於テ其徴發書ノ正當ナリヤ否ヲ鑑別シ而シテ後應否ヲ決スルコトヲ許サハ遂ニ其徴發スルト否トノ權ヲ徴發者ニ與フルニ至リ其弊害實ニ大ナルノミナラス妄リニ徴發書ヲ出ス者ヲ責罰スルノ必要アラサルニ至ラン其故ハ法律上ニ於テ之ヲ制裁セサルモ人民ハ夙ニ斟酌シテ應否ヲ決スヘケレハナリ是レ豈ニ法ノ精神ナランヤ故ニ徴發者ハ其權アルモノヨリ命ヲ受ケタルトキハ直チニ其當否ヲ問ハス之ニ應スル

四水車搗春ノ類

五病院

第十四條 第十二條第二項中徴發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ 一 皇族所用ノ車馬 二 外國公使館並ニ領事館ニ屬スル車馬 三 乘馬本分タル職務ニ要スル馬匹 四 郵便用ノ車馬 五 公認セラレタル種牛種馬

第十五條 第十二條第四項中徴發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ 一 公務ニ屬スル麻署 二 皇族ノ邸宅 三 外國公使館領事館及ヒ其所屬館 四 鐵道電信郵便用ノ建造物 五 陸海軍將校并ニ同等官現住ノ家屋 六 博物館書籍館 七 病院育嬰院棄兒院 八 學校但臨戰合圍地境內ニ在リテハ此限ニ在ラス 九 製造場內機械室 第十條 第十二條第二項ニ掲クルモノ、使用ハ其原用ヲ轉シテ他用ニ供スルヲ許サス但戰時若クハ事變ニ際シテハ此限ニ在ラス 第十七條 第十二條第三項ニ掲クルモノハ其差出場所ヨリ六里未滿ノ地ニ於テ使用スルヲ例トシ一日ノ使用ハ六里ニ超ユルコトヲ得ス但戰時若クハ事變ニ際シテハ六里以外ノ地ニ使用スルコトヲ得 第十八條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ合圍地境內ヲ除クノ外居住者ノ起臥及ヒ營業ニ必用ナル場所ヲ徵用スルコトヲ得ス但營業ニ必用ナルモ旅店等ハ此限ニ在ラス 第十九條 宿舍ノ廣狹ハ其地家屋ノ數ト隊伍ノ編制トニ從ヒ一定シ難シ故ニ臨時適宜ニ之ヲ定ム 第二十條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ陸軍若クハ海軍ノ都合ニ依リ特ニ其場所ヲ指定スルコトアルヘシ 第二十一條 宿舍ヲ定メタルノ後ハ區町村ノ便宜ヲ以テ他ニ轉移スルコトヲ許サス庭園

第三編 公益ニ關スル規則 徴發令

倉庫亦同シ ○第二十二條 宿舍庭園ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ併セテ人馬ノ食飼ヲ供給ス可シ但駐軍三日以上ニ至ルトキハ第四日ヨリ食飼ハ陸軍若クハ海軍ノ自辯トス ○第二十三條 第十二條第六項ノ徵發ニ係リ其乘載人馬ノ食飼ヲ要スルモノハ併セテ供給セシム ○第二十四條 第十二條第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ戰時若クハ事變ニ際シ借切トシテ之ヲ徵用スルコトアル可シ ○第二十五條 第十二條第二項第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ其操業者ヲ併セテ徵用スルヲ例トス但時宜ニ依リ各個ニ分別シテ徵用スルコトヲ得 ○第二十六條 第十二條第六項ニ掲クルモノヲ操業者ト各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル但船橋及ヒ舢舨ニ充ツルモノハ此限ニ在ラス ○第二十七條 第十二條第七項ニ屬スル氣車其屬具鐵道建築所用ノ材料器具及ヒ操業者ヲ各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル ○第二十八條 第十三條第五項ニ掲クルモノハ陸海軍病院ノ補助トシテ徵用スルヲ例トス但合圍地境內ニ在リテハ全ク明渡サシムルコトヲ得 ○第二十九條 徵發ニ係ルモノハ第三十一條乃至第五十條ニ定ムル所ノ方法ニ從ヒ賠償ス ○第三十條 徵發物件ヲ差出場所ニ輸送スルハ徵發區ノ義務トシ其輸送賃ヲ支辨セス ○第三十一條 賠償ハ平時ト戰時トヲ論セス其時々之ヲ支辨スルモノトス但戰時若クハ事變ニ際シ紛擾ノ爲メ延滞シテ三ヶ月ヲ越ユルトキハ年六分ノ割ヲ以テ其利子ヲ付ス ○第三十二條 賠償ハ徵發區毎ニ一括シテ府知事縣令郡區長局長停車場長船舶會社ノ店長ヨリ之ヲ請求スベシ ○第三十三條 徵發物件ノ其使用ノ爲メニ毀損シタルモノハ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス一其毀損ハ持

主若クハ操業者ヨリ速ニ其地ニ在ル陸海軍官憲若クハ局長ニ届出可シ一其届出ハ徵用濟引渡ノ後左ノ期限ヲ越ユヘカラス若シ其期限ヲ越ヘ又ハ期限中持主若クハ操業者ニ於テ使用セシトキハ無効トス 一 西洋形船舶 七日間 二 地所 評價委員ノ告示スル時日間 三 其他ノ物件 一日間 ○第三十四條 第十二條第一項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地市場ノ前三ヶ年間ノ平均價ヲ取リ之ヲ定ム其平均價ノ取リ難キモノハ評價委員ノ評定ニ任ス ○第三十五條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其郡區平常ノ賃價トス但物件ト操業者トヲ各個ニ分別シテ徵用シタルトキハ其郡區平常ノ賃價及ヒ借賃ニ准シテ賠償ス ○第三十六條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ルモノヲ宿泊セシメ連日使用スルトキ及ヒ六里以外ノ地ニ於テ使用スルトキハ第三十二條ノ例ニ拘ハラス賃價ノ半額ヲ前給シ宿泊食飼ヲ官給ス但此場合ニ於テハ賃價ノ四分ノ一ヲ減ス ○第三十七條 第十二條第二項及ヒ第六項ニ掲クルモノヲ買上クルトキハ勿論其他使用ノ都合ニ依リ價格ノ豫定ヲ要スルトキハ其金額ヲ定メ置ク可シ其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス ○第三十八條 第十二條第三項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス ○第三十九條 第十二條第四項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ陸海軍省ニ於テ之ヲ定ム ○第四十條 第十二條第五項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地平常ノ代價トス ○第四十一條 第十二條第六項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外左ノ區別ニ從フ ○一出船ノ定時アツテ定路ヲ航スルモノハ平常ノ定賃 ○二定路ヲ航スルモ特ニ出船時日ヲ命シタルトキハ其乘載量五分ノ三ニ滿テタル以上ハ前項ノ例ニ准ス若シ之ニ滿テ

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵發令

サルモ五分ノ三ニ値ル平常ノ定價 ○三出船及ヒ航路ノ定メナクシテ定賃ナキモノ又ハ運送ヲ以テ營業トセサルモノ等其賠償金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定額 ○第四十二條 第二十四條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者平常ノ給料航泊實費及ヒ船舶ノ損料トス其損料ハ一月ニ各船舶買入代價六十四分ノ一トス ○第四十三條 第二十六條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料船舶ニハ第四十二條ノ損料トス但船橋及ヒ舢舨ニ充テタルモノ、賠償金額ハ第四十一條第三項ニ准ス ○第四十四條 第十二條第七項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外平常ノ定賃トス ○第四十五條 第二十七條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料物件ニハ其地平常ノ代價若シハ損料トス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス ○第四十六條 第十二條第八項ノ徵發ニ係ルモノハ其植物ニ損害ヲ加ヘ又ハ地形ヲ變更シタルトキニ限り賠償ス其金額ハ評價委員ノ評定ニ任ス ○第四十七條 第十二條第九項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若シハ損料トス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス ○第四十八條 第十三條第一項第三項及ヒ第四項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若シハ損料ヲ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス ○第四十九條 第十三條第二項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス ○第五十條 第十三條第五項ノ徵發ニ係ルモノハ通常患者ノ例ニ從フテ賠償ス全ク明渡サシムルトキハ第三十九條ノ例ニ准ス ○第五十一條 第五十二條 第五十三條 同上

【本文ハ解釋ノ部ニアリ】

同上

○第三十一号布告 明治十六年八月八日 徵發令ニ依リ負擔ス可キ費用ノ怠納者ハ明治十年十一月十九號布告ニ依リ處分ス可シ但財産公賣ノ際買受望人ナキキハ徵發區ニ没入シ不足金アルトキハ其區ノ損失ニ歸ス 右費用ニ關スル處分ニ就キ不服アル者ハ明治十五年五月二十二号布告ニ依ル可シ 右奉 勅旨布告候事

○第二十六号布達 明治十五年十一月十八日 徵發事務條例別冊ノ通之ヲ定ム 右布達候事 徵發事務條例 ○第一條 徵發事務條例ハ徵發令ニ基キ實際取扱ノ規準ヲ定ムルモノトス ○第二條 陸軍若クハ海軍官憲ハ徵發區ノ大小遠近及ヒ供給力ヲ酌量シ供給ヲ受ク可キ日時ヲ豫定シテ徵發書ヲ出ス可シ ○第三條 徵發書ノ書式ハ附錄第一號ノ例ニ準ス但戰時若クハ事變ニ際シテハ電信ヲ以テ徵發スルコトヲ得 ○第四條 徵發令第三條第二項及ヒ第三項中ニ掲クル特命司令官軍團長師團長旅團長分遣隊長第三項中ニ掲クル特命司令官艦隊司令長官艦隊司令官分遣艦長ハ其獨立中ニ限り徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス故ニ師團長艦隊司令官ト雖モ軍隊若クハ二艦隊以上ニ編制セラレタルトキハ徵發書ヲ出スノ權ナシ其軍團長若クハ艦隊司令長官ノミ之ヲ有ス ○第六條 徵發令第三條第二項中ニ掲クル演習及ヒ行軍ノ軍隊長トハ諸團隊ヲ統フル長トハ先任艦長又ハ獨立艦長ヲ言フモノニシテ其長ノ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス但陸軍演習若クハ海軍操練ノ時一ノ

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵發令 八百九十五

總指揮官ヲ置クト雖モ其部下ノ團隊若クハ各艦往返發着ノ地ヲ異ニスルトキハ往返中ニ限リ其團隊長若クハ艦長各自ニ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス ○第七條 徵發ニ應シタル人員ハ勉メテ彈丸ノ達セサル場所ニ於テ之ヲ使用ス可シ ○第八條 徵發物件其徵發ヲ課セラレタル地ニ現在スルモ其所有者又ハ其支配人不在ナルトキハ戶長及ヒ証人二人 其町村內ニ住スル親族又ハ預リ長ノ選定立會ノ上其物件ヲ調査シ供給セシム可シ ○第九條 徵發ヲ課セラレタルモノハ徵發令第十二條第六項第七項第八項第十三條第一項中造船所工作所第四項第五項ノ物件及ヒ第二十條ノ場合ヲ除クノ外其現在ノ所有品ヲ供給セサルモ便宜ニ從ヒ他ノ同品種ノモノヲ以テ換給スルコトヲ得其徵發ニ應スベキ人員亦同シ ○第十條 徵發書ハ徵發令第六條ニ依リ府知事縣令郡區長戶長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ付スベシト雖モ臨戰若クハ合圍ノ地ニ在テ時機切迫シタル場合ニ於テハ府縣ニ付ス可キモノヲ郡區又ハ町村ニ付シ郡區ニ付ス可キモノヲ町村ニ付シ店長ニ付ス可キモノヲ船長ニ付スルコトアル可シ 右ノ手續ヲモ爲ス能ハサル場合ニ於テハ徵發書ヲ出スノ權アル官憲ヨリ直ニ人民ニ賦課シテ徵發スルコトアル可シ但此場合ニ於テハ徵發書ヲ用ヒス本人ニ受領證票ヲ交付スルニ止ル 本條ノ場合ニ於テハ徵發ヲ行ヒタル官憲定例ノ順序ニ從ヒ府知事縣令郡區長戶長若クハ店長ニ其旨ヲ通知ス可シ ○第十一條 徵發ノ命令ヲ受ケタルモノハ晝夜ヲ分クズ速ニ其處置ヲ爲ス可シ ○第十二條 徵發書ヲ受ケタル徵發區ニ於テ賦課ノ數ニ不足スルトキハ速ニ供給ヲ受ク可キ官憲ニ報告ス可シ 町村ニシテ郡區長ヨリ徵發ノ賦課ヲ受ケ郡區ニシテ府知事縣令ヨリ徵發ノ賦課ヲ受ケタルトキ其賦課ノ數ニ滿

ル能ハサルニ於テハ戶長ハ郡區長ニ郡區長ハ府知事縣令ニ速ニ其旨ヲ報告ス可シ但此場合ニ於テハ陸海軍官憲若クハ府縣廳郡區役所ヨリ吏員ヲ派出シ檢査セシムルコトアル可シ 郡區長府知事縣令其報告ヲ受ケタルトキハ郡區長ハ他ノ町村ニ府知事縣令ハ他ノ郡區ニ賦課シテ供給ヲ完全セシム可シ ○第十三條 府知事縣令徵發令第十二條第一項ニ係ル徵發書ヲ受ケタルトキハ速ニ其賦課シタル郡區ノ名及ヒ量數ヲ陸海軍管憲ニ報告ス可シ ○第十四條 府知事縣令郡區長及ヒ戶長ハ徵發令第八條ニ從ヒ徵發ニ應スル便宜ノ方法ヲ豫定ス可シ ○第十五條 徵發ヲ課セラレタルモノ供給ノ時機ニ違ヒタルトキハ徵發令第九條ニ照シ處分スヘシト雖モ正當ノ事由ヲ證明シタルトキハ辨償セシムルノ限ニアラス ○第十六條 徵發令第十一條ニ掲グル受領證票ハ附錄第二号離形ニ依リ調製ス可シ ○第十七條 受領證票ハ徵發令第十二條第一項第五項ノ物件及ヒ總テ買上ケニ屬スル物件ニ係ルトキハ領収ノ際直ニ之ヲ交付シ其他ハ徵發令後之ヲ交付ス可シ但徵發令後交付スル場合ニ於テハ同令第十二條第四項第七項第八項第十三條第一項中造船所工作所第四項及ヒ第五項ニ掲グルモノヲ除クノ外當初領收ノ際假受領證ヲ交付ス可シ ○第十八條 徵發令第十二條第二項第三項及ヒ第十三條第二項ニ掲グルモノヲ宿泊セシメテ連日使用シ若クハ六里以外ノ地ニ於テ使用スルトキ并ニ同令第十三條第六項ニ掲グルモノ 艀船及ヒ船ヲ借切トシテ徵發スルトキハ特ニ本人若クハ操業者ニ受領證票ヲ交付スルコトアル可シ ○第十九條 徵發令第十五日以上ニ及ラズモハ一個月ニ一回若クハ二回期ヲ定メテ受領證票ヲ交付ス可シ ○第二十條 徵發令第十三條第三項ニ掲グルモノハ徵發ヲ賦課スルハ其物

品ノ營業者ヲ先トシ尙完全セサルトキニ限リ他ノ人民ニ賦課ス可シ其賦課ニ就テハ其地方及ヒ所有者ヲシテ困乏ニ陥ラサラシムル爲メニ相當ノ分量ヲ各所有者ノ許ニ殘シ置ク可シ其分量ハ其地運送ノ便否及ヒ生計ノ現況ヲ酌量シテ之ヲ定ム可シト雖モ此ニ其最下限ヲ定ムルコト左ノ如シ 一營業者所有ノ物品ハ徵發書ノ日付ヨリ前十日間ニ其府縣内ニ賣拂ヒタル量但所有者ノ帳簿ニ基キ算定ス可シ 二他ノ人民所有ノ物品ハ其一家ニ要スル十日間ノ量 三秣藁ハ其家畜ニ要スル七日間ノ量 ○第二十一條 郡區長ハ附錄第三号雛形ニ依リ毎年一月一日調ヲ以テ徵發物件表ヲ製シ之ヲ府縣廳ニ差出シ府縣廳ハ其年三月三十一日限リ之ヲ陸軍省ニ送付ス可シ ○第二十二條 郡區長ハ徵發物件表ノ副本ヲ其役所ニ備ヘ戶長ハ町村ニ係ル書類ヲ其役場ニ備ヘ置キ物産ヲ除クノ外増減ヲ記シ供給ノ便宜ニ供ス可シ ○第二十三條 徵發物件表ハ左ノ諸項ニ照シ調製ス可シ 一馬匹車輛ハ其郡區内ニ於テ登時實用ヲ爲スモノ 二人夫ハ其郡區内ニ於テ負擔ニ係ル業跡ヲ爲スモノニシテ年齡十七歳ヨリ六十歳迄ノモノ 三廩園倉庫ハ貸廩貸庫ニ限ル 四職工ハ總數ヲ表中ニ掲ケ備考中ニ就キ其業跡ヲ分テ記ス可シ 五官廨社寺學校屠場水車場ノ坪數ハ調査ニ及ハス 六物産中米麥等ノ如キハ其高ヲ記ス可シ 七郵便局アル町村ニハ一其爲替局ハ◎電信分局ハ◎其線路ハ二鐵道ハ一ノ符号ヲ附ス可シ ○第二十四條 府知事縣令ハ郡區長ヨリ受ケタル徵發物件表ニ照シ附錄第四号雛形ニ依リ其管下ニ係ル徵發物件概覽表ヲ製シ各郡區徵發物件表ト共ニ陸軍省ニ送付スヘシ ○第二十五條 戶長ハ附錄第五号雛形ニ依リ毎年一月一日調ヲ以テ船舶表ヲ製シ郡區長ヲ經テ之ヲ府縣廳ニ差出シ府縣廳ハ其年三月三

十一日限リ之ヲ海軍省ニ送付ス可シ ○第二十六條 徵發令第十二條第三項第六項第七項ニ掲クルモノハ總テ使用ノ爲メニ必用ナル屬具ヲ併セテ供給ス可キモノトス故ニ其屬具ニ對スル賠償ヲ請求スルコトヲ得ス ○第二十七條 徵發令第十二條第六項ニ掲グル船舶中郵便船ニ限リ其通信ノ用ニ供スル間ハ之ヲ借切コトヲ得ス又出船ノ定期若クハ航路ヲ變シテ徵用スルコトヲ得ス ○第二十八條 徵發令第十八條中居住者ノ起臥ニ必用ナル場所トハ寢所及ヒ庖厨ヲ指シ營業ニ必要ナル場所トハ商估ノ店舖農工ノ仕事場ヲ云フ又旅店等トハ料理店貸座敷貸廩等ヲ包含ス ○第二十九條 宿舍ノ廣狹ハ徵發令第十九條ニ從ヒ臨時ニ定ムルモノナリト雖モ戶長ニ於テ賦課ノ際標準ト爲ス可キモノヲ概定スルコト左ノ如シ ○一廩署陸海軍官憲ヨリ指示スル所ノ室若クハ家屋○二將官其參謀部ト共ニ 一家屋○三上長官又ハ同等軍屬一名 一室○四士官又ハ同等軍屬二名 一室○五下士又ハ同等軍屬一名 一疊半乃至二疊○六卒又ハ同等軍屬一名 一疊乃至一疊半○七徵發ニ應シタル人員三名 二疊 ○第三十條 戶長ハ陸海軍ノ宿衛主任官ニ商議シテ適宜宿舍ノ配當ヲ定ム可シ ○第三十一條 徵發令第二十一條ニ從ヒ町村ノ便宜ヲ以テ他ニ轉移セシムルコトヲ許サスト雖モ若シ該家ニ病者死者等アルトキハ戶長他ニ相當ノ宿舍ヲ設ケテ轉移ヲ請求スルコトヲ得但之カ爲メ徵發令第二十二條ニ掲グル日限ヲ更新スルモノニアラス ○第三十二條 徵發令第二十二條ニ從ヒ人馬ニ供給ス可キ食飼ノ定量大率左ノ如シト雖モ陸海軍給與ノ規則ニ由リ定量以內ヲ以テ臨時ニ變換或ハ減少スルコトアル可シ ○一人 精米每食二合 朝夕飯一汁一菜漬物 午飯一菜漬物○二馬 駐軍中 朝大麥二升秣藁五百

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵發令

目喰藁百五十目 晝秣藁五百目 喰藁百五十目 夕大麥二升 秣藁五百目 喰藁二百目 演習及ヒ行軍中 朝大麥二升 秣藁五百目 晝大麥一升 夕大麥二升 秣藁一貫目 喰藁五百目 小麥大麥ニ喰藁ヲ秣藁ニ代用スルトキ 朝小麥一升 喰藁一貫目 晝小麥五合 夕小麥一升 五合 喰藁二貫目 搗麥又ハ裸麥ヲ大麥ニ喰藁ヲ秣藁ニ代用スルトキ 朝搗麥又ハ裸麥一升 喰藁一貫目 晝搗麥又ハ裸麥一升 夕搗麥又ハ裸麥二升 喰藁一貫目 寢藁ハ軍馬一頭ニ付一日一貫目ヲ要スルモノトス ○第三十三條 宿舍ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ室内所要ノ燈火並ニ其地ノ慣用ニ從ヒ地爐若クハ火鉢薪炭ニ毎室ニ一個ヲ給ス可シ其賠償ハ宿舍ノ賠償金額中ニ包含ス ○第三十四條 寢具ノ徵發ニ係ル賠償ハ宿舍ノ賠償金額中ニ包含セズ徵發令第四十八條ニ從ヒ賠償ス ○第三十五條 宿舍ノ徵發ヲ課セラレタルモノ公有家屋社寺亦同シ 食飼ニ供スヘキ物品又ハ手傳人不足シ供給ヲ爲シ能ハサルノ證アルトキハ戶長ニ於テ賄ノ受負ヲ立ツル歟若クハ物品及ヒ手傳人ヲ其本人ニ供スル等ノ取扱ヲ爲シ其方法ハ本條例第十四條ニ准ス可シ ○第三十六條 町村ヨリ供給スル所ノ船舶ニシテ其乘載人馬ニ要スル食飼ノ物品不足スルトキハ戶長ニ於テ其物品ヲ供ス可シ但航海先ニ於テハ本條例第三十七條ニ准シテ處分ス可シ ○第三十七條 會社ヨリ供給スル所ノ船舶ニシテ其乘載人馬ノ食飼ヲ供給スルコト能ハサルヲ證明スルトキハ現品ヲ官給シ其費用ハ賠償金ヲ以テ差引ヲ立ツ可シ ○第三十八條 食飼ノ定賃ナキ船舶ヲ徵用シ船主船長ヲシテ其食飼ヲ供給セシムルトキハ陸海軍官憲ニ於テ其時々賠償金額ヲ定ム可シ其借切トシテ徵用シタルトキ亦同シ ○第三十九條 徵發物件ノ差出場合各徵發區内ニ設ケル決定例トス但府

縣ヲ以テ徵發區ト爲スモノ、差出場所ハ賦課セラレタル郡區ニ一個所若クハ二個所ヲ設ク可シ 差出場所ハ陸海軍官憲之ヲ指定ス ○第四十條 徵發區ハ徵發令第三十條ニ從ヒ徵發物件ヲ差出場所ニ輸送スルノ義務アルヲ以テ之ヲ爲メニ生シタル費用ハ其區ノ負擔トス可キモノトス ○第四十一條 郡區長ハ徵發人馬ノ供給ヲ便宜ニセシムルカ爲メ豫テ隣郡區長ト商議シ近傍町村ヲ適宜ニ割合ヒ組合町村ヲ定ムルヲ得 ○第四十二條 賠償金請求ノ月日及ヒ場所ハ供給ヲ受ケシ陸海軍官憲ヨリ之ヲ其府知事縣令郡區長戶長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ指示ス可シ ○第四十三條 府知事縣令郡區長戶長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ハ附錄第六號ノ例ニ准シ賠償金計算書ヲ調製シ陸海軍官憲ヨリ交付ノ受領証票ヲ添ヘ其請求ヲ爲ス可シ但徵發令第三十六條及ヒ第三十八條ニ掲グルモノアルトキハ其計算書ニ別項ヲ設ケテ差引ヲ立ツ可シ又評價ニ屬スル物件ノ賠償ハ別途ニ支給スルヲ以テ該物件ニ就テハ評價ノ二字ヲ記載ス可シ ○第四十四條 徵發令第三十一條ニ定ムル三個月ノ期限ハ受領証票ヲ交付シタル月ヨリ起算ス但陸海軍官憲ヨリ指示セシ請求ノ月日若クハ場所ヲ其請求者ニ於テ誤リタル爲メ又ハ賠償金計算書ノ違算若クハ不合式ニ依リ推問往復ノ爲メニ消費シタル時日ハ算入セズ ○第四十五條 徵發令第十二條第二項及ヒ第三項ノ徵發ニ係ルモノヲ終日若クハ連日使用スルトキ及ヒ六里以外ノ地ニ使用スルトキハ日割ヲ以テ賠償シ其他ノ場合ニ於テハ里程ニ應シテ賠償ス 若シ差出場所ニ集合シタルモノ官ノ都合ニテ不用トナラザルトキハ日割ヲ以テ賠償ス可キモノハ半日分ヲ給シ里程ニ應シテ賠償ス可キモノハ其半額ヲ給ス ○第四十六條 徵發物件ノ毀損シタルトキハ徵

發令第二十三條ニ從ヒ其使用ヲ主管スル陸海軍官憲ニ届出可シ若シ引渡ヲ受ケタル後毀損ヲ發見セシトキハ其引渡ヲ爲セシ陸海軍官憲ニ届出可シ其官憲既ニ出發セシトキハ戶長ニ届出可キモノトス ○第四十七條 毀損ノ届出ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ直ニ之ヲ調査シ其毀損果シテ使用ヨリ生シタルモノト檢定シタルトキハ其賠償金額ニ就キ供給者ト商議ス可シ若シ調和セサルトキハ評價委員ニ付ス可シ 戶長若シ毀損ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ之ヲ檢査シ其調査書ヲ供給者ノ請求金額ア 其關係ノ陸海軍官憲ニ差出ス可シ但調査書ニハ毀損ノ事由實況并ニ請求金額ニ係ル自己ノ意見ヲ記ス可シ ○第四十八條 徵發令第三十三條ニ掲クル期日ヲ超エタル届出ハ之ヲ受理ス可カラズ但變災厄難ニ罹リタルノ確證アルモノハ其變災厄難ヲ免レタル時ヨリ期日ヲ算ス可シ ○第四十九條 徵發令第三十四條ニ從ヒ府知事縣令ハ其管下市場三ヶ所以上ノ前三年間ノ平均價表ヲ第七號離形ニ依リ調製シ毎年三月三十一日限リ陸軍省ニ差出スヘシ ○第五十條 徵發令第三十五條中平常ノ賃價トアルハ戰時若シハ事變ニ際シテハ勿論演習又ハ行軍ノ際ニ於テモ之カ爲メ臨時ニ騰貴セサル以前ノ賃價ヲ言フ 徵發令中平常ノ賃價トアルモノハ皆此例ニ依ル ○第五十一條 徵發令第三十五條及第三十八條ニ掲クル平常ノ賃價借賃ハ郡區長確認ノ上供給ヲ受ケル所ノ陸海軍官憲ニ申出可シ 其他徵發令中ニ掲クル平常ノ賃價損料及ヒ代價ハ戶長ヨリ陸海軍官憲ニ申出可シ ○第五十二條 徵發令第三十九條ニ從ヒ陸海軍省ニ於テ定ム可キ所ノ賠償金ハ兩省同額タルヘシト雖モ本條例第三十二條ニ從ヒ臨時ニ食飼ノ定量ヲ變換若クハ減少スルニ於テハ其現量ニ從ヒ賠償ス可シ ○第五十三條 徵發

令第四十二條中航海實費トハ石炭油脂其他日用消耗品ノ航泊中現ニ消耗シタルモノノ代價ニシテ其物品ヲ船舶ニ積入レタルトキノ現價ニ依リ計算スヘキモノトス ○第五十四條 徵發物件ノ毀損其使用ノ爲メニ非サルモノ及ヒ操業者ノ過失ニ出ルモノハ賠償セズ但船舶ヲ借切トシテ徵用シタルトキ並ニ物件ヲ操業者ト分別シテ徵用シタルトキノ毀損ハ總テ之ヲ賠償ス ○第五十五條 評價委員ハ陸軍若クハ海軍官憲二名徵發區ニ從ヒ府縣郡區吏員若クハ戶長一名及ヒ其町村若シ熱達シタルモノノナキトキハ他四名ヲ以テ編制シ其評價ハ多數ニ依テ決ス 鐵道會社船舶會社ニ屬スルモノ及ヒ大演習ノ爲メニ生シタル地所ノ損害ニ係ル評價委員ハ陸軍若クハ海軍官憲二名府縣吏員一名及ヒ其事件ニ熟達シタル人民二名若クハ四名ヲ以テ編制ス ○第五十六條 評價委員ニ撰用スヘキ人民ハ其事件ニ關係ナキモノニシテ地方吏員若クハ戶長ニ於テ撰擧ス可キモノトス 其撰擧セラレタルモノハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルヲ得ス ○第五十七條 其撰擧セラレタルモノニハ陸軍若クハ海軍ヨリ該府縣會議員ト同一ノ旅費日當ヲ給ス可シ ○第五十八條 評價ノ爲メ府縣郡區吏員若クハ戶長ノ派出ヲ要スルトキハ其事件ニ關係ノ陸海軍官憲ヨリ之ヲ府知事縣令郡區長若クハ戶長ニ通達ス可シ ○第五十九條 評價ノ方法ハ評價ス可キモノノ種類ニ從ヒ精密ニ調査シ其價額ヲ評定スルヲ要トス左ニ地所損害ニ關スル評價ノ一例ヲ掲ク 演習ノ爲メ地所ノ損害ヲ届出タルトキハ評價委員ニ於テ實況ヲ查察シ其請求スル所ノ賠償金額ノ當否ヲ審ニシ相當ナルトキハ直ニ之ヲ認可シ若シ其請求ノ金額定マラス或ハ過當ナリト認ムルトキハ實測スヘ

シ 評價委員ハ評價畢ルノ後左ニ掲ケル要目ニ准シ所有主毎ニ評價明細書ヲ製ス可シ○一評價ノ事項及ヒ事由○二委員ノ氏名○三地面ノ廣袤ハ何ヲ以テ定メタルヤル歟及ハ實測シタル歟金額ノ算出ハ如何ナル方法ニ依リタルヤ其季ノ收穫皆無タルニ依リ其植物ノ前何年平均ヲ以テ賠償金額ヲ全部收穫ノ前何年平均額ヨリ算出シタルカ植物生熟ノ度ニ從ヒ其平均收穫量ニ應シ賠償ス可キ金額中ヨリ幾分ノ手間賃及ヒ肥料ヲ扣除シタルカ又永存ノ草木ニシテ毎年收穫アルモノ損害ヲ受ケタルトキハ其損害ノ収實ニ止マルト枝幹ニ係ルモノト ○第六十條 評價委員ニ從ヒ一年若クハ幾年分ノ收穫ヲ見込ニ賠償金額ヲ定メタル歟ノ類 ○第六十條 評價委員ハ評價明細書ヲ製シ府知事縣令郡區長若クハ戸長ニ交付ス可シ府知事縣令郡區長若クハ戸長ハ其明細書ニ依リ賠償金計算書ヲ作り陸海軍官憲ノ指示スル場所ニ就テ賠償金額ヲ請求ス可シ

附錄書

第三十六号布告

明治十五年八月五日

戒嚴令別冊ノ通制定ス 右奉 勅旨布告候事

戒嚴令

○第一條 戒嚴令ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ全國若クハ一地方ヲ警戒スルノ法トス
 ○第二條 戒嚴ハ臨戰地境ト合圍地境トノ二種ニ分ツ ○第一 臨戰地境ハ戰時若クハ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シテ臨戰ノ區域ト爲スモノナリ ○第二 合圍地境ハ敵ノ合圍若クハ攻撃其他ノ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シテ合圍ノ區域ト爲ス者ナリ ○第三條 戒嚴ハ時機ニ應シ其要ス可キ地境ヲ區畫シテ之ヲ布告ス ○第四條 戰時ニ際シ鎮臺營所要塞海軍港鎮守府海軍造船所等遽カニ合圍若クハ攻撃ヲ受ズル時ハ其地ノ司令官臨時戒嚴ヲ宣告スルコトヲ得

又戰略上臨機ノ處分ヲ要スル時ハ出征ノ司令官之ヲ宣告スルコトヲ得 ○第五條 平時土寇ヲ鎮定スル爲メ臨時戒嚴ヲ要スル場合ニ於テハ其地ノ司令官速ニ上奏シテ命ヲ請フヘシ若シ時機切迫シテ通信斷絶シ命ヲ請フノ道ナキ時ハ直ニ戒嚴ヲ宣告スルコトヲ得 ○第六條 軍團長師團長旅團長鎮臺營所要塞司令官或ハ艦隊司令官艦隊司令官鎮守府長官若クハ特命司令官ハ戒嚴ヲ宣告シ得ルノ權アル司令官トス ○第七條 戒嚴ノ宣告ヲ爲シタル時ハ直ニ其狀勢及ヒ事由ヲ具シテ之ヲ太政官ニ上申ス可シ 但其隸屬ホル所ノ長官ニハ別ニ之ヲ具申ス可シ ○第八條 戒嚴ノ宣告ハ曩ニ布告シタル所ノ臨戰若クハ合圍地境ノ區畫ヲ改定スルコトヲ得 ○第九條 臨戰地境内ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ ○第十條 合圍地境内ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ハ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アルトキハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ ○第十一條 合圍地境内ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ヒ左ニ開列スル犯罪ニ係ル者ハ總テ軍衙ニ於テ裁判ス ○第十二編 ○第一章 皇室ニ對スル罪 ○第二章 國事ニ關スル罪 ○第三章 靜謐ヲ害スル罪 ○第四章 信用ヲ害スル罪 ○第九章 官吏瀆職ノ罪 ○第三編 ○第一章 ○第一節 謀殺故殺ノ罪 ○第二節 歐打創傷ノ罪 ○第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪 ○第七節 脅迫ノ罪 ○第二章 ○第二節 強盜ノ罪 ○第七節 放火失火ノ罪 ○第八節 決水ノ罪 ○第九節

第三編 公益ニ關スル罰則 ○徵發令

船舶ヲ覆没スル罪 ○第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪 ○第十二條 合圍地境内ニ裁判所ナク又其管轄裁判所ト通路斷絶セシ時ハ民事刑事ノ別ナク總テ軍衛ノ裁判ニ屬ス ○第十三條 合圍地境内ニ於ケル軍衛ノ裁判ニ對シテハ控訴上告ヲ爲スヲ得ス ○第十四條 戒嚴地境内ニ於テハ司令官左ニ記列ノ諸件ヲ執行スルノ權ヲ有ス但共執行ヨリ生スル損害ハ要償スルヲ得ス ○第一 集會若クハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ妨害アリト認ムル者ヲ停止スル ○第二 軍需ニ供ス可キ民有ノ諸物品ヲ調査シ又ハ時機ニ依リ其輸出ヲ禁止スル ○第三 銃砲彈藥兵器其他危險ニ該ル諸物品ヲ所有スル者アル時ハ之ヲ檢査シ時機ニ依リ押収スル ○第四 郵便電報ヲ開緘シ出入ノ船舶及ヒ諸物品ヲ檢査シ並ニ陸海通路ヲ停止スル ○第五 戰狀ニ依リ止ムヲ得サル場合ニ於テハ人民ノ動産不動産ヲ破壞燬燒スル ○第六 合圍地境内ニ於テハ晝夜ノ別ナク人民ノ家屋建造物船舶中ニ立入り檢査スル ○第七 合圍地境内ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ其地ヲ退去セシムル ○第十五條 戒嚴ハ平定ノ後ト雖モ解止ノ布告若クハ宣告ヲ受クル日迄ハ其効力ヲ有スルモノトス ○第十六條 戒嚴解止ノ日ヨリ地方行政事務司法事務及ヒ裁判權ハ總テ其常例ニ復ス

○第三十七號布告 明治十五年八月五日
凡ソ法律規則中戰時ト稱スルハ外患又ハ内亂アルニ際シ布告ヲ以テ定ムルモノトス
右奉 勅旨布告候事

○請願規則

第一條 人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願セントスル者ハ左ノ條規ニ依ルベシ

第二條 郡區長及戶長職務内ノ事件ハ郡區長戶長ニ請願スベシ郡區長戶長ノ指令ニ服セサル者ハ府知事縣令ニ請願シ府知事縣令ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スルヲ得一府知事縣令警視總監職務内ノ事件ハ府知事縣令

第三十章 請願規則

明治十五年十二月十二日 第五十八號布告撮錄

請願規則左ノ通制定ス

右奉 救旨布告候事

第一節 受理セラレサル請願ヲ強テ受理ヲ請フ

第十七條 條規ニ違ヒ受理セラレサルノ請願ヲ以テ強テ受理ヲ請フ者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス其連名請願スル者ハ情ヲ知ラサル者ヲ除クノ外各人均シク罪ヲ論ス其發起人ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス若シ請願人ノ外教唆者アルトキハ發起人ト同シク罪ヲ論ス

其嘯聚ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

一 本條ノ解附タリ 教唆者ト犯罪ノ意見ヲ陳ル者トノ區別

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○請願規則

九百七

警視總監ニ請願スベシ
 府知事縣令警視總監ノ
 指令ニ服セサル者ハ主
 務卿ニ請願シ主務卿ノ
 指令ニ服セサル者ハ太
 政官ニ請願スルコトヲ得
 各省卿職務内ノ事件ハ
 其卿ニ請願スヘシ其指
 令ニ服セサル者ハ太政
 官ニ請願スルコトヲ得
 第三條 凡ソ請願スル
 者ハ書面ヲ以テスヘシ
 口陳スルコトヲ許サス
 官署ノ求メニ應シテ開
 陳スルハ此限ニ在ラス
 第四條 請願者ハ請願
 人自ラ署名捺印シ族籍

二 太政官ノ裁令ヲ經タルモノハ裁判所へ訴出ルコトヲ得ストモハ
 各省卿ノ指令ニ服セサルモノハ如何○嘯聚ニ涉ルモノハ刑法
 ノ第何條ニ依リテ處斷スヘキヤ
 (一)○本條ハ受理セラレサル請願書ヲ強テ受理ヲ請フ者ノ制裁ヲ規定
 ナル者ナリ夫レ請願ヲ爲スノ權ハ人民固有ノ權利ニシテ法律アリテ
 而シテ後始メテ定マルモノニ非ス何人ト雖モ自己ノ意見ヲ以テ請願ヲ
 爲サント欲セハ隨意ニ之ヲ爲スコトヲ得ベシト雖モ然レトモ其請願ヲ
 爲スノ順序手續ニ至リテハ必ス法律ノ命スル所ニ從ハサルヘカラス
 ルナリ然ルニ急驟過激以テ法律ノ命スル所ニ從ハス爲メニ社會ノ秩
 序安寧ヲ妨害スル者アルニ當リテハ之ヲ必罰シテ以テ秩序安寧ヲ保
 維シ併セテ他ノ之ニ倣ハントスル者ヲ警戒セサルヘカラス是レ請願
 規則ノ設ケアル所以ナリ
 右ノ如キ理由ナルヲ以テ其請願ノ條規ニ違フヲ以テ受理セラレサル

住所ヲ記シ戶長ニ請願
 スル者ヲ除ク外住所戶
 長ノ與印ヲ受クヘシ其
 連名ヲ以テ請願スル者
 ハ各人自ラ署名捺印シ
 族籍住所ヲ記シ其總代
 又ハ請願發起人アルト
 キハ其由ヲ肩書スヘシ
 戶長ノ與印ヲ受ルハ前
 ノ例ニ同シ
 第五條 府縣郡區總代
 又ハ結社總代ノ名ヲ以
 テ請願スルコトヲ得ス但
 成法ニ制定セラレタル
 會社ハ此限ニアラス
 第六條 請願書ヲ上呈
 スルニハ代人ヲ以テス

ニモ拘ハラス強テ其受理ヲ請フ者ハ上公權ヲ濫如シ法律ヲ犯シ下國
 民ノ大義ヲ知ラサル者ナレハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處セラ
 ル、ナリ又其請願書ニ連名請願スル者ハ強テ請願スルノ情ヲ知ラサ
 ル者ハ其罪ヲ問ハスト雖モ強テ請願スルノ情ヲ知リナカラ連名シタ
 ル者ハ皆同様十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處セラル、ナリ又其請
 願ノ發起ヲ爲シタル者ハ之ニ雷同附從シタル者ニ比スレハ其情大ニ
 惡ムベキモノアルヲ以テ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處セラル、ナ
 リ若シ請願人ノ外ニ強テ請願スベキコトヲ教唆シタル者アルトキハ其
 教唆者ハ發起人ト同シク一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處セラル、ナ
 リ其請願ヲ爲スカ爲メニ兇徒ヲ嘯聚シタル者ハ本則ニ依ラス刑法ニ
 依テ處斷セラル、ナリ
 ○茲ニ注意ヲ要セサルヘカラス所ノモノアリ教唆者ト犯罪ノ意見
 ○陳ル者トノ區別是レナリ夫レ教唆トハ教唆者自ツカラ罪ヲ犯スノ

ルコトヲ許サズ數人連名スル者ハ請願人中ニ於テ三名以下ノ總代ヲ撰ビ之ニ委托スヘシ

第七條 請願書ハ郵便ヲ以テ上呈スルヲ得

第八條 上司ニ呈スル請願書ニハ其經歷スル所ノ官署ノ指令書ヲ添フヘシ

第九條 請願書ノ郵達ヲ得タル各省若シ其主務ニ非サルトキハ直チニ之ヲ主務省ニ移シ其由ヲ請願人ニ通知スヘシ

第十條 太政官ニ於テ

意思ヲ包藏シ自カラ其罪ノ施行ニ着手セスシテ人ヲシテ之ヲ犯サシムル者ヲ云フ故ニ刑法ニ於テモ教唆者ヲ正犯ノ一トナシ同一ノ刑ニ處スベシト定メタリト雖モ若シ自カラ罪ヲ犯スノ意ナク當ニ犯罪ニ付テノ意見ヲ陳フルニ止ルトキハ決シテ之ヲ罰スルヲ得サルナリ例ヘハ人アリ自ツカラ某ノ所有物ヲ竊取セント欲スルモ他日發覺セシトナシ恐レ貧人ヲ教唆シテ之ヲ竊取セシメ以テ其財ヲ分ナタルカ如キ場合ニ於テハ充分ニ教唆者ヲ以テ罰スルヲ得ベシト雖モ若シ己レ自カラ罪ヲ犯スノ意ナク貧人ニ向テ其貧ニ安センヨリハ何ソ他人ノ物ヲ竊ンテ以テ當貴ヲ謀ラサルヤト云ヒタルカ如キハ是レ自カラ罪ヲ犯スノ意ナク唯犯罪ノ意見ヲ陳フルニ止ルヲ以テ其者之カ爲メニ盜ヲ犯スコトアルモ決シテ其意見ヲ陳ヘタル者ヲ罰スヘキモノニ非スト

(二)或問テ曰ク本則第十二條ニ太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ裁判所

請願ヲ裁可スルトキハ主務省ニ付シテ處分セシムヘシ

第十一條 太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ更ニ請願スルコトヲ得ス又裁判所ニ訴フルコトヲ得ス

第十二條 請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 凡ソ事ノ建白ニ屬スヘキ者ハ人民各自ノ利害ニ係ルヲ以テ請願スト雖モ受理セ

第十四條 行政處分ノ

訴出ルコトヲ得ストアリ然ラハ各省卿ノ指令ニ服セサルモノハ裁判所ヘ訴フルコトヲ得ルヤ曰ク然リ夫レ太政官ハ政令ノ出ル所樞機ノ決スル所ニシテ實ニ諸官衙ノ上ニ權力ヲ占ムル所ノモノナレハ其裁令ニ服セスシテ裁判所ニ訴ヘ裁判所ハ之ニ向テ裁判ヲ與フルトキハ宛カモ太政官ノ裁令ノ當否ヲ裁判スル者ニシテ其極ヤ遂ニ司法權ハ行政權ヲ犯スニ至ルヲ以テ之ヲ禁シタル者ナリト雖モ他ノ省卿ノ指令ニ服セサルモノ、如キハ之ニ異ナリ且ツ法文ニモ特ニ太政官トアル以上ハ他ノ指令ニ服セサル者ハ裁判所ニ出訴スルモ決シテ法律ノ禁スル所ニアラサルナリ

○或問テ曰ク本條ニ其囂聚ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處斷ストアリ右ハ刑法第何條ヲ適用スヘキヤ曰ク此場合ニ於テハ刑法第百三十六條以下ヲ適用スヘキモノナリ

第二節 請願入官吏ニ抗論スル者

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○請願規則

既ニ五年ヲ經タル者ハ
 請願ヲ受理セス
 第十五條 請願人第二
 條ノ順序ヲ經ス及第三
 條第四條第五條第六條
 第八條第十一條ノ規程
 ニ循ハサル者ハ受理セ
 ス
 第十六條 請願書ニ侮
 辱誹毀ノ語ヲ用ヒ及第
 二條ニ示ス所ノ官署ノ
 外ニ向ヒ請願スル者ハ
 受理セス
 第十七條 〔本文ハ下
 段ニアリ〕
 第十八條 〔同上〕
 第十九條 〔同上〕
 第二十條 〔同上〕

第十八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ涉ル者八十
 一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス
 其侮辱ニ涉ル者ニ刑法ニ依テ處分ス
 一 本條ノ解○侮辱ニ涉ルモノハ刑法第何條ニヨリテ罰スヘキヤ
 二 刑法第百四十一條ノ罪ヲ組成セシムルニハ必ス直接ニ官吏ノ職務
 ニ對シ侮辱スルコトヲ必要トスル乎
 ○本條ハ請願人官吏ニ抗論シテ喧擾ニ涉ル者ノ制裁ヲ定ムル者ニシ
 テ即チ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處セラルヘキモノナリ夫レ請
 願人タル者ハ官吏ニ對シ其請願書ノ事理ヲ陳述スルニ止マリ決シテ
 官吏ニ抗論シテ喧擾スルコトヲ許サハル者ナリ苟クモ官吏ニ對シ斯ク
 ノ如キ所爲ヲ爲スモノハ實ニ公權ヲ蔑如スル者ナレハ本條之ヲ罰ス
 ル者ナリ然レトモ官吏ニ抗論スルモノハ直チニ之ヲ罰スト云フニ非
 ス其喧擾ニ涉ル者ニ限リテ之ヲ罰スル者ト定メテラタルナリ故ニ官

○内務省甲第二号告示

明治十六年
 一月十七日
 明治十五年十二月
 第十八號布告ニ據リ請願
 スル書面ハ美濃紙ヲ用
 ヒ正副二通宛差出スヘ
 キモノトス但シ書面ヲ
 却下スル場合ト雖副書
 ハ留置クコアルヘシ此
 旨告示候事

吏ト其意見ヲ異ニスルニヨリ己ムヲ得ス其請願ノ事由ヲ徹底セシメ
 シカ爲メ靜穩ニ論辨スルカ如キハ完ク本條ノ限外ニ屬シ法律ノ禁ス
 ル所ニアラサルナリ
 ○或問テ曰ク本條ニ其侮辱ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處斷ストアリ然ラ
 ハ刑法第何條ヲ適用スヘキヤ曰ク刑法ノ正條左ノ如シ
 刑法第百四十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言
 語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以
 上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖畫又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シ
 タル者亦同シ
 右ノ如クナルカ故ニ官吏ヲ侮辱シタル者ハ刑法第百四十一條ニ依リ
 テ處斷セラル、者トス然レトモ茲ニ注意ヲ要セサルヘカラサルモノ
 アリ凡ソ此刑法第百四十一條第一項ノ罪ヲ形成セシムルニハ必ス三ヶノ

條件備具スルヲ要ス第一侮辱ヲ受ケタル者官吏ナルコト第二官吏ノ職務ニ對シ侮辱シタルコト第三官吏ノ目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テシタルコト是レナリ若シ右三箇ノ條件中僅カニ一ヲ欠クモ決シテ此條ノ罪ヲ形成セサル者ナリ

(二)○或問テ曰ク刑法第百四十一條ノ罪ヲ組成センニハ必ス直接ニ官吏ノ職務ニ對シ侮辱スルコトヲ必要トスル乎曰ク否直接ニ官吏ノ職務ニ對シ侮辱スルニ止マラス又其職務ヲ行フ目前ニ於テ之ヲ侮辱シタルトキハ其侮辱ハ直接ニ職務ニ關係セスト雖モ仍ホ之ヲ罰スベキモノト信スルナリ何トナレハ凡ソ本條ノ罪ハ公權ヲ蔑如スルニ因テ成立スル所ノモノナレハ公權ノ代人タル官吏ヲ侮辱スルハ取リモ直サス公權ヲ蔑如スルニ同シケレハナリ又刑法第百四十一條第二項ハ官吏ノ目前ニ非スト雖モ文書圖書又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者ノ罪ヲ定ムル者ナリト雖モ是レハ多ク本條ノ關係ヲ有セザルヲ以テ

其解釋ヲ下サズ併シ茲ニ少シク注意ヲ要スヘキモノアリ第一項ハ官吏ノ目前ニ於テ之ヲ爲スモノナレハ事其職務ニ直接ノ關係ヲ有セスト雖モ仍ホ之ヲ罰スヘキモノナリト雖モ第二項ハ之ニ反シ完ク官吏ノ職務ニ對スルコトヲ必要トス何トナレハ官吏ト雖モ其職務ヲ行ハサルトキハ矢張り一己ノ人民タルニ過キサレハ之ヲ侮辱シタルトテ公權ヲ蔑如シタルト謂フヲ得サレハナリ

第三節 請願書ハ公行ヲ禁ス

第十九條 請願書ハ新聞紙其他ノ文書ヲ以テ公行スル

コトヲ許サズ犯スモノハ罪前條第一項ニ同シ

○本條ハ請願書ヲ公行シタルモノ、制裁ヲ定ムルモノナリ凡請願書ハ其事件ノ如何ナルヲ問ハス新聞紙其他ノ文書ヲ以テ世間ニ公ケニスルコトヲ許サ、ル者ナリ若シ之ヲ犯シテ公行シタル者ハ第十八條第一項ニヨリテ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處セラルヘキナリ

第四節 請願ニヨリテ人ヲ誣告ス

第二十條 請願ニ依リ人ヲ誣告スル者ハ刑法ニ依テ處分ス

○本條ハ請願ニ依リテ人ヲ誣告シタル者ハ刑法ニ依リテ處斷スベキ旨ヲ定ムルモノニシテ其刑法ノ正條ハ左ノ如シ

刑法第三百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二十條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

凡ソ誣告罪ヲ組成セシムルニハ其申立ツルコトノ無實タルコトヲ要スルノミナラス自ツカラ其無實タルコトヲ知リナカラ之ヲ爲スヲ要ス夫レ斯クノ如ク其人ヲ陷害シテ以テ自己ノ怨恨若クハ嫉妬ノ惡念ヲ散セシメ若クハ自己ノ私慾ヲ達セント謀ル者ハ其情大ニ惡ムヘキモノナレハ之ヲ偽證ノ例ニ照シテ處斷スル者ナリ然レトモ自ツカラ其事實アリト信シテ而シテ之ヲ行フタルモノナラシメハ是レ罪トナルベキ事實ヲ

知ラス又罪ヲ犯スノ意ナキノ所爲ナレハ決シテ誣告罪トシテ論スルコトヲ得サルナリ

刑法第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

- 一 重罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 二 輕罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 三 違警罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

右ノ如ク犯人ノ其人ヲ陷レントスル罪ノ輕重ニ從テ刑ノ區別ヲ設ケタリ是レ其犯人ノ目的ノ大小ニ從テ社會ノ公害モ亦大小ノ別アルヲ以テナリ故ニ請願人人ヲ重罪ニ陷ラシムヘキ誣告ヲ爲シタルトキハ

刑法第二百二十條ノ第一項ニヨリテ處斷シ輕罪ニ陷ラシムヘキ証告
ヲ爲シタルトキハ第二項ニヨリテ處斷シ違警罪ニ陷ラシムヘキ証告
ヲ爲シタルトキハ第三項ニヨリテ處斷スヘキナリ

○司法省第廿二号布達

〔明治五年〕
十月九日

本月二日太政官第二百
九十五号ニ而被仰出候
次第ニ付左ノ件々可必
得事

- 一 人身ヲ賣買スルハ
古來ノ制禁ノ處年期奉
公等種々ノ名目ヲ以テ
其實賣買同様ノ所業ニ
至ルニ付娼妓藝妓等雇
入ノ資本金ハ賍金ト看
做故ニ右ヨリ苦情ヲ唱
フル者ハ取擧事
ノ全額ヲ可取揚事
一 同上ノ娼妓藝妓ハ
人身ノ權利ヲ失フ者ニ

第三十一章 人權

第一款

人身賣買ノ禁

明治五年十月二日第二
百九十五號布告撮錄

一人身ヲ賣買致シ終身又ハ年期ヲ限リ其主人ノ存意ニ
任セ虐使致候ハ人倫ニ背キ在マシキ事ニ付古來禁制ノ
處從來年季奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公住爲致其實賣
買同様ノ所業ニ至リ以テノ外ノコニ付自今可爲嚴禁事

○凡ソ人ノ始メテ生ル、ヤ天必ス之ニ賦與スルニ同等ノ權利ヲ以テ
セサルハ莫シ然ルニ人身ヲ物品ト同一視シテ以テ之ヲ賣買スルカ如
キハ實ニ野蠻蒙昧ノ陋習ニシテ獨リ倫理ヲ傷フノミナラス皇天上帝
ノ命スル所ニ背クモノナレハ法律ヲ以テ堅ク之ヲ禁遏シ社會ニ此陋
習ヲ絶クシメサルヘカラス是レ之ヲ禁スル所以ナリ然リト雖モ社會
ノ廣キ人民ノ多キ必ス其間ニ分業法ノ行ハル、アリテ或ハ勞働ニ衣
食スルモノアリ或ハ心思ヲ勞スルモノアリテ人々其職業ヲ異ニスル

第三編 公益ニ關スル罰則 ○人權

テ牛馬ニ異ナラス人ヨ
リ牛馬ニ物ノ返辨ヲ求
ムルノ理ナシ故ニ從來
同上ノ娼妓藝妓ハ借ス
所ノ金銀並ニ賣掛滯金
等ハ一切償ルヘカラサ
ル事

但本月二日以来ノ分
ハ此限ニアラス
一人ノ子女ヲ金談上
ヨリ養女ノ名目ニ爲シ
娼妓藝妓ノ所業ヲナサ
シムルモノハ其實際上
則チ人身賣買ニ付従前
今後可及嚴重ノ處置事

モノナレハ其備償ヲ出シテ以テ人ヲ勞役スルカ如キハ是レ決シテ人
身ヲ賣買スルモノニアラス其勞役ヲ賣買スルモノナレハ決シテ法律
ノ禁セサルノミナラス社會經濟ノ道ニ於テ最モ欠クベカラサル所ノ
モノナリ故ニ其備償ヲ受ケテ自由ニ勞役ヲ賣ル所ノモノハ亦自由ニ
之ヲ辭スルヲ忘レサルヘキナリ若シ夫レ然ラスシテ傭人ノ自由ヲ
束縛シ其好マサルニ強テ勞役ヲ執ラシメ自由ニ之ヲ辭スルヲ得セ
シメス或ル期限間虐使スルカ如キハ是レ實ニ勞役ノ賣買ニアラスシ
テ人身ノ賣買ナレハ法律ハ之ヲ禁スル所以ナリ

左ニ記載アル所ノモノハ人身ノ賣買ニ似テ非ナルモノナレハ法律上
之ヲ行フヲ許シタルモノナリ
一農工商ノ諸業習熟ノ爲メ弟子奉公爲致候儀ハ勝手ニ
候得共年限滿七年ニ過クベカラサル事
但雙方和談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手タルベキ事

○農工商ノ諸業ヲ習熟セシムルカ爲メ弟子奉公セシムルハ我國古來
ノ慣習ニシテ固ヨリ人身賣買トハ其性質ヲ異ニスルモノナレハ法律
ハ之ヲ禁セサルナリ然リト雖モ其年限余リ久シキニ涉レハ或ハ賣買
ト其結果ヲ同フスルノ弊ヲ生スルヲ以テ其年限ハ七年ニ過クルヲ
得スト定メタルモノナリ然レトモ雙方共ニ和談行届キタル以上ハ更
ニ其年限ヲ延スモ其自由ニ在ルモノナレハ法律ハ之ヲ許シテ禁セス
唯其期限未ダ七ケ年ニ達セサルニ雙方協議シテ其季ヲ延スヲ許ス
トキハ其期限ハアレトモ無キト一般ナレハ七ケ年經過シタル後更ニ
協議シテ其季ヲ延スヲ得ルモ期限ノ未ダ達セサルニ改約スルハ之ヲ
許サ、ル者ナリ
又本文ニハ七ケ年ヲ經過シタル後其期ヲ延スヲ得ル旨ヲ定メテ其
期ヲ減スルヲ決定メスト雖モ之ヲ減シ得ヘキハ固ヨリ論ヲ減タサル
ナリ唯之カ爲メニ授業師ノ損害ヲ生スル如キ場合ニ於テハ之ヲ償ハ

サルヘカラサルナリ

一平常ノ奉公人ハ一ケ年宛タルベシ尤モ奉公取繼候者ハ證文可相改事

○此條ハ通常ノ奉公人ノ期限ヲ定メタルモノニシテ即チ其期限ハ一ケ年ニ過シルコトヲ許サ、ル者ナリ然レトモ其期限ヲ更ニ繼續スルハ決シテ法律ノ禁スル所ニアラスト雖モ此場合ニ於テハ更ニ其奉公證文ヲ書キ改メサルヘカラス豫シメ數年間奉公ノ約ヲ結ヒ置クコトヲ許サ、ルモノナリ其理由ハ前ノ解釋ヲ以テ推知スベシ

一娼妓藝妓等年季奉公人一切解放可致右ニ付テノ貸借訴訟ハ總テ不取上事

○此條ハ藝娼妓ノ年季奉公人ヲ解放スヘキ旨ヲ定ムル者ニシテ從來藝娼妓ナルモノハ奉公人ノ名義ヲ以テスルモ其實人身賣買ナルヲ以テ一切解放スベシト定メタルモノナリ且ツ人身賣買ハ法律ノ禁スル

所ノモノナレハ法律ヲ犯シタル契約ハ無効ナリトノ理由ニ基キ之ニ關スル訴訟ハ之ヲ受理セラレサルモノナリ

右ノ如ク人身賣買上ニ關シ堅ク禁止ノ法律ヲ設ケラレタリト雖モ之ヲ犯シタルモノ、制裁ヲ定メラレサルカ故ニ現ニ之ヲ犯スモノアルモ恐クハ罰スルコト能ハサルベシ故ニ立法者速ニ其制裁ヲ規定セラレシコトヲ希望スルモノナリ

第二款 人身書入ノ禁 明治八年八月十二日 第百二十八號布告

金錢貸借ニ付引當物ト致候ハ賣買又ハ讓渡ニ可相成物件ニ限リ候ハ勿論ニ候處地方ニ據リ間ニハ人身ヲ書入致候者モ有之哉ノ趣右ハ嚴禁ニ候條此旨布告候事
但期限ヲ定メ工作使役等ノ勞力ヲ以テ負債ヲ償フハ此限リニアラス

○此條ハ人身書入ヲ禁スルモノニシテ凡ソ金錢ノ引當トナスヘキモ

ノハ其目的タル萬一金錢ノ返濟ヲ怠リタルトキハ之ヲ賣却シテ以テ其負債ヲ辨償セント豫約スルニアリ故ニ本文ノ如ク賣買又ハ讓渡スルヲ得ヘキモノニアラスノハ抵當物トナスヘカラサルハ勿論ナリ然レニ人身ヲ書入ル、モノ、如キハ宛カモ之ヲ物品ト同一視スルモノニシテ其倫理ニ反スル彼ノ人身ヲ賣買スル者ト毫モ異ナルコトナシ是レ之ヲ禁スル所以ニシテ其理由ハ第一款ニ詳カナレハ茲ニ贅セス

第三款

夫ノ肯セサル離婚

明治六年五月第百六十二號布告

夫婦ノ際己ムヲ得サルノ事故アリテ其婦離婚ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯セス之カ爲數年ノ久シキヲ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不少候自今右様ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親族ノ内附添直ナニ裁判所ヘ訴出不苦候事

○本法ハ夫ノ肯セサル離婚ノ事ヲ規定スルモノナリ夫レ婦ノ一タヒ

夫ノ家ニ嫁スルヤ再ヒ他人ニ嫁セサルヲ誓ヒ貞操信實ヲ以テ相愛シ相親ニ決シテ他心アルヘカラス加之百事夫ノ命ニ從順シ敢テ苟クモ自己ノ意見ヲ主持シ相闘クコアルヘカラサルナリ故ニ法律ニ於テモ有夫ノ婦ヲ無能力者ト定メ之ニ一己獨立ノ權利ヲ有セシムルコト許サ、ルナリ若シ然ラスシテ夫婦共ニ對等ノ權利ヲ有スルニ至リテハ之カ爲メ一家ノ和同破レテ忽チ社會ノ秩序紊亂スルニ至ラン然リト雖モ婦ノ無能力タルハ完ク一家ノ和同ヲ維持セントスルノ精神ニ出ル者ナレハ一タヒ結婚ヲ爲スヤ之カ爲メ終身婦ノ人權ヲ剝奪スルモノニ非ス一朝離婚ヲ爲シ夫婦タルノ關係ヲ斷絶スルニ至リテハ忽チ完全ノ人權ヲ回復スルヲ得ルハ論ヲ待タサルモノナレハ縱令夫婦ノ際ト雖モ夫ノ承諾セサル以上ハ離婚ヲ欲スルモノ之ヲ得ヘカラサルモノトセハ婦ハ宛カモ結婚ノ爲メニ終身人權ヲ剝奪セラル、ト同一ノ不幸ヲ蒙ルニ至ラン豈ニ斯クノ如キ理アランヤ

右ノ如キ理由ナルカ故ニ夫婦ノ際己ムヲ得サル事故即チ到底夫婦タルノ關係ヲ保維シ永シ借老ノ契リヲ結フ能ハサルノ情實アリテ其婦離婚ヲ請フト雖モ夫ハ不當ニモ其請求ヲ承諾セス之カ爲メ在舊數年ノ久シキヲ經テ老年ニ及ヒ復タ他ニ嫁セントスルモ其期ニ後レ終身ノ目的ヲ誤リ人民固有ノ權利ヲ妨害スルモノ蓋シ亦少カラサルベシ若シ自今右ノ如キモノアルニ於テハ婦ノ父兄弟或ハ親族ノ内其婦ノ附添トナリ裁判所ヘ離婚ノ訴ヲ爲ストヲ得ルナリ

余ハ本法ノ釋義ヲ終ルニ臨ミ仍ホ一言以テ讀者ニ告ケサルヲ得サルモノアリ夫ノ不當ニシテ婦ノ離婚ヲ承諾セサルトキハ之ヲ裁判所ヘ訴ヘ出ルヲ得ルハ是レ自然ノ道理ニシテ天賦ノ權利ノ然ラシムル所ナレハ法律アリテ而シテ後得タルモノニアラサルナリ故ニ本法ハ婦ニ斯クシテ如キ權利ヲ有スルモノナレハ決シテ夫ノ壓制ヲ甘受スルニ及ハサルコトヲ示スニ過キサルナリ

第三十二章

結婚離婚ノ効

明治八年十二月太政官第三百九號達

婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離婚離縁縱令相對熟談ノ上タリトモ雙方戸籍登記セサル内ハ其効ナキモノト看做スヘク候條右等ノ届方等閑ノ所業無之様精々説諭可致置此旨相達候事

○本法ハ結婚離婚ノ効力ヲ規定スルモノニシテ罰則ニ係ルモノニアラスト雖モ然カモ最モ緊要ニシテ頗ル法律家ノ議論ヲ免カレサル所ノモノナレハ茲ニ之ヲ解釋シテ以テ讀者ノ參考ニ供スルハ決シテ無益ノ勞ニ非スト信スルナリ

本法ノ意味ヲ約言スレハ養子養女ノ取組若クハ結婚離婚ヲ爲スト雖モ未タ雙方ノ戸籍簿ニ其事ヲ登録セサル以上ハ其事ハ一人一己ノ私事ニ止マリ世間一般ノ人ニ對シテ其効ヲ生セスト言フニ在リ

甲論者ハ之ヲ釋シテ曰ク夫レ養子女ノ取組若クハ結婚離婚ノ如キハ

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○結婚離婚ノ効

所謂公式契約ニシテ戸長役場ニ備へ置キタル戸籍簿ニ其事ヲ登録セサル以上ハ決シテ其効ヲ生じサル所ノモノナレハ例ヘハ實際夫婦ノ姻ヲ結ヒタルニモセヨ其婦ハ尋常一般ノ處女ト同一視スヘキモノナレハ其婦他人ト私通ヲ爲スト雖モ犯姦ヲ以テ論スルヲ得ス何トナレハ自ツカラ本法ノ命令ヲ怠リタレハナリ是レ本法ノ設ケアル所以ナリト

乙論者ハ曰ク法律ノ精神タル婚姻養子ノ取組等ヲ爲スニ當リ雙方ノ熟談ノミコテハ一概ニ之ヲ夫婦父子ト見ルヘカラサル旨ヲ示シタルモノナリ故ニ若シ既ニ婚姻ヲ行ヒ親戚近隣モ之ヲ認許セシニモ拘ハラズ法文ニ拘泥シテ凡人ヲ以テ論スルハ頗ル不當ノ解釋ニシテ實ニ人類社會ノ基本タルヘキ一家親族ノ大倫ヲ破却スヘキ法律ト謂ハサルヲ得ス立法者豈ニ斯クノ如キ不當ノ法律ヲ設クルアランヤ苟クモ斯クノ如クナレハ其皮想ヲ論シテ未タ其實ヲ論セサルモノト謂ハサ

ルヲ得ンヤ故ニ縱令其登記ヲ怠リシモノト雖モ親戚及近隣ノ者モ夫婦若クハ養父子ト認メ裁判官ニ於テモ其實アリト認定スルニ足ルヘキモノハ戸籍ノ登録ヲ怠ルモノト雖モ仍モ夫婦若クハ養父子ヲ以テ論セサルヘカラスト

右甲乙論者ノ主持スル所ノ説ハ各一理ナキニ非スト雖モ然カモ甲論者ノ説ハ法文ニ拘泥シテ事實ノ如何法問ハサルモノナレハ未タ以テ法ノ正解ヲ得タルモノト謂フヘカスサルナリ又乙論者ノ説ハ法理ヲ穿テ實際ヲ鑑ミ頗ル其當ヲ得タルモノト雖モ余ハ未タ之ニ從フ能ハサルモノアリ何トナレハ凡ソ契約ハ雙方ノ合意即チ承諾ニヨリテ成立スヘキハ一般法理ノ原則ナリト雖モ彼ノ地所家屋ノ賣買質入書入ノ如キハ公式ノ法ニヨリ戸長役場ニ帳簿ニ登記セサル以上ハ其契約ニ關係セザリシ第三個人ニ向テ其効ヲ生スルヲ得ズ決定メテ

彼モ之ヲ其結約者雙方ノ間ニテ充分ニ効力ヲ生スヘキハ

論ヲ埃タス決シテ公式ヲ經スト云フヲ口實トシテ其賣買質入書入ヲ無効トラシムルヲ得サルヤ明ラカナリ今婚姻若クハ養子女取組ノ事ヲ雙方ノ戶籍ニ登記セサル以上ハ之ヲ無効ナリト定メタルハ其理宛カモ地所賣買質入書入ト相異ナルコトナカルヘキナリ故ニ夫婦若クハ養父子ノ間ニ在リテハ雙方ノ戶籍ニ登記セサルモ到底夫婦若クハ養父子タルノ關係ヲ免ル、コトヲ得サルハ論ヲ埃タサレトモ他人ニ對シテハ其効ヲ生セサルヤ明ラカナリ然リト雖モ他人ニ對シテハ概シテ其効ナシト斷定スヘカラス其事實ヲ知ラサル者ニ對シテ其効ヲ生セサルモノト謂ハサルヲ得ス故ニ乙論者ノ如ク親戚近隣ニ於テ夫婦或ハ養父子ト認許スルモノト雖モ尙ホ其事實ヲ知ラサル者ニ對シテハ夫婦或ハ養父子ヲ以テ論スルヲ得サルベク又親戚近隣ノ認許セサルモノト雖モ其雙方ノ間ニ在リテハ其効アルモノトス故ニ本法ノ主旨ヲ約說スレハ雙方ノ戶籍ニ登記セサル以上ハ其事實ヲ知ラサル第三

ノ人即チ他人ニ對シテ其効ヲ生セス若シ第三ノ人其事實ヲ知ルニ於テハ充分ニ其効ヲ生スルト云フニ在リ

余ハ余ノ說ノ正確ナルヲ證セシメカ爲メ公式ヲ要スベキ賣買ニ關シ登記ノ手續ヲ忘リタルモノ第三ノ人ニ對シ其効ヲ生スルト否トノ區別ヲ論シタル「ボアソナード」氏ノ說ヲ左ニ抄出シテ讀者ノ參考ニ供セント欲スルナリ

氏曰ク(前卷)前段陳述シタル所ハ唯締約者雙方ノ間ニ於テノ事ナリ因テ其締約者ト雖モ登記ノ手續ヲ履行セズンハ他人ニ對シ其契約ノ事ヲ申立ル能ハス蓋シ法律ニテ物ノ賣買セラレシテ諸人ニ知ラシメント欲シテ登記ノ制度ヲ設ケ此手續ヲ履行セサル者ハ他人ニ對シ其權利ヲ申立ルヲ得スト規畫シタルナリ茲ニ一箇ノ不動產有リテ之ヲ其所有者ヨリ買受ケタル二人有リトセンニ若シ其一人登記ノ手續ヲ執行シ他ノ一人ハ之ヲ執行セサレバ即チ其登記ノ手續ヲ執行シタル

者假令買受ノ契約去他方一人ヨリ後ニ爲シタル時下雖正眞ノ所有者ト爲ルを得ヘ然レトモ余ハ之ニ因テ登記手續ヲ爲サ、ル者ハ契約ヲ爲ス下雖正他人ニ對シ物ノ所有者トラオト云フニ非ス此者ハ履行スヘキ手續ヲ履行セズシテ世上ニ其契約ノコトヲ公布セサルニ付其罰ニテ其權利ヲ申立テ得サル迄ノコトナリ此說ノ効果ハ諸家ノ主持スル所ニ反セリト雖正余ハ敢テ躊躇セサルナリ諸大家ノ主持スル所ハ登記ノ手續ヲ執行セサル者ハ如何ナル場合ニ於テモ決シテ他人ヨリ其所有者ト見做サ、ルヲ得スト云フニ在リ余今此二論ノ大ニ異ナル効ヲ生スルヲ明解センカ爲メ左ノ二例ヲ擧ゲン

茲ニ甲乙丙ノ三人有リ甲者ハ買主乙者ハ賣主ニテ丙者ハ證人ナリ甲者ノ乙者ヨリ不動産ヲ買受ケシ後丙者又更ニ之ヲ乙者ヨリ己レニ買受ケ又更トセシニ若シ余ノ說ニ從テ其處置ヲ施サハ假令丙者ニ於テ甲者ヨリ先ニ登記ノ手續ヲ執行サト雖正丙者ハ既ニ賣買有ルヲ目撃

セシヲ以テ丙者ヲ退ケ而シテ甲者ヲシテ其不動産ノ所有者トシム可キナカシ又諸家ノ說ニ從ハ、丙者ハ既ニ賣買有ルヲ知リタリトモ甲者ニ先シテ登記ノ手續ヲ爲シタルガ故ニ之ヲ以テ物ノ所有者トナサ、ルヘカラス此ノ登記ノ事ニ管スル論理ハ極メテ子解スルニ難ク隨テ諸君モ能ク論理ヲ納得セサルヘキニ付余カ輩ニハ將來於テモ機ニ乘シ處ニ隨テ度々之ヲ開陳セントス然レトモ所有權ノ合意ニ由テ轉移スト云フ說ハ近世ノ新說ナルヲ以テ諸君ハ必ズ之ヲ忘レサルニ注意スベシ

合意ニテ所有權ノ轉移ナルハ右ニ陳述シタルガ如ク少シモ其區別有ル無シ因テ動産讓受ケノ約ヲナシタル者モ直チニ其所有者ト成リ古法ニ於テノ如ク其引渡シヲ受ケテヨリ始メテ其所有者トナルニハアラサルナリ然レトモ動産ニ付テハ登記ノ制度ヲキチ以テ例ヘバ甲者已ニ乙者ヨリ其動産ヲ買受ケ未タ之ヲ引取ラサルニ丙者更ニ之ヲ乙

者ヨリ買受ケテ持去ラハ如何處斷シテ可ナラン乎佛蘭西民法ニ依レ
 ハ之ヲ先ニ持去リシ者ヲ以テ其所有者ト決セサルヘカテ決シテ其
 買受ケノ前後ヲ論スルニ及ハサル也但シ之ヲ先ニ持去リシ者ト雖也
 其真意ニ出テサルニ於テハ別段ナリトス是レ第千四百四十一條ノ明言
 スル所ナリ此場合ニ於テハ之ヲ持去リシ者瞬間ノ期滿得免ニテ其持
 去リシ物ヲ得シト云フ余ハ前文ニ於テ登記上ノ事ニ管シ諸家ノ説ニ
 反スル説ヲ述ヘシカ其論理ヲ取リ以テ今余ノ此ニ陳スル所ノ事例ニ
 當ツレハ余ノ説ヲシテ大ニ鞏固ナラシムルヲ得ヘシ蓋シ諸家ノ論理
 ヲ取リ而シテ之ヲ此處ニ適施シ少シモ成文法ノ條規ニ拘泥セサル時
 ハ情ヲ知テ他人ノ既ニ約束シタル動産ヲ買取り而シテ之ヲ惡意ニテ
 持去リシ者ト雖モ持去リシ以上之ヲ其所有者ト爲サ、ルヲ得サル也
 是千四百四十一條ノ述フル論理ト異ナルニアラスヤ若シ又余ノ説ヲ用
 フルニ於テハ事ヲ知ラスシテ其真意ニテ持去リシ者ノ外其所有者ト爲

スヲ得ス故ニ余ノ説ハ成文法ノ理ト協合ス何トナレハ情ヲ知テ事ヲ
 行ヒシ者ハ法律ノ保護ヲ得スト爲スニ在レハナリ

○教育令

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校幼稚園書籍館等ハ公立私立ノ別ナシ皆文部卿ノ監督内ニア

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門學校農學校商業學校職工學校其他各種ノ學校トス

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ修身讀書習字算術地理歴史等ノ初步トス土地ノ情

第三十三章 教育

第一欸 教育令禁令 明治十三年十二月二十八日第五十九號布告據錄

明治十二年九月第四十號教育令左ノ通改正候條此旨布告候事

第一節 痘瘡ヲ終ヘサル者

第四十四條 凡ソ兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歷タルモノニアラサレハ入學スルヲ得ス

○本條ハ種痘或ハ天然痘ヲ歷サルモノハ學校生徒タルヲ得サル旨ヲ定ムル者ナリ夫レ天然痘ハ最モ恐ルヘキ傳染病ニシテ一タヒ之ニ感染スルニ至リテハ婉麗トテ凌クノ面貌モ忽チ腐蝕セラレテ醜惡ニナ欺クノ面貌トナリ甚ダシキニ至リテハ之カ爲メ性命ヲ失フモノ亦擲ナカラズ然リ而シテ此病ヲ感染スルハ兒童ヲ以テ最モ多シトス故ニ學校生徒中一人此病ニ罹ルモノアレハ其害毒ハ忽チ滿校生徒ニ及ホ

況ニ隱ヒテ舞唱歌體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊

ニ女子ノ爲メニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ

但己ムヲ得サル場合ニ於テハ修身讀書習字算術地理歴史ノ中地理歴史ヲ減スルヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教

シ勢ヒ底止スル所ヲ知ラサルニ至ルヤ玉料ヲ知ルヘカラズ是レ本條ニ於テ種痘或ハ天然痘ヲ經タルモノニアラサレハ入學スルヲ得スト定メタル所以ナリ

第二節 傳染病ニ罹ル者

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルヲ得ス

○本條ハ傳染病ニ罹ルモノハ一切學校ニ出入スルヲ禁シタルモノニシテ之ヲ禁スルハ獨リ學校生徒ニ止マラス何人ト雖モ該病ニ罹ル者ハ決シテ之ニ出入スルヲ許サハル者ナリ而シテ其理由ハ前條ト同シク生徒并ニ其他ノ者ニ傳染スルノ害ヲ豫防スルニ在ルモシナレハ此點ニ付テハ別ニ解釋ヲ下サス

第三節 體罰ヲ加フルヲ禁ス

第四十六條 凡ソ學校ニ於テハ生徒ニ體罰〔毆チ或ハ縛スルノ類〕

員ヲ養成スル所トス
 第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所トス
 第八條 農學校ハ農耕ノ學術ヲ授クル所トス商業學校ハ商賣ノ學業ヲ授クル所トス職工學校ハ百工ノ職藝ヲ授クル所トス
 以上數條掲ケル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得ベシ
 第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡兒童ヲ教育スルニ足ル

ヲ加フヘカラス
 ○本條ハ生徒ニ體罰ヲ加フヘカラサルコト示ス者ナリ夫レ學校教師ハ生徒ノ美德ヲ涵養シ智識ヲ啓發シ兼テ善行ヲ勸誘スル所ノモノナレハ若シ生徒中其命令ニ背キ惡事ヲ行フモノアルニ當リテモ懲罰之ヲ誨諭スルニ止マリ決シテ之ニ體罰ヲ加フルコトヲ許サ、ルナリ何トナレハ則チ身體ハ最モ貴重スヘキモノニシテ已レ法律ヲ犯シテ刑罰ニ關ル、ニ非サルヨリハ決シテ他人ノ爲メニ身體ヲ束縛セラレ若クハ毆打ヲ受クルコトナカルベク又已レ故ナク他人ヲ束縛若クハ毆打スルコトヲ得サルハ自然ノ道理ナレハナリ然ルニ學校教師タルモノ生徒ニ體罰ヲ加フルトキハ宛ガキモ生徒ニ刑罰ヲ施スニ等シク教師ハ決シテ人ニ刑罰ヲ施スノ權ナキヲ以テ本條ニ於テ之ヲ禁スルモノナリ右ノ理由ナルカ故ニ學校教師タルモノ生徒ニ體罰ヲ加ヘタルトキハ本條ニハ之ヲ罰スルノ明文ナシト雖モ必ズ刑法ニ依リテ處斷セラレ

ヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ
 但シ本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可ヲ經タルトハ別ニ設置セサルモ妨ナシ
 第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメ、ンカ爲メニ小學校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ、日長ヲ以テ其員ニ加フヘシ
 但人員ノ多寡給料旅費職務取扱諸費等ノ有無及其額ハ區町村會之ヲ評決シ、府知事

○第三編 公益ニ關スル罰則 ○教育
 九百三十九
 第二款 學校生徒ノ退學者ハ入校ヲ禁ス 明治十六年十一月二日 文部省第十八号達
 當省直管官立學校生徒及公立學校生徒中不都合ノ行爲アリテ退學セシメタル者ハ其情狀ニ因リ當省直轄官立學校及府縣立私立ノ學校ニ入學スルコトヲ禁スヘシ此旨相達候事
 但本文ノ處分ヲ要スルトキハ其族籍姓名事由ヲ具シテ當省ニ申出ヘシ
 一 本法ノ解○退學ノ上他ノ官私立學校ヘ入學スルヲ禁セラレタルトキハ終身之ヲ許サ、ル乎
 二 退學生ニ他ノ學校ニ入學スルヲ禁セントスルトキハ其處分ヲ爲シタル後文部省ヘ届出ツヘキ乎將タ其處分ヲ爲スニ先チ之